



社会とのスタンス - 高校生の社会意識 -

要約

1章 調査のデザイン

① 調査のデザイン

現代の高校生の関心は、未来より現在、自分のことや身近なことに閉塞しているように見えるが、広い社会や異文化や地球環境の問題に向かっていないのだろうか。あるいは、新しい社会意識の芽生えやボランティア活動への関心は生じているのだろうか。現代の高校生の社会意識、社会観を実証的に明らかにしようと試みた。

② 調査の方法

調査回答者は、1都4県、6つの普通科の高校（公立5校、私立1校）の生徒、1,699名。その内訳は、性別では男子903名、女子792名、不明4名。学年別では、1年891名、2年649名、3年155名、不明4名である。

調査の時期は、1997年10月～11月である。

2章 国際感覚

① 高校生の国際化

高校生の約3割が海外に行った経験をもっている。また外国に「旅行で行きたい」と思っている高校生が8割強、「留学や仕事で行きたい」と思っている高校生が5割いる。さらに、「外国人に英語で道を教える」「外国で1人で買い物をすることができると5割強、「ホームステイできる」4割強、「留学できる」2割強と、過去のデータと比較して、高校生の国際化の意識や能力は高くなっている（P.16 図2-1・2、P.17 表2-2）。

② 高校生の外国観

「旅行したい国」は、欧米を中心に、非常に多岐にわたっている。それに対して、「留学したい国」と「友だちをもちたい国」は、圧倒的にアメリカが多い（7割強）。全体に欧米志向が強く、アジアやアフリカへの関心は薄い（P.19 表2-3）。欧米とアジアの国々のイメージを自由回答してもらったものをみても、欧米については具体的な事例や価値判断を下している者が目立つのに対して、

アジア諸国に対しては、漠然としたイメージやステレオタイプ化したイメージを抱く者が多い。

③ 高校生の異文化に対する構え

異文化に対する構えは、「適応・同化」型と「多文化共存」型が、ほぼ半々に分かれる（P 21 表 2 - 4、図 2 - 3）。異文化を積極的に受け入れる「多文化共存」型の生徒は、新聞の政治・経済面を読み、国際社会への志向性が高く、「従軍慰安婦問題」「住民投票問題」「北朝鮮への食料支援」など現代の新しい社会問題への関心が高い（P 22 表 2 - 5・6、P 23 表 2 - 7）。

3章 日本への評価

① 日本のイメージ

日本についてのイメージとして、「生活水準が高い」「治安がよい」「住み心地がよい」「民主化が進んでいる」と5割以上が感じている。一方、「男女平等」「自然が美しい」「自由」「生命尊重」「親切」についての評価は低い。「無責任な政治家が多い」「学歴社会」といった批判的評価も高い（P 26 図 3 - 1）。

② 社会への関心度と参加意欲

現代の社会問題に対しては、「オウム裁判問題」5割、「北朝鮮への食料支援」「住民投票」5割弱、「従軍慰安婦と教科書」3割、「諫早湾の干拓問題」2割強、「ビッグバン」2割弱が関心をもっている（P 29 図 3 - 3）。

社会的争点になっていることへの意見を聞くと、新しい方向への賛成率がきわめて高い。「老人の在宅介護」「臓器移植の推進」9割、「安楽死の公認」8割、「外国人労働者の受け入れ」8割弱、「飛び級制」6割弱、「夫婦別姓」5割と、半分以上が賛成している（P 30 表 3 - 2）。

さまざまな社会的活動やボランティア活動（在日外国人との交流会、福祉ボランティア、環境保全運動、災害ボランティア、海外平和維持ボランティア）への参加意欲はきわめて高く、それぞれ6割弱～7割弱の参加希望率。（P 32 図 3 - 5）。

③ 日本観と社会意識

日本という国を否定的にとらえる生徒より、「自然が美しい」あるいは「民主化が進んでいる」と日本を肯定的にとらえる生徒の方が、社会的な関心が高く、社会的活動やボランティア活動への参加意欲も高い（P 36 表 3 - 4）。

④ 社会意識の高低と社会参加

現代の社会問題に高い関心をもつ生徒は、社会的活動やボランティア活動への参加意欲も高く、日本に対しても比較的よいイメージをもっている（P 38 表 3 - 5）。

このように、日本という国に対して批判的な見方をすることが、社会意識の高さを示すという旧世代の考え方が、今や通用なくなっていることがわかる。現代の高校生の中でも、社会意識が高く参加意欲のある生徒は、日本の豊かさや住み心地のよさを高く評価している。

4章 環境問題

① 環境問題への関心

全体に環境問題への関心は高い。ふだんから環境や自然保護の意識をもっている者はほぼ5割いる。男女差はほとんどない。学校別では、東京の進学校のA校の生徒は、環境保護の意識と行動の両面で高い傾向がみられる（P.40 表4-1、図4-1、P.41 表4-2）。

ふだんの自然とのかかわりは、「1人で自然の景色を眺める」が3人に2人、「ペットを飼う」4割、「花を部屋に飾る」女子5割、「花や植木を育てる」女子4割である（P.41 表4-3、P.42 図4-2）。

② 自然体験

直接自然を体験する割合は低い。「オリエンテーリング」37.0%、「田植え・稲刈り」26.6%、「自然観察の記録や日誌」24.4%などである。これらは学校行事として行うことも多い。首都圏の生徒より、地方の生徒の方が自然体験をする率は当然ながら高い（P.43 表4-4）。

③ 地域への評価

自分の住んでいる町の生活環境や住民の環境意識に対して、環境の悪化への懸念を強く表明している。「空き缶やゴミの始末の悪さ」82.3%、「車の排気ガスの増加」79.9%、「子どもの遊び場の減少」70.8%、「空き地の宅地化」70.3%など、地方より首都圏の生徒の方が危機感を強く感じている（P.44 表4-5）。

④ 自然にやさしい生活スタイルへの努力

ふだんとしている自然にやさしい生活のスタイルは、「ゴミを分別して出す」69.6%、「電気をこまめに消す」58.6%、「清涼飲料はコーラよりウーロン茶」52.5%、「再生紙の利用」50.2%などである。男子は、環境保護への配慮の足りない行動が目立つ。それに対して女子は、環境保護や自然へのやさしい態度をもちあわせている（P.46 図4-3、P.49 図4-4）。

⑤ 経済開発か環境保護か

経済開発と環境・自然保護を比べた場合、環境・自然保護派5割、経済開発派1割、中間派4割という割合である。環境保護意識の高い高校生ほど、ふだんから自然とのふれあいや自然にやさしい生活のスタイルをとっている。そして地球環境の将来についても、深刻な受けとめ方をしている。他方、将来の地球環境に対して楽観的な者ほど、環境保全より経済開発を優先する社会意識をもっている。日常的にも環境破壊につながる行動に無頓着である。高校生の中に、教科書的な知識のレベルではなく、生の自然体験や自然とふれあえる感性を育てていくことが大切である（P.47 表4-6、P.48 表4-7、P.50 図4-5、P.51 表4-8、P.52 図4-6）。

5章 ボランティア活動

① 高校生のボランティア活動の実態

ボランティア活動へ参加したきっかけは、「学校を通しての課題や行事」が一番多く43.6%、次いで「学校を通して希望して」が25.3%、「団体やグループを通して」19.5%、

「自分で個人的に」11.7%と、個人より学校を通してのものが多し。活動の経験日数は、1日～3日という短いものが全体の4分の3を占める。活動内容は、「地域のゴミ拾いや清掃」「空き缶や廃品回収」など自然や環境を守る活動が多い（P.54 表5-1・2）。

② 高校生のボランティア活動の男女差

ボランティア活動の経験（男子40.9%、女子49.0%）も、実際にやってみた後の充実感も、また「機会があればまたやりたい」といった意欲（男子15.2%、女子34.8%）も、すべて、女子が男子を上回っている（P.55 表5-3、P.56 図5-1）。

③ 学校を通してのボランティア活動

ボランティア活動の未経験者も、「ぜひ・できたらやりたい」と55.2%が答えている。学校にボランティア活動の機会を提供してほしいという生徒からの希望も多い（65.9%）。学校を通して課題や行事でボランティア活動をした生徒の充足感（80.5%）は、個人で自発的にやった生徒の充実感（90.5%）まではいかないがかなりのもので、学校がボランティア活動を取り入れる意味がある。ボランティア活動を取り入れている学校では、生徒たちの意識もボランティア活動に対して肯定的、積極的になる傾向がある（P.57 表5-4・5、P.58 表5-6、P.59 図5-2・3、P.60 表5-7）。

④ 高校生のボランティア活動観

ボランティア活動の自発性を支持する者は7割（71.2%）、ボランティア活動の無償性

を支持する者も7割（72.2%）いる。「ボランティア活動は自分自身のためにするものだ」という自己充足的価値観をもつ者は6割（58.4%）、「社会の一員としての義務」も6割弱（57.6%）いる。「高校生ももっとボランティア活動をすべきだ」と4人に3人は考えていて、どのようなきっかけであれ、ボランティア活動への参加経験者はボランティア活動を積極的に支持している。学校を活動の窓口とするボランティア活動も意義が大きいといえよう（P.63 表5-8、P.65 表5-9）。

6章 友人関係

① 親しい友人との関係

クラス内の親しい友人の人数は、「2～3人」「5～6人」が6割近くを占める。また「10人以上」も20.5%いる。心の内面に深く入りこまず、表面的な部分でふれあう関係も少なからず存在する（P.67 表6-1）。

② 友人とのつきあい方

「けがをして松葉づえで歩く友人」にあたたかい手を差し伸べる高校生は多い。「親しい友人の場合」87.5%、「親しくないクラスメートの場合」40.3%。しかし、自分がけがをした場合は「何もしてくれなくてもいい」24.3%と、ギブアンドテイクの見返りを期待していないし、人に甘えようという気持ちは少ない（P.69 表6-2）。

女子は男子より親しい友人に対してより強い思いやりを示す（ただし「親しくないクラスメート」に対しては男子以上に冷淡）。男女とも、学年が上がるとクールな者が増える（P.70 表6-3、P.71 表6-4）。

③ 友人やクラスに対してできること

生徒たちは、友人にあたたかい思いやりの気持ちを持ち、時には毅然とした態度をとる（友だちに意見する、いじめを止めるなど）、集団においてもそれなりに責任のある役割（クラスの仕事）を引き受けようとしている（P.72 表6 - 5）。

女子は男子以上に友人やクラスに積極的な態度が目立つ。しかし、女子生徒に対する教師の高い期待（クラスのリーダーにつけるなど）がないと、女子の積極性は消滅する（P.73 図6 - 1、P.75 表6 - 6）。

生徒は、われわれの予想以上に、友人に対してより深くあたたかく接し、集団の中での役割に積極的であった。したがって、生徒の思いやり、やさしさ、積極性はより上位の社会に広がる可能性は大きいといつてよいであろう。

7章 社会意識の広がり

現代の青少年は、身近なことや今楽しいことを最優先している、つまり「公」より「私」、「未来」より「現在」を大切に生きているといわれることが多い。それらは果たして本当なのだろうか。

① 新しい社会意識

自分や家族といった身近な世界への同一視が強く、学校や地域、国といった、所属していても比較的疎遠な存在に対しては、同一視したり感情移入したりしていないことがわかる。しかし、地球、人類、宇宙といった全人類的、普遍的次元に対しては高い同一視や愛着がみられる。国境を越え、地球規模の世界（社会や自然）に対して、自然に同一視する

感性を高校生はもっている。

学校行事や部活動の試合といった、非日常的な場での盛り上がりに対しては、一体感や愛着を示す。ハレの場の盛り上がりや雰囲気と同化しやすい。

国（日本）に対しては7割が愛着、同一視を表明している。ほどほどの国への愛着、愛国心といったものが、現代の高校生の特徴である（P.77 図7 - 1）。

② 社会意識の男女差

男子より女子の方が、自分、家族、友人、クラス、学校、地域、国、地球、宇宙のすべてに対して、感情的に同一視し、愛着を抱く能力と傾向を有している（P.79 図7 - 2、P.80 図7 - 3）。

③ 社会意識の学校差・学年差

学力偏差値の高い進学校においてクラス、学校への愛着が高くなる。地域への愛着は東京以外の地区で高い。学年が進むにつれ、クラス、学校への愛着が高くなる。国や地球への愛着に学年差は出ていない（P.81 表7 - 1）。

④ 新しい社会意識と教育

おとなに失われた理想主義や自由で生き生きしたものを、高校生の社会意識や活動の中にもみることできる。おとなや教師は高校生の真摯な生き方に学びつつ、また野放図に流れる青年の感情に冷静な判断を示し、未熟な知識を導き共に学び協力しあい住みよい社会をつくっていくのが教育の役割であろう。

〔調査概要〕

対象 東京・千葉・富山・福井・福岡の普通
科高校6校(公立5校・私立1校)1
～3年生1,699名(男子903名、女子
792名、性別・学年不明4名)

時期 1997年10月～11月

方法 学校通しによる質問紙調査

〔執筆分担〕

序章・終章

深谷昌志(尚美学園短期大学教授)

1・7章

武内 清(上智大学教授)

2章

西島 央(日本学術振興会特別研究員)

3章

蒲生眞紗雄(東京都立上野高等学校教諭)

4章

穂坂明德(岐阜聖徳学園大学助教授)

5章 - 1～3

小原孝久(東京都立駒場高等学校教諭)

5章 - 4～5

大野道夫(大正大学助教授)

6章

畠山 滋(千葉県立佐倉高等学校教諭)



序 章

青年と社会とのかかわり

1 社会とのかかわりの系譜

モノグラフの場合、テーマの設定は1、2年前にさかのぼる。テーマの話し合いから始まって、テーマや調査項目の設定、調査の実施、そして、集計結果の分析と、マラソンにも似た過程をたどって、報告書の刊行へ至る。

本号のテーマも研究会の席で、高校の先生が「生徒が自己中心的で、社会とのかかわりをもとうとしない」と発言したのがきっかけである。「数が多いとはいえないが、ボランティアなどに関心をもつ生徒も増えた」と反論する声もあり、生徒が社会をどうみているのかに議論が集中した。

本号は高校生が社会とどうかかわっているのかを考えようとしている。高校生に限らず、社会とのかかわりをもとうとしない若者が増加しているような印象を受ける。自分自身やごく親しい友とのことはこだわるが、学校や親戚、地域のことはまったく無関心という若者たちである。

そこで、現代の若者の社会とのかかわりを考えるために、かつての若者が社会とどうか

かわってきたのかを概観することにしよう。

若者という存在がいつ形成されたのかは専門的に多くの論議がなされるところだ。青年とは子どもから成人への過渡期を意味する。子どもではないが、かといっておとなでもない。見方によると、子どもであると同時におとなの面を備えた「境界人」(Marginal Man)が青年となる。したがって、仮に「おとな」を「(おとな)社会」と考えるなら、青年は常に社会との関係の中で存在していたといえよう。

①青雲の志を抱いて = 若者が社会を創る。
司馬遼太郎『坂の上の雲』

日本の近代化は土着の伝統的な文化を切り捨て、急速な西欧化を図る過程にあった。西欧に追いつかない限り、日本の活路は見いだせない時代である。その中で儒教的な教養は価値を失い、西欧的知識の持ち主が尊重されることになった。英語を理解し、西欧の考え方がわかる人々である。実をいうと、それが大変だったのだが、そうした知識の持ち主が

家柄を越えて（といっても、多くは庶民ではなく、下層ではあるが士族）明治の社会をリードしていった。若者たちが希望に燃えて新しい社会を創っていった時代である。小説にモデルを求めるなら、司馬遼太郎の『坂の上の雲』に描かれた若者たちであろう。

②怒れる若者たち = 若者は社会に反発する。石原慎太郎『太陽の季節』

明治も終わりに近づくと、社会の体制が整い、若者の力をそれほど必要としなくなる。社会のしきたりを認めた上で、社会に入ってくることを若者に求める。そうした反面、かつての若者よりはきちんとした教育を受けた彼らは、さまざまな知識や力を備えつつある。そこで、若者は社会に組みこまれることを拒否し、反発を示す。怒れる若者たちである。小説にモデルを求めると、石原慎太郎の『太陽の季節』が一例になる。

③ナイーブな若者たち = 社会と距離を置く。庄司薫『白鳥の歌なんか聞こえない』

日本の場合、怒れる若者の姿が見受けられたのは、昭和40年代の学生紛争までであろうか。安田講堂や浅間山荘事件を最後に若者は怒りをあらわさなくなった。といっても、社会の動きに敏感で、社会のあり方に批判的な態度は保持している。怒りをあらわにしないで、社会と距離を置きながら、ナイーブな感覚で社会を見つめる若者たちである。庄司薫の一連の小説に登場するナイーブな薫くんがその具体例となろう。

④ただよう若者たち = 社会に無関心。田中康夫『なんとなくクリスタル』

昭和50年代の後半に入ると、若者たちは社会に関心をもたなくなり、自分の世界に閉じこもり始める。社会などは自分には関係がない。マイペースで、自分の感覚のままに生きていきたいという、田中康夫の『なんとなくクリスタル』の主人公のように、ただよう若者たちである。

2 高校生の中での分布

これまで若者の系譜を4つに分けて追い求めてきた。平成に入ると、もう一つ、新しい若者像が登場してくる。

⑤ブレイクする若者たち = 若者は自分たちの社会を作る。

既成の社会をダサく、陳腐なものともみなして、自分たちの世界を作って、おとな社会に挑戦する若者たちである。女子高校生に代表される若者の服装や言葉遣い、音楽はそうした挑戦を具現化している。

国際比較的な見地で考えるなら、から
の若者像のモデルを現代の多くの社会で見いだすことができる。発展途上国を訪ねると、青雲の志を抱いて、自分たちが未来を創ると夢に燃えている若者に出会う。そして、のタイプの「怒れる若者」は、現代の韓国がその代表であろうか。ソウルを訪ねた折のほと

んどの機会に、学園ストライキに遭遇した。自分たちが立ち上がらなければ韓国の民主化が進まないと、若者が怒りをあらわして、社会をリードしている構図である。そうした一方、欧米ではかつてより若者が怒らなくなった。の「ナイーブ」か、の「ただよう」かはともかく、社会から距離をとり、自分たちの世界に閉じこもる傾向が強まっている。それと同時に、の「ブレイクする」タイプは欧米でも音楽などの芸術やサッカーなどのスポーツの世界に身を置く若者に見いだされる。

このような若者のタイプは、現代の若者、高校生の中にも認めることができよう。の「青雲の志を抱いて」は、将来に夢をもって、社会的な達成を望む高校生であろう。具体的には進学校に在籍して、専門管理職につくた

めに一流大学を目指す生徒が浮かんでくる。

の「怒れる」高校生はそれほど多いとはいえないが、教師に反発したり、自己主張をもって逸脱行為に走る生徒に具体例を求めうる。そして、の「ナイーブ」は社会に関心をもっているが、それを高校生らしく、ボランティア活動などであらわず高校生に原型を見いださう。の「ただよう」タイプは孤独にテレビゲームやCDの世界で充足感を味わっている生徒であろうか。の「ブレークする」は自分たちの音楽を求め、サウンド活

動をしている生徒やモトクロスやスケボーのようなチャレンジャスなスポーツを行っている生徒であろう。

そこで問題になるのは、からまでの若者の社会へのスタンスが高校生の中にどのように分布しているかであろう。本モノグラフでは「日本観」や「環境問題」「ボランティア」など、それぞれ異なる角度から高校生の社会へのスタンスを紹介する。そうした動向を概観した後に、あらためて全体の姿を考えてみることにしよう。

1 章 ||||

調査のデザイン

1 調査のデザイン

おとなが集まり「いまだきの子どもは」という話になると、現代の青少年の非道徳性、非社会性、無気力などが問題として論じられることが多い。豊かな社会の中でぬくぬくと育った今の子どもたちは、ひ弱で、わがままで、他者への思いやりに欠け、社会性を欠いたまま成長し、さまざまな社会問題（たとえば援助交際、中学生ナイフ事件）をひきおこしているとの認識が一般的である。

これまでの『モノグラフ・高校生』でも、高校生の社会意識、社会観に関連して、次のようなことを明らかにしてきた。

・Vol .6 「高校生の政治意識」(1982年)

高校生は政治を直観的に鋭くとらえているが、それはあくまで傍観者としての態度であって、自分自身が政治に関与することについてはきわめて消極的な態度を示している。政治について、ダーティなイメージをもっている。

・Vol 23 「若者は保守化したのか」(1988年)

若者の間にフィーリング感覚にこだわる傾

向が目につく。それが現在を大事にし、自分の環境をかえたくないという気持ちと重なり、保守的な行動スタイルとなる。

・Vol 29 「高校生の国際感覚」(1990年)

国際化が叫ばれているのに高校生の外国への関心は薄い。とりわけアジアへの関心が低い。

・Vol .39 「『自立』の遅れがちな高校生」(1993年)

高校生はおとなになることを自覚し、おとなになったら、きちんと責任を負える行動をしようとしている。そうした自覚はみられるものの、日常生活では親に頼りきった毎を送り、自立の遅れが心配される。

・Vol 47 「民主主義 - 高校生にとって政治とは」(1996年)

高校生は民主主義のあり方に懐疑的。政治に対する不信感も強い。また、自分から積極的に発言することや責任のある立場に立つことなどを避けようとする。

・Vol 48 「高校生白書」(1997年)

ボランティア活動の経験は3割にすぎず、活動への関心度はあまり高くない。外国旅行の経験者は4人に1人という割合だが、回数は1回が多い。

しかし一方で、命を落とす危険を冒してまで、国際ボランティア活動に参加する青年も出はじめている（中田武仁『息子への手紙』朝日新聞社、1995年）。また国体、甲子園、花園、「全国合唱コンクール」「全国高校生文化祭グランプリ」「仮装大賞」などに出場する高校生の姿には、集団の団結力と青春のエネルギーのほとばしりを感じ、感動的でさえある。

はたして今の高校生は、ひ弱で、無気力で、わがままで、狭い視野しかもちあわせていないのか。それとも秘めた情熱があり、やさしく、しなやかで、広い連帯や共生を求めているのか。そこに、高校教育はどのようにかわっているのか。社会科を中心とした科目は、高校生に深い歴史認識や広い視野を教えているのか。学校行事やクラスの活動は生徒の共同、共生意識を高めているのか。そのような点をこの調査では明らかにしたいと考えた。

具体的には、今回われわれが問題設定の段階で話し合った問題関心、分析視点、仮説は次のようなことである。

- ・どのような日本へのイメージや国家観を

もっているのか。異文化理解、多文化意識はどの程度育っているのか。ナショナリズムの行方は？

- ・高校における教育、とりわけ社会科の授業を通して、高校生の社会意識、社会観はどのように形成されているのか。受験の影響もあり、高校生の歴史知識は断片的で、しっかりとした歴史観、歴史感覚は育っていないのではないか。

- ・環境問題への関心は高い。そしてその関心は具体的な行動へと少しずつ結びついているのではないか。

- ・高校生のボランティア観は？ 学校を通して奨励されるボランティア活動も、高校生のボランティア意識を高めているのではないのか。

- ・自分と他者との関係をどのように考えているのか？ ギブアンドテイクの利害関係で友だちのことを考えているのか。友人への思いやりやささしさが、それより広い関係に一般化していくのか、それとも2人だけの関係や仲よし集団に閉じこめられてしまうのか。

今回はおとなの側、教師の側から、生徒たちの不甲斐なさを嘆き非難するというよりは、生徒たちの考え方や論理を忠実に追いながら、生徒たちの中にある新しい意識、社会観を抽出することに努めた。

2 調査の方法

1) 調査対象校

全国の高校から6校の普通科の高校に調査を依頼した。公私の内訳は公立5校、私立1校である。地域別では、東京都2校（公立1、私立1）、千葉県1校（公立）、福岡県1校（公立）、富山県1校（公立）、福井県1校（公立）である。学力的には中以上の学校とってよいであろう（進研模試、高1の偏差

値を参考にした）

調査対象になった6校のプロフィールおよび特質は次の通りである（表1-1）。

A校；東京都（公立）昭和50年代に創立。大学・短大進学率100%。その地区の公立トップ校。第1志望の生徒が多い。校風は自由で、生徒の自主性が尊重されている学校。

B校；東京都（私立）昭和20年代に創立。大学・短大進学率95%。都内の中堅共学私

立の大規模校（1学年550～600人）第1志望の生徒も多い。スポーツの全国大会出場回数が多い。

C校；千葉県（公立）昭和50年代に創立。大学・短大進学率85%。東京近郊に位置。この地区の中堅校。音楽コースがあり、女子の人气が高い。

D校；福岡県（公立）昭和40年代に創立。大学・短大進学率100%。全学年とも英・数・国の始業前補習、3年生の放課後補習があり進学指導に熱心。体育系の部活動も活発。

E校；富山県（公立）昭和50年代に創立。大学・短大進学率85%。人口増で郊外に新設された。学区内の中堅校。

F校；福井県（公立）大正時代に創立。大学・短大進学率65%。都市郊外にあり近くの子が通う。学区内の中堅校。

2) 調査回答者

学校別の調査回答者数は表1-2の通りである。学校により男女比、学年比に偏りがあることに注意したい。

性別および学年別の回答者数は、表1-3のごとくである。学年によって、男女比が違いため、学年差をみる時は、男女差も考慮してみる必要がある。

（なお、クロス集計の検定はカイ2乗検定を使い、5%水準で有意差のあるものについて、 $\alpha < 0.05$ という数式、あるいは（および）不等号（<>）で示した。）

3) 調査時期・調査方法

調査時期 1997年10月～11月。

調査方法 学校通しの質問紙法。

表1-1 調査対象校の特質

	公立・私立	所在地	学校創立年	大学・短大進学率
A校	公立	東京	昭和50年代	100%
B校	私立	東京	昭和20年代	95%
C校	公立	千葉	昭和50年代	85%
D校	公立	福岡	昭和40年代	100%
E校	公立	富山	昭和50年代	85%
F校	公立	福井	大正	65%

表 1 - 2 調査回答者数

(人)

	全体	性 別			学 年 別			
		男子	女子	不明	1年	2年	3年	不明
A校	78	37	41	0	0	78	0	0
B校	662	398	260	4	658	0	0	4
C校	112	42	70	0	39	37	36	0
D校	418	260	158	0	0	418	0	0
E校	348	132	216	0	113	116	119	0
F校	81	34	47	0	81	0	0	0
合計	1,699	903	792	4	891	649	155	4

表 1 - 3 調査回答者数 (性別・学年別)

(人)

	1年	2年	3年	合計
男子	491	360	52	903
女子	400	289	103	792

2 章 ||||

国際感覚

はじめに

今世紀の多くの時間を支えてきたさまざまな規範や制度が崩れ始めて、10年ほどが経つ。それは国家という枠組みにもあてはまる。政治、経済、文化などあらゆる領域での国際化が進み、その一方で、国民や民族といったくくり方がしばしば摩擦をひきおこしている。これらの事態に対する解決策として、国家への適応・同化という従来の考え方から、その多様性を認める多文化共存という考え方へのシフトがあげられよう。こういった状況を受けて、わが国の学校教育でも近年、「国

際化に対応した教育」「国際理解のための教育」といった形で、教科ごとにさまざまな取り組みがなされてきている。

そこで本章では、実際に高校生がどのように国際化しているのか、国際理解しているのかということ、「国際化」「外国観」「異文化に対する構え」という3つの視点からみていくことにする。国際化とか国際理解という言葉があらわしている実態は、一体何なのかということを追ってみたい。

1 高校生の国際化

1) 海外経験と国際体験への志向性

この節では高校生の国際化について考察する。まず、高校生がどのくらい海外に行った経験があるか、確認しておこう。図2-1に

示したように、71.7%が海外に行った経験がない。同様の調査を『モノグラフ・高校生』で過去2回行っているが、そのときは、88.1% (vol.29「高校生の国際感覚」(1990年))と49.5% (vol.42「国際化社会の高校

生」(1994年))が海外に行った経験がないと回答した。たしかにここ数年で高校生の海外経験は増加しているが、vol.42が調査対象に外国語コースを含んでいることを考慮すると、決してマジョリティになってきているわけではない。

次に、国際化の構成要素の1つとして、国際体験への志向性について、旅行で外国に行

くケースと留学や仕事で外国に行くケースを尋ねたところ、図2-2のような結果になった。旅行で外国に行くことについて「とても」と「やや」を合わせて肯定的に答えた割合は84.4%と、大半が将来海外旅行に行きたいと考えている。一方、留学や仕事で外国に行くことに肯定的に答えた割合は52.4%と、旅行と比べて30%以上も低い。しかし、聞

図2-1 海外経験回数

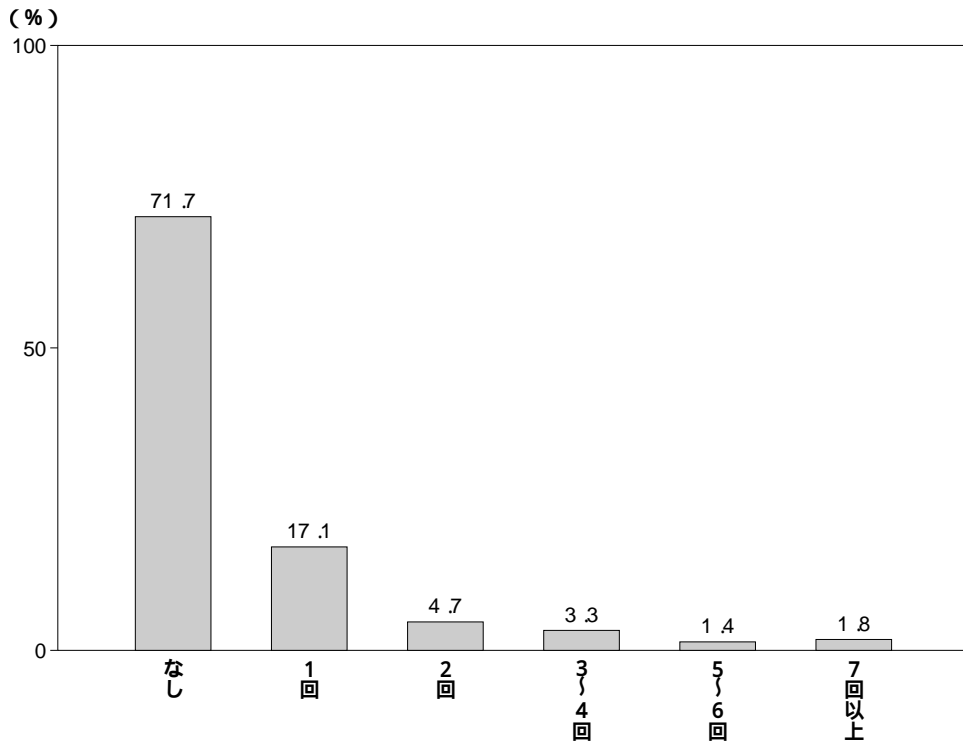
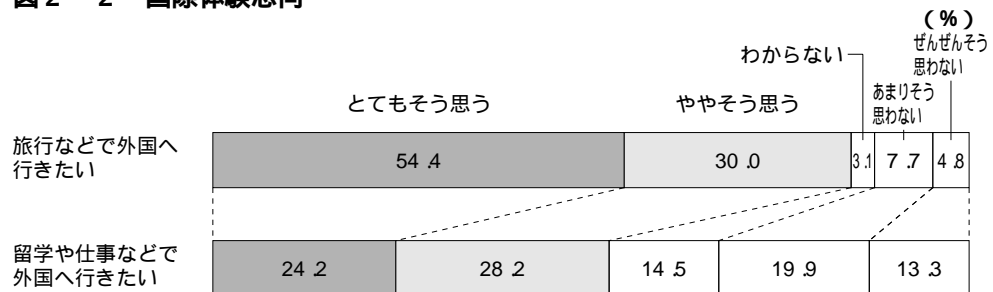


図2-2 国際体験志向



き方が異なるので単純には比べられないが、8年前の調査では、留学を「とてもそうしたい」と回答した割合が15.1%、仕事で出張することでは13.8%だったのに対して、今回は24.2%と10%ほど増えている。高校生の意識の中で、外国がお金を貯めて何かの機会に行ってみるだけのところから、生活につながるのがあるところへと変わりつつある様子がかがえよう。

ちなみに表2 - 1のように、海外経験のある者の方が国際体験への志向性が高い。当然といえば当然の結果かもしれないが、彼らは海外で何を体験して将来的な国際体験への志向性を高めるのか、また反対に海外経験があって志向性が低い者はどのような理由による

のか、今後明らかにすべき課題だろう。

2) 外国での行動、外国人と接触することへの構え

国際化のその他の構成要素として、外国で行動したり外国人と接触したりすることに対する構えがあげられよう。そこで、将来外国で行動したり外国人と接触したりすることができるようになると思うかどうかを尋ねてみた。質問のいくつかを抜粋してまとめたものが表2 - 2である。将来的にはできるようになるだろうと回答した者の割合（きつと+たぶん）を、全体と海外経験の有無別との3つに分けて示した。

外国人と接触することについては、道で英

表2 - 1 海外経験の有無別にみた国際体験志向
(留学や仕事で外国に行くケース)

(%)

	海外経験なし		海外経験あり
志向性あり (とても+やや)	47.7	<	64.4

$\alpha < 0.05$

表2 - 2 外国での行動、外国人と接触することへの構え
(全体、海外経験の有無別)

(%)

	全体		海外経験なし	海外経験あり	有意差
外国人に英語で道を尋ねられたら教える	56.8		54.0	< 63.4	< 0.05
外国へ行ったとき、1人で買い物をする	54.6		48.6	< 69.5	< 0.05
外国の家庭に、1年間ホームステイする	43.0		38.7	< 53.8	< 0.05
外国の大学に留学する	23.7		20.7	< 31.2	< 0.05

「きつと」+「たぶん」できる割合

語で話しかけられるにせよ、外国で買い物を
するにせよ、半数以上の者ができるようにな
るだろうと答えている。

8年前の調査では、今回の調査と同様の質
問に対して、できるようになると回答した者
の割合が3割程度だったことを考えると、高
校生の国際化は進んでいるといえるだろう。
というのは、国際化という状況では、外国に
行きたいとか外国人と仲よくつきあいたいと
いう積極的な志向をもつ者ばかりでなく、強
制的に外国や外国人と接点をもたざるを得な
い状況も生じてくるようになると考えられる
ので、その際にはこのような能力が要求され
るからである。

外国での行動については、ホームステイに
は半数近い者ができると答えているのに対し

て、留学についてできると考えている者は
23.7%にすぎない。国境に関して、パーソ
ナルな障壁に比べて制度上の障壁は依然高い
と感じられているようである。とはいえ、8
年前の調査で留学できると考えていた者が
10.5%だったことから比べれば、高校生を
とりまく社会環境も、外国が生活につながり
のあるところへと変わりつつある様子がうか
がえる。

海外経験の有無別にみても、経験者は
未経験者よりもはるかに高い割合でできるよ
うになると回答している。実際の体験が直接
自信につながっているのだろう。

以上から、高校生の国際化は、意識の面
でも社会環境の面でも進んできているといえ
よう。

2 高校生の外国観

この節では、高校生の国際理解の様子につ
いて考察する。外国に対する見方を尋ねるた
めに、旅行したい国、留学したい国、友だち
をもちたい国のそれぞれについて1位から3
位まで自由に回答してもらった。実際回答に
あがった国はさまざまであったが、ここでは、
「アメリカ、イギリス、韓国、中国、インド、
フランス、ドイツ、オーストラリア、その他」
の9つに区分して分析する。表2-3は、そ
れぞれのテーマごとに上記の国を1位に選ん
だ割合と1位から3位までの総和の割合とを
まとめたものである。

表2-3からは、旅行したい国と留学や友
だちをもちたい国とでは異なる傾向があるこ
とが読みとれる。旅行したい国では、8か国
以外の国を1位にあげた割合が32.1%、総
和では108.2%にもなる。具体的には、イタ
リアやベルギー、カナダといった欧米の国が
目立って多かったが、トルコ、インドネシア、
ベトナム、エジプト、ブラジルなどアジア、
アフリカ、中南米の国もあげられていた。8

か国の中で一番人気のあったアメリカを1位
にあげた割合が23.2%、総和でも48.3%に
すぎず、旅行してみたい国は非常に多岐にわ
たっている。高校生の外国に対する興味や関
心のもち方がさまざまである様子がうかがえ
よう。

それに対して、留学をしたい国や友だちを
もちたい国では、8か国以外の国を1位にあ
げた割合がいずれも10%台にすぎない。総
和でみても、留学が58.5%、友だちが70.6%
にしかならず、いずれも8割強の回答が8か
国、それも欧米諸国に集中している。特にア
メリカは、留学で1位にあげた割合が38.0
%、友だちで1位にあげた割合にいたっては
45.3%にも上っている。留学や友だちに関
しては、ある程度相手国のイメージがないと、
留学して何ができるのか、友だちになってど
うつきあうのかといった想像がつきにくいた
め、情報量や知識の多い国に集中したと考え
られる。このような選択基準をもっているとい
うことは、高校生が何らかの国際理解をし

ていることの一端を示しているといえよう。

その一方で、どのような国を選択しているかをみると、欧米志向が高く、アジア志向が極端に低いことがわかる。8年前の調査の際にも、高校生のアジアに対する関心の低さが問題点としてあげられていたが、そのときは選択回答でみられた差であったのに対して、今回の調査は自由回答なので、この結果からいかに高校生の意識のなかでアジアに対する関心が低いかということが歴然としたのではないだろうか。特に、今回の調査は1997年の10月から11月にかけて行われたのだが、直前の9月末にサッカーのワールドカップのアジア予選が行われていた。その報道の中で、くり返し韓国との試合の勝ち負けがとりあげられていたのに、韓国に対する関心がほとんどの項目で一番低かった。このような情報は一過性のものにすぎないから、国際理解に対する影響を与えにくいとみることもできようが、そうだとしたら、日常的にいかにおとなりの国の情報に接する機会が少ないか、知識をもっていないかということをもより問題にすべきであろう。

この高い欧米志向と低いアジア志向の原因は、国ごとのイメージを自由に書いてもらった回答からもうかがえる。アメリカ、イギリ

ス、韓国、中国、インド、日本について「どのようなイメージをもっていますか」と尋ねたため、必ずしもそれぞれの国について知っている情報や知識を答えてくれているわけではないが、欧米とアジアではまったく回答の傾向が異なっていた。ここで、それぞれの国について、いくつか典型的なものを示しておこう。

- アメリカ：自由、個人主義的、意見がはっきりしている、銃社会、NBA、自由の女神
- イギリス：伝統、王室、階級社会、衰えている、ブリティッシュ・ロック、ダイアナ
- 韓国：日本を嫌っている、チマチョゴリ、焼き肉、閉鎖的、物が安い、すぐ興奮する
- 中国：香港返還、社会主義、広い、人口が多い、自転車、くさい、体が柔らかい
- インド：カースト制度、生活と宗教が密着、カレー、サリー、手が伸びる、川が汚い
- 日本：働きすぎ、政治腐敗、物質的に豊か、治安が悪くなってきた、わびさび、武士

このように、欧米諸国や日本については、固有名詞や政治経済状況、大衆文化など、特に興味深かったのは治安に関する回答が多かったことだが、具体的なイメージをもっていたり、何らかの価値判断を下したりしているものが目立つ。それに対してアジア諸国につ

表2 - 3 旅行したい国・留学したい国・友だちをもちたい国
(1位、1位から3位までの総和)

		アメリカ	イギリス	韓国	中国	インド	フランス	ドイツ	オーストラリア	その他
旅行したい国	1位	23.2	12.7	0.5	2.5	1.2	9.8	2.1	15.8	32.1
	総和	48.3	39.6	1.8	12.3	5.0	36.7	8.5	39.5	108.2
留学したい国	1位	38.0	19.8	0.1	1.4	0.2	5.2	2.8	19.7	12.8
	総和	73.6	61.6	0.9	7.3	1.0	32.5	15.1	49.4	58.5
友だちをもちたい国	1位	45.3	11.5	1.6	5.7	1.5	6.1	2.3	10.5	15.5
	総和	72.1	43.9	6.3	21.9	7.3	32.8	11.0	33.9	70.6

(上段100%、下段300%)

いては、漠然としたイメージや、国民性や生活様式についてネガティブにステレオタイプ化されたものが目立つ。かつてのような西洋文化に対する漠然としたあこがれではなく、適切な情報や知識の差の結果として、高い欧米志向と低いアジア志向がみられるのである。もちろん中学校や高校の社会科では欧米諸国と同様に、アジア諸国についても政治の

しくみや産業の様子、国際関係上の位置づけなどを学習しているはずである。しかし、ここにあげられたイメージはいずれもそのような形で得た知識とは異なる類のものである。われわれが国際理解というとき、一体何をもって「国際理解」というのか、その内実について改めて考え直す必要があるのではないだろうか。

3 高校生の異文化に対する構え

多くの国では国内にエスニックグループやマイノリティグループが存在しており、国家と民族や下位社会集団との間の摩擦が大きな社会問題になっている。従来国家は、これらの社会集団を国民という名のもとに適応・同化させる政策をとってきたのだが、最近ではこれらの社会集団ごとの多様性を認めあって共存していこうという多文化共存の考え方がでてきている。こうした考え方は近年の新しい社会意識の1つとみることができるのではないだろうか。

そこでこの節では、高校生の異文化に対する構えが「適応・同化」型なのか「多文化共存」型なのか、どのような人がどちらの考え方をとっており、従来の社会問題や新しい社会問題との相関関係はどうなっているのかを検討していく。

異文化に対する構えを言語、規範、制度の3つのレベルで尋ねた。表2 - 4にその単純

集計結果をまとめた。それぞれAの意見の方が「適応・同化」の考え方で、Bの意見の方が「多文化共存」の考え方である。表2 - 4によると、いずれもややAの意見、つまり「適応・同化」を支持する割合が多いが、おおよそ半々に分かれているといえるだろう。

分析にあたっては、この3つの質問を構成要素とする「異文化への構え」変数をつくった。図2 - 3が「異文化への構え」変数の単純集計結果である。各質問項目の指標の数字をそのまま点数化しており、たとえば、3つの質問すべてに「ぜったいA」と回答すれば、その人の「異文化への構え」度は3点ということになる。以下の考察では、3点から7点までを「適応・同化」型、8点から12点を「多文化共存」型と2つに分けて、それぞれの構えの背景と、国家の見方とその他の社会意識との相関を検討する。

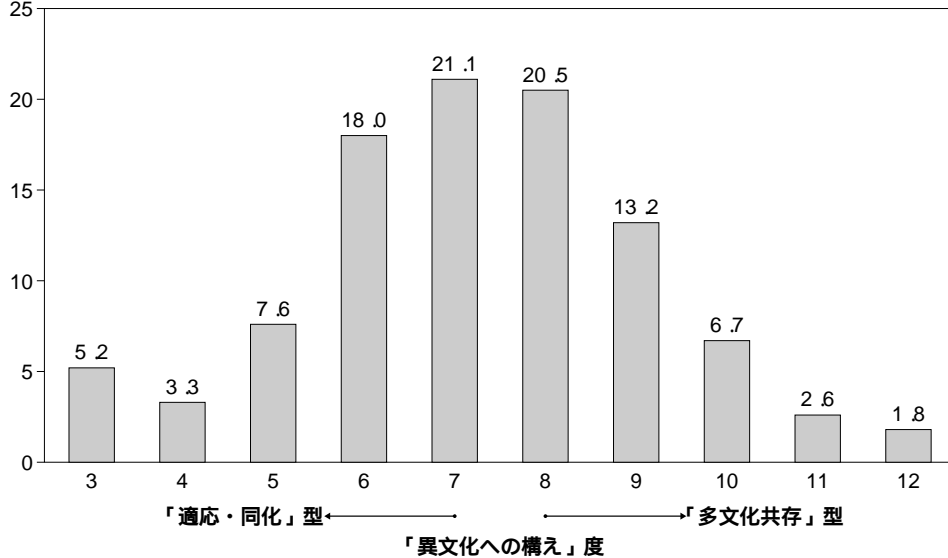
表2 - 4 「異文化への構え」言葉、規範、制度別

(%)

A	ぜったい A	やや A	やや B	ぜったい B	B
1. 外国人であっても日本にいるならば、日本語を話してほしい	17.0	36.8	35.6	10.6	日本で生活していても、外国人は自分の母国語で話すのはかまわない
2. 日本で生活するならば、外国人であっても日本の習慣やしきたりにしたがってほしい	13.3	43.8	32.3	10.5	日本で生活していても、外国人ならば自分の国の習慣やしきたりにしたがってよい
3. 日本の学校は、日本人として見方や考え方を学ぶ場なので、外国人生徒もそのルールにしたがってほしい	12.9	42.1	34.3	10.7	外国人生徒は自分の国について学ぶ権利があるから、日本の学校もそれを保障するべきだ

図2 - 3 「異文化への構え」

(%)



1) 「異文化への構え」の規定因

まず「異文化への構え」の規定因について考察しよう。規定因としては、海外経験の有無、国際体験への志向性、メディア接触の程度の3つを想定した。表2-5と表2-6がその分析結果である。海外経験の有無は、表2-5からは直接「異文化への構え」を分ける規定因になっていないようにみえる。それに対して国際体験への志向性は、ここでは留学や仕事で外国に行くケースを使用しているが、志向性が高い者で「適応・同化」型が50.4%、「多文化共存」型が49.6%なのに対して、志向性が低い者で「適応・同化」型は60.5%、「多文化共存」型が39.5%となっている。志向性別に10.1%の差があり、国際体験への志向性は、「異文化への構え」に影響

を与えているといえそうだ。

また表2-6は、海外経験の有無別に国際体験への志向性が「異文化への構え」にどの程度影響しているかを分析したものである。これによると、海外経験があってもなくても、国際体験への志向性が「異文化への構え」に影響を与えているが、海外経験がない場合は、国際体験への志向性の高低による「異文化への構え」のどちらかの型を選択する差異は7.3%しかないのに対して、海外経験がある場合には17.8%もの差がある。これは、単に海外経験があつて国際体験への志向も高い者が「多文化共存」型の構えを強くしているというだけではない。海外経験がなく国際体験への志向が低い者で「適応・同化」型は59.6%であるのに対して、海外経験があつて国際体験への志向が低い者で「適応・同化」

表2-5 「異文化への構え」の規定因
(海外経験の有無、国際体験への志向性、メディア接触の程度)

	海外経験		国際体験への志向性		新聞の政治・経済面		テレビのニュース	
	あり	なし	高い	低い	よく読む	読まない	よく見る	見ない
「適応・同化」型	56.1	53.2	50.4	< 60.5	50.8	< 57.1	55.0	56.8
「多文化共存」型	43.9	46.8	49.6	> 39.5	49.2	> 42.9	45.0	43.2
有意差	なし		< 0.05		< 0.05		なし	

(%)

(毎日+週に3-4回=よく読む 週に1回くらい+読まない=読まない) (毎日+週に3-4回=よく見る 週に1回くらい+見ない=見ない)

表2-6 海外経験の有無別にみた国際体験への志向性が「異文化への構え」に与える影響

	海外経験あり			
	海外経験なし		海外経験あり	
	国際体験への志向性		国際体験への志向性	
	高い	低い	高い	低い
「適応・同化」型	52.3	< 59.6	46.9	< 64.7
「多文化共存」型	47.7	> 40.4	53.1	> 35.3
有意差	< 0.05		< 0.05	

(%)

型が64.7%にも上っていることに注目する必要がある。つまり、海外経験が単純に国際理解を深めたり国際的な視野を広げたりできると、手放しで勧められるものではないということなのである。

次に、メディア接触の程度が「異文化への構え」に与える影響をみてみると、新聞の政治経済面を読んでいる程度の差は影響を与えており、6.3%の差で、「週に3、4回ないし毎日読んでいる」者の方が「多文化共存型」が多く、「週に1回くらいないしまったく読まない」者の方が「適応・同化」型が多い。

一方、テレビのニュースを見る程度の差は影響を与えるほどの差がない。情報の量やインパクトの強さから考えると、テレビの方が

影響力が強そうであるが、情報の質の問題や接触する側の意識の問題などの方が重要な要因になっていると考えられよう。

2) 国家の見方、社会意識のモチよう

では、「異文化への構え」の違いが国家の見方や社会意識のモチようにどのような影響を与えているか、みていこう。表2-7は、「異文化への構え」の型別に、日本に対する見方、社会の出来事への関心、社会活動への参加意欲の質問項目に肯定的に答えた割合（とても+かなり、ぜひ+なるべく）を抜粋してまとめたものである。なお、肯定的に答えた割合の高低については章を改めて検討するので、ここではその点にはふれない。

表2-7 「異文化への構え」の型別にみた国家の見方、社会意識のモチよう
（日本に対する見方、社会の出来事への関心、社会活動への参加意欲）

(%)

		「適応・同化」型	「多文化共存」型	有意差
A 日本の見方	治安がよい	69.3	68.1	なし
	住み心地がよい	68.0	> 61.6	<0.05
	自由が尊重されている	35.3	> 30.7	<0.05
	民主化が進んでいる	55.2	51.3	なし
	無責任な政治家が多い	92.0	92.5	なし
	生命を大事にしている	35.5	> 30.0	<0.05
B 社会への関心	沖縄の米軍基地問題	35.5	39.9	なし
	従軍慰安婦問題	26.1	< 30.8	<0.05
	住民投票問題	41.5	< 50.7	<0.05
	北朝鮮への食料支援	44.4	< 51.5	<0.05
C 参加意欲	在日外国人との交流会	59.5	< 75.0	<0.05
	海外の環境保全活動	54.6	< 67.2	<0.05

A 「とても」+「かなり」そう思う割合
B 「とても」+「かなり」関心がある割合
C 「ぜひ」+「なるべく」参加したい割合

まず日本に対する見方と社会の出来事への関心をみていくと、「異文化への構え」の違いによって差がないのは、「治安がよい」「民主化が進んでいる」「無責任な政治家が多い」「沖縄の米軍基地問題」である。これらの治安問題、安全保障問題、政治体制論は、従来から扱われてきた社会問題である。それに対して、日本について「住み心地がよい」「自由が尊重されている」「生命を大事にしている」では、「適応・同化」型の者の方が肯定している割合が高く、「従軍慰安婦」「住民投票」「北朝鮮への食料支援」では、「多文化共存」型の者の方が関心が高い。これらの多くは、近年になって人々の関心や問題意識が高まってきた社会問題である。従来からの社会問題が立ててきた論点は、「異文化への構え」の違いにかかわらず共有されているが、新

しい社会問題が立てている論点は、「異文化への構え」の違いによって評価や関心が分かれていることがわかる。

また社会活動への参加意欲をみると、いずれの項目も「多文化共存」型の者の方が10数%の差で高い参加意欲を示している。彼らの意識の中では国境が非常に低いことと、新しい社会問題に取り組もうとする意欲の強さがうかがえる。

「多文化共存」という考え方は、多くの新しい社会問題と共通の文脈のもとに、国家という枠組みをも相対化する形で生じてきた考え方だということができるだろう。その意味で、今後の国家と国民との関係のあり方をさまざまな新しい社会問題と複雑に絡み合わせながら模索していく必要があるのではないだろうか。

3 章 IIIII

日本への評価

欧米の近代国家に追いつくことを目指していた近代日本では、政府も国民もそれぞれの立場から、国家はかくあるべきだ、社会はかくあるべきだと意識しながら行動してきた。戦後の日本においても1970年代の高度成長期までは、個人より組織を優先する考え方が尊重されてきた。1980年前後に生まれた現在の高校生も同じような国家観や社会観、集団観をもっているのであろうか。それとも、個人優先で、国家や社会への関心が薄れているのであろうか。

戦前の軍国主義に対する反省から、国家や政府や社会に対する批判的意見をもつことと社会に関心をもつことは、イコールと考える

見方が長く一般的であった。しかし、旧ソ連の崩壊、ベルリンの壁の崩壊、55年体制の崩壊といったイデオロギー対立の解消にともない、国家や政府に批判的であることは、社会への関心の高さの証明にはなりえなくなっている。

このような時代の中にあって、現在の高校生はどのような社会観、社会意識の構造をもっているのであろうか。ボランティア精神をはじめとした新しい社会意識は芽生えているのであろうか。

本章では、現在の高校生の日本観や政治・社会意識を、社会の出来事への関心度や参加度をからめて探ってみたい。

1 日本イメージ

高校生たちは今の日本をどうみているのだろうか。図3-1は、日本をどんな国だと思っているかと11項目についてのイメージを問うたものである。

〔日本のよいイメージ〕

生活水準が高い	84.8%
治安がよい	68.6%
住み心地がよい	65.0%

〔日本のよくないイメージ〕

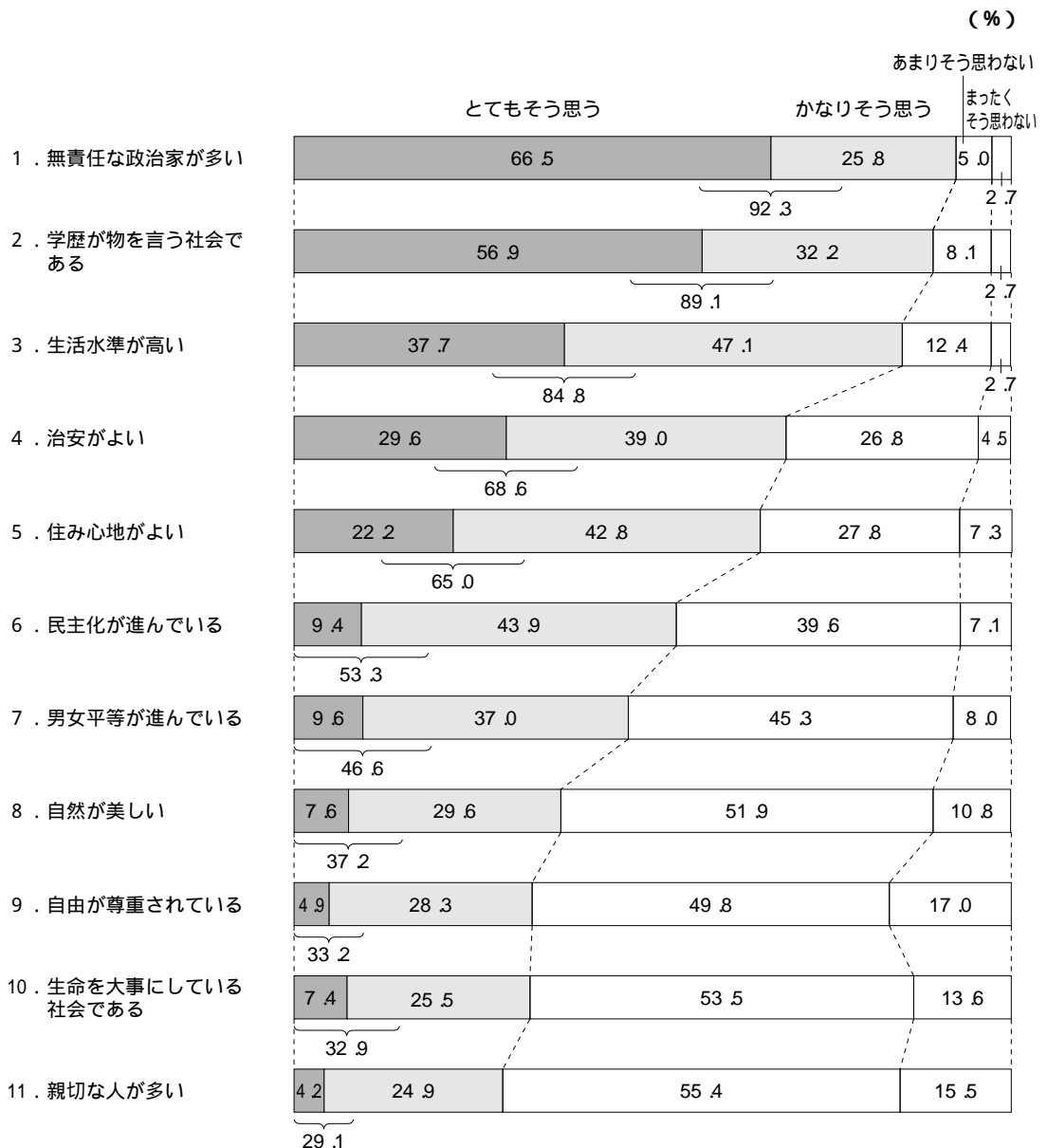
無責任な政治家が多い	92.3%
学歴が物を言う社会である	89.1%
親切な人が少ない	70.9%
生命を大事にしていない社会である	67.1%
自由が尊重されていない	66.8%

生活水準が高く、治安も住み心地もよいが、

無責任な政治家が多く、学歴が物を言う社会。そして自由があまり尊重されず、生命を大事にしている社会ともいえない。親切な人も多くないというのが、日本のイメージとなる。

全体からみると、かなりの確な社会認識といえないだろうか。つまり、生活水準や住み心地といった生活面や経済的視点では日本はよいが、政治や社会的視点では、まだまだだ

図3 - 1 日本のイメージ 生活水準は高いが、学歴が物を言う社会である



と生徒たちは思っているのだ。

「自然が美しい」37.2%が思いの外低いのは、高度経済成長のマイナス面である自然破壊の現状をみてきた生徒たちにとって、美しい自然に接する機会が少なくなったからだろう。

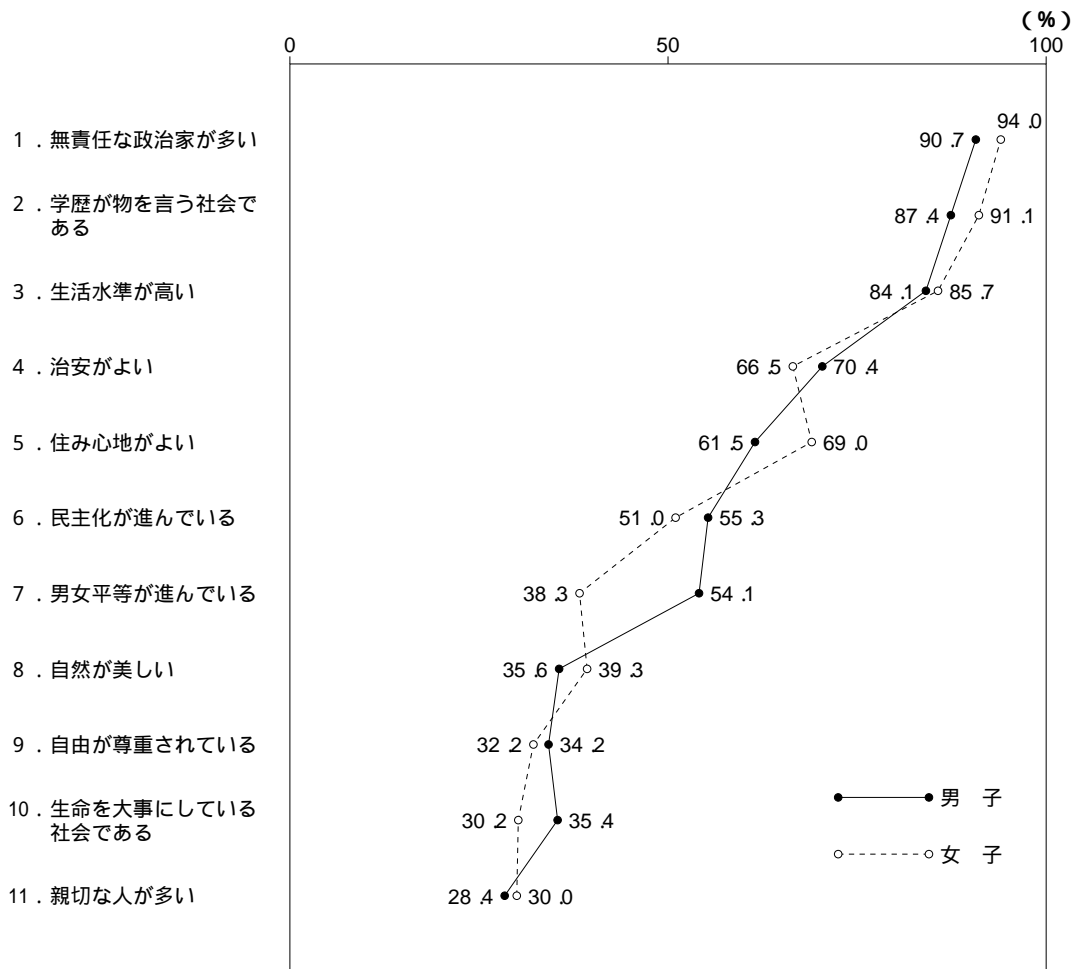
図3-2は、性別によるクロス集計である。女子は男子より「住み心地はよい」が、「男

女平等は進んでいない」と思っている。特に男女平等については男女間で15.8%も差がある。

男女平等について学年別でみると、

	1年	2年	3年
男子	55.6%	> 52.5%	> 50.0%
女子	41.5%	> 37.2%	> 29.1%

図3-2 日本のイメージ × 性



「とても」+「かなり」そう思う割合
(すべての項目で、男女間に有意差 $\alpha < 0.05$ あり)

となり、男子、女子ともに学年進行で肯定率が減少している（ともに5%水準で有意差あり）。社会経験が広がったり、社会科などの教育の結果といえないだろうか。

さらに、自然が美しいについて学校別にみると、

A校(38.5%) B校(32.6%) C校(35.7%)
D校(31.4%) E校(51.8%) F校(45.7%)

となる。首都圏のA校・B校・C校よりも地方のE校・F校の方が「自然が美しい」と思う肯定率が高いのは、自然への接触の機会が身近にあるか否かの差の反映といえよう。

ところで、高校生の日本に対するイメージは変わったのだろうか。継続的な調査を行ったわけではないが、10年前の本モノグラフ(Vol.23「若者は保守化したのか」(1988年))から、内容的に近いものをあげてみた。「今日の日本の社会について、あなたはどのように思っていますか」という質問に対する「まったく+かなり」そう思う割合である。

「学歴が物を言う社会だ」	85.2%
「民主主義が発達している」	57.9%
「とても自由だ」	47.7%
「男女平等だ」	33.2%

学歴が物を言う社会であるというイメージは、10年前とほとんど差がないことがわかる。民主主義も民主化と同様と解釈すれば、10年前と大差がない。しかし、自由と男女平等に対するイメージは、回答率が逆転している。校則、管理教育、受験勉強の激化などは、10年前より厳しくなっており、自由が尊重されているとは実感としても思えないのであろう。一方、男女平等については、男女雇用機会均等法の施行(1986年)以来、法的な面だけでなく、実態としても進んでいることを反映した肯定率の増加といえよう。

つまり、1980年代後半以降の高校生の日本のイメージには大きな変化はないが、そのときどきの社会の動向をかなりの確確にとらえて反応している点もあることは見逃せない。

2 社会への関心度と参加意欲

現実の日本に対して、かなりの確なイメージをもっている高校生は、実際の社会とどうかわっているのだろうか。まず、社会の出来事への関心度を探ってみた。

図3-3は、調査を実施した1997年のマスコミを賑わした出来事への関心度を問うたものである。

「とても」+「かなり」関心がある割合が5割を超えたものは、「オウム裁判問題」51.1%のみである。さすがに連日、新聞の一面やテレビのトップニュースで流され続けた事件だけに関心度は高い。しかし他の項目は、「北朝鮮への食料支援」47.5%、「原発やゴミ焼却場の設置を住民投票で決める問題」45.7%で、社会上の出来事への関心度は

あまり高くないといえよう。さらに、「諫早湾の干拓問題」や「銀行・証券会社のビッグバン」については、かなりマスコミでも取り上げられたにもかかわらず、3割近くの生徒が出来事そのものを知らないと答えている。自分の身近な問題への関心を優先している姿がここからは読み取れる。

性別での関心度の違い(表3-1)をみると、女子は「オウム裁判問題」53.6%以外にも、「北朝鮮への食料支援」50.6%といったように、男子よりも全体的に関心度が高いといえよう。ただし「ビッグバン」のような経済分野への関心度は男子よりかなり低い。

次に、最近マスコミなどでよく取り上げられている社会の出来事への賛否を問うてみ

図3 - 3 社会の出来事への関心度 あまり高くない

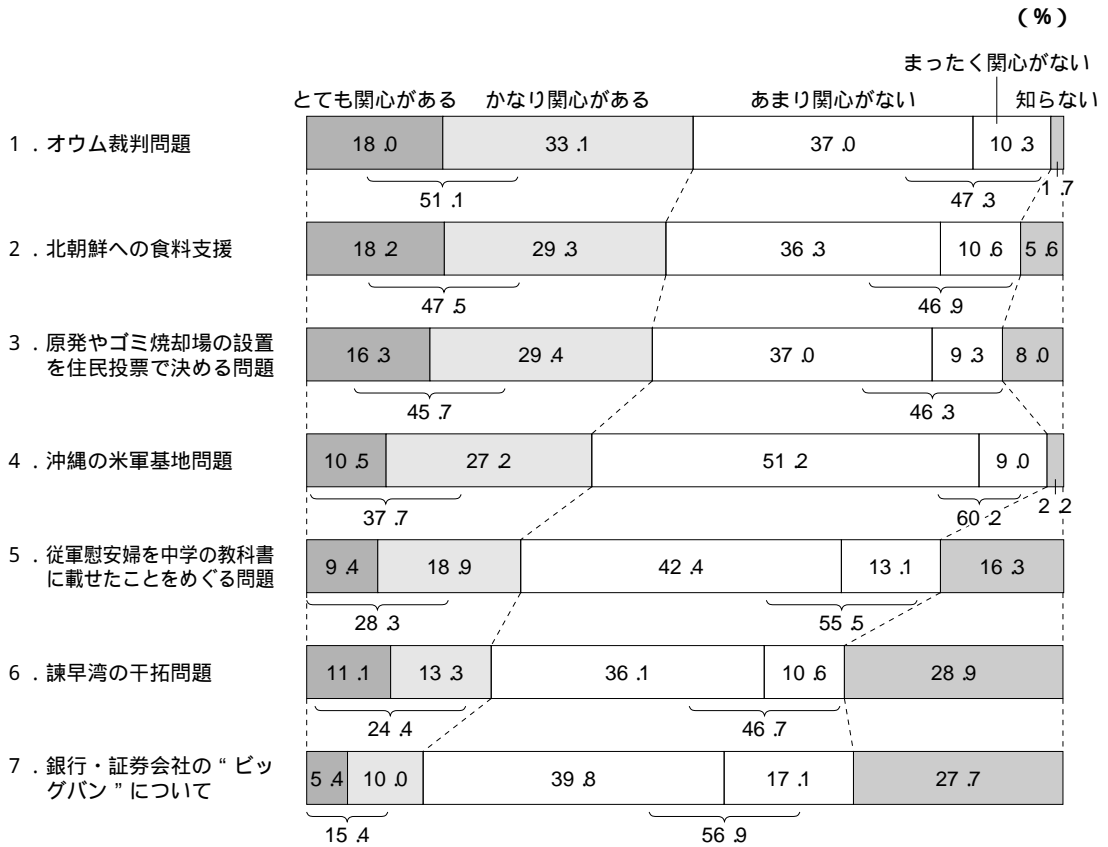


表3 - 1 社会の出来事への関心度 × 性

社会の出来事	性別 (%)	
	男子	女子
1. オウム裁判問題	48.8	53.6
2. 北朝鮮への食料支援	44.6	50.6
3. 原発やゴミ焼却場の設置を住民投票で決める問題	43.0	48.7
4. 沖縄の米軍基地問題	39.4	35.5
5. 従軍慰安婦を中学の教科書に載せたことをめぐる問題	24.6	32.2
6. 諫早湾の干拓問題	28.1	19.7
7. 銀行・証券会社の“ビッグバン”について	20.2	10.1

「とても」+「かなり」関心がある割合
(すべての項目で、男女間に5%水準で有意差あり)

た。

表3-2をみると、「お年寄りの在宅介護」89.9%（「とても」+「かなり」賛成の割合。以下同じ）、「臓器移植の推進」89.3%には9割の生徒が賛成している。「安楽死の公認」と「外国人労働者の受け入れ」もほぼ8割に達している。積極的に現状や今後の推移を受け入れようという姿勢が示されているといえる。

「死刑制度廃止」35.2%に賛成が少ないのは、オウム事件以後の世論の動向に生徒たちも影響を受けているからではなかろうか。

一方、「夫婦別姓の採用」に賛否が相半ばしている（賛成51.8%、反対48.2%）のは、やや意外であった。元気で明るい女子、やさしい男子が増大している高校生たちの間でも、将来の夫婦像については、まだ明確な判断ができていないのだろう。つまり、生徒た

表3-2 社会の出来事への賛否

(%)

	とても賛成	かなり賛成	やや反対	ぜったい反対
1. お年寄りの在宅介護	43.9	46.0	7.6	2.5
	89.9			
2. 臓器移植の推進	43.5	45.8	9.0	1.7
	89.3			
3. 安楽死の公認	30.9	49.0	16.8	3.2
	79.9			
4. 外国人労働者の受け入れ (単純労働)	26.6	50.2	20.2	3.0
	76.8			
5. 物理・数学の成績優秀者の飛び 級制	21.4	34.8	27.2	16.5
	56.2			
6. 夫婦別姓の採用	18.0	33.8	34.3	13.9
	51.8			
7. 死刑制度廃止	12.1	23.1	40.6	24.3
	35.2			
8. クローン人間の研究開発	9.8	14.4	35.5	40.3
	24.2			

ちの賛否の判断も現実の社会状況が無視してはいないといえよう。

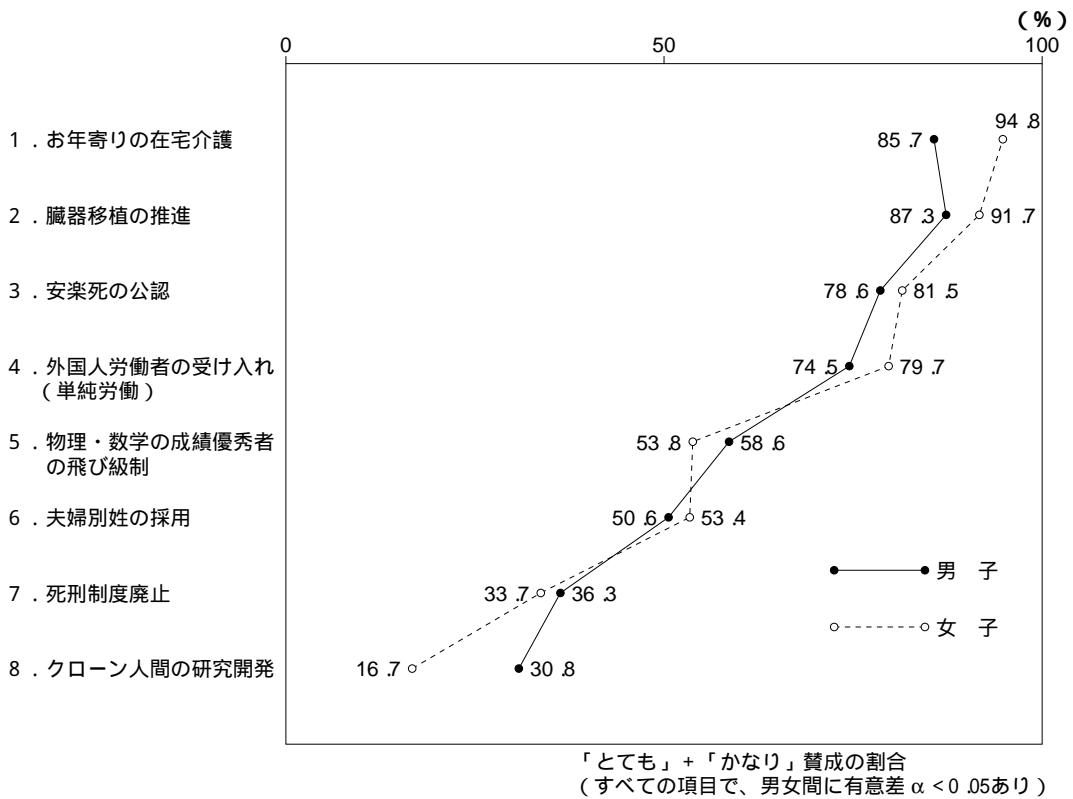
性別での賛否の差(図3-4)をみると、「在宅介護」や「臓器移植」、「安楽死」といった医療に関する項目には、女子の賛成率が高いことがわかる。ただし「クローン人間の研究開発」には女子は否定的である。

学年別でみると、「夫婦別姓の採用」に対する男子の賛成率は、

1年 2年 3年
45.2% < 56.5% < 60.8% (有意差 $\alpha < 0.05$)

というように男子の場合、学年進行で明確に上昇しており、3年の場合はかなり高いことがわかる。結婚がより身近になるにしたがって男子の賛成率が上昇するのは、やさしい男子の相手に対する思いやりのあらわれなのかもしれない。

図3-4 社会の出来事への賛否 × 性



次に、将来の社会的活動への参加意欲を尋ねてみた。図3 - 5は、ボランティア活動などの項目に対する数値であるが、どの項目も「参加したい」(「ぜひ」+「なるべく」参加したい)の割合は6割前後の高さを示している。図3 - 3からわかるように、社会への関心度は高いとはいえないが、多くの高校生たちは、社会に決して無関心ではない。社会とのかかわりには、わりと意欲的であることをこのデータは示している。

ただし「ぜひ参加したい」と思っているのは、「在日外国人との交流会」23.1%を除くと2割に満たない。実際に積極的に参加しようと思っているのは、この程度なのかもしれない。

次に、性別での参加意欲をみると(図3 -

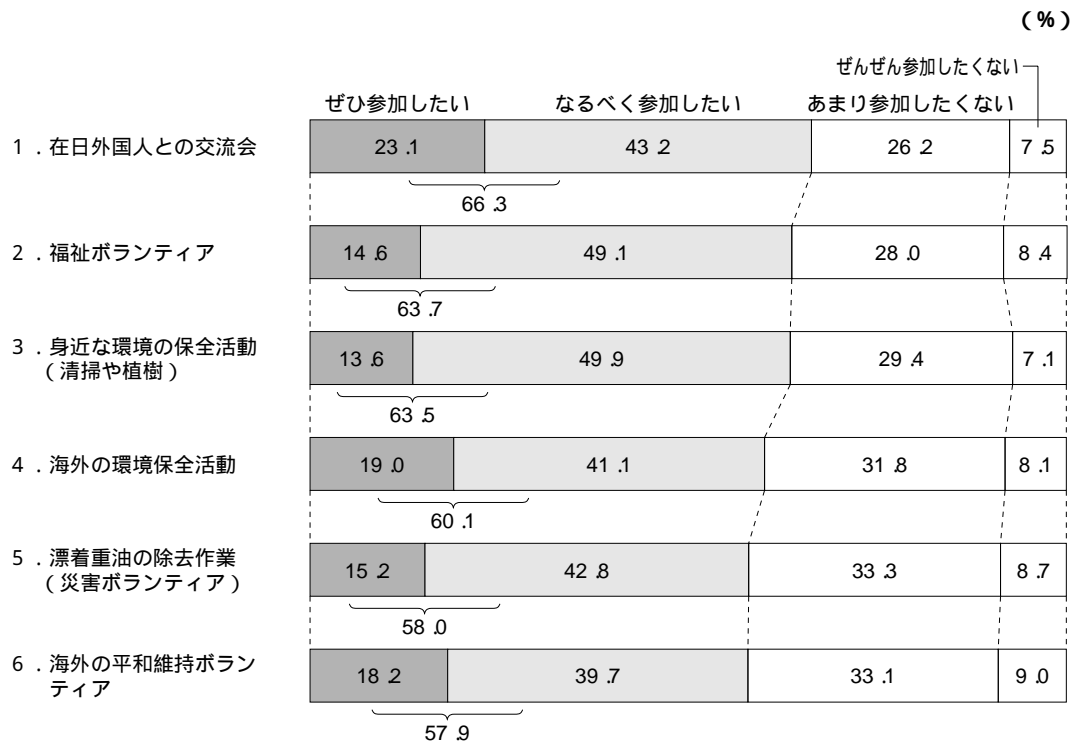
6) 明らかに女子の方が男子よりも10%以上高いことがわかる。「在日外国人との交流会」や「福祉ボランティア」については20%以上の差がある。校内でも元気で、行事などの活動でも中心になっている女子の積極性が、ここにも発揮されているといえよう。

ただし、男女の学年別クロス集計をみると、女子では3年の参加意欲が低いことがわかる。

	1年	2年	3年
福祉ボランティア	78.8%	<79.4%	>65.1%
海外の環境保全活動	68.3%	>66.8%	>59.3%
海外の平和維持ボランティア	68.6%	>65.8%	>53.4%

(有意差 $\alpha < 0.05$)

図3 - 5 社会的活動への参加意欲 参加意欲は高い



逆に男子では、3年の参加意欲が高い。

	1年	2年	3年
福祉ボランティア	46.8%	<57.5%	<58.8%
身近な環境の 保全活動	52.5%	<64.6%	<68.7%

最後に、社会の情報を知る手段であるマス・メディアに対する関心度を探ってみた。表3-3は、新聞の紙面とテレビのニュースに接する度合いを尋ねたものである。

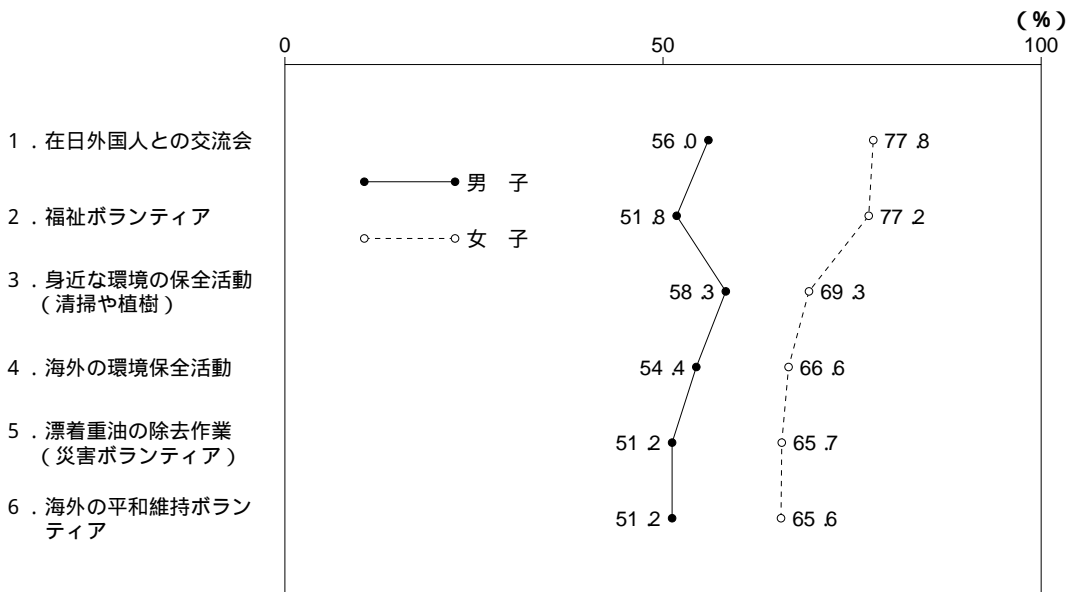
まず新聞の紙面では、テレビ欄を「毎日読んでいます」生徒(82.5%)は8割を超えており、「週に3~4回読んでいます」生徒も加えると93.3%に達する。スポーツ・芸能面をわりと読んでいます生徒(「毎日」+「週に

3~4回」読んでいます割合)が61.9%。政治・経済面をわりと読んでいます生徒が30.3%にすぎないことを考慮すると、高校生は新聞をテレビ視聴のための情報手段として主に利用していることがわかる。

そして、テレビのニュースを見ている生徒(「毎日」+「週に3~4回」見ている割合)が87.3%と9割近くもいるということは、社会の情報を新聞よりもテレビのニュースから得ていることを如実に示すデータといえる。今の高校生たちは、じっくり新聞を読みながら情報を整理・分析するというのは好まないのであろう。もっとも、こうした傾向は高校生に限ったことではなく、急速に情報化の進んだ現代の一般的動向なのかもしれない。

性別では、新聞のテレビ欄を読む割合に性

図3-6 社会的活動への参加意欲 × 性 女子の参加意欲が高い



「ぜひ」+「なるべく」参加したい割合 (すべての項目で、男女間に有意差 $\alpha < 0.05$ あり)

差はあまりないが、スポーツ・芸能面と政治・経済面では、男子の方が女子よりもよく読んでいる割合が高い。女子が金融界のビツ

グバンなどに関心が低い背景の一因は、ここらあたりにもあるといえよう。テレビのニュースに対する視聴傾向にも性差はない。

表3 - 3 社会の情報への関心度 × 性

(%)

		全体	性 別		有意差	
			男子	女子		
新 聞	政治・ 経済面	毎日読んでいる	9.2	11.2	6.8	< 0.05
		週に3～4回読んでいる	21.1	23.2	18.7	
		週に1回くらい読んでいる	34.7	34.8	34.8	
		まったく読まない	35.0	30.8	39.6	
	スポーツ・ 芸能面	毎日読んでいる	33.0	42.6	22.1	< 0.05
		週に3～4回読んでいる	28.9	27.9	30.0	
		週に1回くらい読んでいる	21.5	17.4	26.1	
		まったく読まない	16.7	12.1	21.8	
	テレビ 欄	毎日読んでいる	82.5	84.6	80.1	なし
		週に3～4回読んでいる	10.8	9.5	12.3	
		週に1回くらい読んでいる	4.3	4.0	4.6	
		まったく読まない	2.4	1.9	3.0	
テレビの ニュース	毎日見ている	55.7	57.1	54.1	なし	
	週に3～4回見ている	31.6	30.2	33.2		
	週に1回くらい見ている	10.3	9.9	10.8		
	まったく見ない	2.4	2.8	1.9		

3 日本観と社会意識

大学紛争を経験してきた筆者らの世代の教員の多くは、現状の国家や社会に懐疑的で、現状を批判的にとらえることこそが社会や政治をよりよくし、日本を民主化できるのだと考えてきた。そして生徒たちにも現状批判の意識をもつべきだと考えて指導してきた。しかし、冷戦構造が崩壊し、かつての保守と革新という図式が意味をなさなくなった今、高校生への対応も再検討しなければならぬのかもしれない。

そこで、日本にプラスイメージをもつ生徒、つまり明るい日本観をもつ生徒とそうでない生徒との社会への関心度や参加意欲の差異を探ってみた。表3 - 4は、「自然が美しい」という素朴で社会的な意識と、「民主化が進んでいる」というかなり政治的な意識が反映する2つの項目を尺度として取り上げた。

まず、Aで日本のイメージの他の項目との関連を調べてみた。ここからわかることは、多くの項目が、2つの尺度の順序に正比例していることである。「自然が美しい」と「とてもそう思う」者と、「民主化が進んでいる」と「とてもそう思う」者は、全体的に日本にプラスイメージをもち、現在の日本を大変肯定的にとらえていることがわかる。

一方、「自然が美しい」と「まったくそう思わない」者と、「民主化が進んでいる」と「まったくそう思わない」者は、現在の日本をまったく否定的に認識している。両タイプの差はかなり大きい。

では、こうした肯定的な明るい日本観をもつ生徒と否定的な日本観をもつ生徒の社会とのかかわりには相違があるのだろうか。この点を検証したのが表3 - 4のBとCである。Bは、社会の出来事への関心度との関係のみ

たものである。

「自然が美しい」を肯定する者と否定する者とを比べると、圧倒的に肯定する者の方が社会への関心度が高いことが読み取れる。ただし、民主化の評価尺度では、肯定する者の関心度が高いが、完全に否定する者も「住民投票」や「諫早湾の干拓」や「金融界のビッグバン」には高い関心を示している。この層にはかつて主流派であった、国家や社会に懐疑的で、現状を批判的にとらえる政治意識の高い者たちが含まれていると思われる。

次にCから、将来の社会的活動への参加意欲のあり方を眺めてみたい。ここからわかることは、多くの項目で2つの尺度の順序に正比例していることである。肯定的な明るい日本観をもつ者の社会的活動への参加意欲は大変高い。これは彼らの政治・社会意識がかなり高いことのあらわれといえよう。

以上のことから、今の日本を肯定的にとらえる者は現状維持の保守的の生徒であり、否定的にとらえる者は現状を打破しようとする革新的の生徒であるという図式が、現在では短絡的な評価にすぎないことが明らかになった。

戦後の社会科教育では、戦前のファシズムへ協力した反省から、意識的に国家論や愛国心、ナショナリズムを否定し、取り上げることを避けてきたきらいがある。しかし、国際社会の一員として行動する上で、自分の生まれた社会や風俗・文化に関心をもち、愛着をもつことの必要性は否定できない。偏狭なナショナリズムの復活を許さないためにも、生徒の意識を的確に握る上で、肯定的な日本観をもつ生徒たちに自信を与えるような日本像を提示できるように、われわれ教員も努力する必要があるのではないだろうか。

表3 - 4 日本観の差異 × 日本のイメージ・社会の出来事への関心度・社会的活動への参加意欲

(%)

		自然が美しい				民主化が進んでいる			
		とても そう思う	かなり そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない	とても そう思う	かなり そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
A 日本のイメージ	1. 無責任な政治家が多い	89.1	< (93.0)	(93.0)	> 89.0	92.4	< (94.6)	> 91.1	> 84.9
	2. 学歴が物を言う社会である	89.2	< (91.3)	> 88.4	> 86.2	90.5	< (90.7)	> 88.0	> 83.9
	3. 生活水準が高い	87.6	< (93.3)	> 83.1	> 67.6	(94.3)	> 91.6	> 78.7	> 65.3
	4. 治安がよい	(80.5)	> 75.2	> 64.3	> 62.4	(86.1)	> 75.8	> 59.8	> 48.7
	5. 住み心地がよい	75.2	< (75.8)	> 61.7	> 42.9	(77.7)	> 74.9	> 56.3	> 36.2
	6. 民主化が進んでいる	(67.2)	> 61.2	> 49.9	> 39.2	-----			
	7. 男女平等が進んでいる	(52.7)	> 50.0	> 45.4	> 38.7	(71.5)	> 58.1	> 33.0	> 17.6
	8. 自然が美しい	-----				(52.9)	> 41.5	> 31.0	> 24.4
	9. 自由が尊重されている	(50.4)	> 38.5	> 31.0	> 16.6	(62.7)	> 48.5	> 14.5	> 5.0
	10. 生命を大事にしている社会である	(43.4)	> 42.0	> 29.5	> 18.7	(43.9)	> 40.8	> 25.0	> 14.3
	11. 親切な人が多い	(48.1)	> 39.5	> 24.1	> 11.5	(43.1)	> 35.8	> 21.4	> 12.6
B 社会の出来事への関心度	1. オウム裁判問題	49.6	< (53.7)	> 51.4	> 43.9	(55.7)	> 52.3	> 49.5	> 45.7
	2. 北朝鮮への食料支援	(62.8)	> 47.8	> 45.6	> 45.4	(56.4)	> 50.7	> 42.1	< 49.6
	3. 原発やゴミ焼却場の設置を住民投票で決める問題	(56.6)	> 49.0	> 42.6	< 44.2	48.8	> 46.8	> 42.7	< (52.1)
	4. 沖縄の米軍基地問題	(48.4)	> 40.5	> 35.1	> 34.5	(45.6)	> 38.2	> 33.9	< 45.3
	5. 従軍慰安婦を中学の教科書に載せたことをめぐる問題	(37.2)	> 31.8	> 25.9	> 23.2	(38.6)	> 28.3	> 24.8	< 33.6
	6. 諫早湾の干拓問題	(40.4)	> 28.8	> 20.1	< 21.0	31.7	> 23.2	> 21.9	< (35.3)
	7. 銀行・証券会社の“ビッグバン”について	(23.3)	> 16.8	> 12.9	< 19.4	21.5	> 13.9	13.9	< (27.7)
C 社会的活動への参加意欲	1. 在日外国人との交流会	(71.3)	> 69.0	> 66.3	> 57.0	(69.0)	> 65.8	< 66.8	> 62.7
	2. 福祉ボランティア	(71.3)	> 67.3	> 61.2	> 59.2	(72.1)	> 64.2	> 61.9	> 55.9
	3. 身近な環境の保全活動(清掃や植樹)	(77.6)	> 67.9	> 60.2	> 56.8	(70.9)	> 66.2	> 60.4	> 51.7
	4. 海外の環境保全活動	(75.9)	> 62.1	> 58.6	> 50.8	(62.0)	> 59.7	< 61.5	> 51.7
	5. 漂着重油の除去作業(災害ボランティア)	(72.1)	> 61.1	> 56.6	> 46.1	(68.0)	> 58.2	> 56.2	> 50.9
	6. 海外の平和維持ボランティア	(72.1)	> 58.6	> 57.3	> 49.2	(61.4)	> 58.4	> 57.9	> 48.3

A 「とても」 + 「かなり」 そう思う割合
 B 「とても」 + 「かなり」 関心がある割合
 C 「ぜひ」 + 「なるべく」 参加したい割合
 () は各尺度の最大値 ~~~~~ は各尺度の最小値
 (有意差は $\alpha < 0.05$)

4 社会意識の高低と社会参加

国家や社会への関心度があまり高くないことは先に述べたが、では、関心度の高い生徒と低い生徒ではどのような差異があるのだろうか。この点を分析したのが、表3 - 5である。指標としては、「従軍慰安婦を中学の教科書に載せたことをめぐる問題」を選んだ。この問題は、すぐれて政治性や社会性を強くもっているため、生徒の政治・社会意識の指標としても有効である。

まず、Aの社会の出来事への関心度とのクロス集計をみてみよう。「従軍慰安婦をめぐる問題」に対する関心度の度合いと他の項目の関心度は、明確に正比例していることがわかる。「とても関心がある」者の関心度は、全体の20%以上から2倍以上（「沖縄の米軍基地問題」2.2倍、「諫早湾の干拓問題」2.5倍、「銀行・証券会社の“ビッグバン”について」2.8倍）に達している。これに対して「まったく関心がない」者の関心度は極端に低い。このデータからも、関心度が政治・社会意識の高低を示していることがわかる。

そして、Bの社会的活動への参加意欲とのクロス集計でも、政治・社会意識の高い者の方が参加意欲が高いことがわかる。

また、Cにより日本のイメージとの関係を調べてみた。ここからは、「かなり関心がある」者が最も日本を肯定的にとらえていることがわかる。

では、政治・社会意識が最も高い層はどのような日本観をもっているのだろうか。生活水準は必ずしも高くないし、住み心地もよいとはいえない。男女平等も進んでいるとはいえないと思っている。この層の生徒たちは、日本の現状に批判的なイメージをもっていることがわかる。

以上のことから、政治・社会意識の最も高い生徒は社会活動への参加意欲があり、しかも現在の日本にはやや批判的な態度を示している。筆者たちの世代と同様の社会意識をもつ生徒たちもまだいることを示している。彼らの政治・社会意識を育てていくことも、今後の課題といえよう。

表3 - 5 政治意識の高低 × 社会の出来事への関心度・社会的活動への参加意欲・日本のイメージ

(%)

		従軍慰安婦を中学の教科書に載せたことをめぐる問題				
		とても 関心がある	かなり 関心がある	あまり 関心がない	まったく 関心がない	知らない
A 社会の 出来事への 関心度	1. オウム裁判問題	(72.2)	> 66.2	> 45.6	> 36.1	< 48.2
	2. 北朝鮮への食料支援問題	(80.5)	> 66.5	> 39.7	> 28.4	< 42.0
	3. 原発やゴミ焼却場の設置を住民投票で決める問題	(83.0)	> 65.7	> 38.2	> 26.1	< 36.1
	4. 沖縄の米軍基地問題	(83.0)	> 60.1	> 28.2	> 18.5	< 25.5
	5. 従軍慰安婦を中学の教科書に載せたことをめぐる問題	-----				
	6. 諫早湾の干拓問題	(61.6)	> 38.6	> 17.9	> 13.6	> 11.7
	7. 銀行・証券会社の“ビッグバン”について	(42.7)	> 22.0	> 12.6	> 9.9	> 4.4
B 社会的 活動への 参加意欲	1. 在日外国人との交流会	(83.5)	> 80.5	> 74.0	> 52.2	< 57.5
	2. 福祉ボランティア	69.8	< (77.0)	> 62.8	> 50.4	< 57.7
	3. 身近な環境の保全活動 (清掃や植樹)	74.2	< (75.0)	> 62.6	> 50.0	< 56.9
	4. 海外の環境保全活動	(78.0)	> 71.1	> 58.2	> 48.2	< 52.2
	5. 漂着重油の除去作業 (災害ボランティア)	(74.2)	> 69.8	> 56.7	> 42.7	< 51.5
	6. 海外の平和維持ボランティア	(74.8)	> 68.9	> 55.7	> 45.0	< 52.1
C 日本の イメージ	1. 無責任な政治家が多い	93.0	< (96.3)	> 92.0	> 90.6	> 89.4
	2. 学歴が物を言う社会である	(92.4)	> 91.5	> 89.7	> 84.2	< 87.2
	3. 生活水準が高い	81.6	< (89.6)	> 84.9	> 83.8	> 82.1
	4. 治安がよい	67.1	< (73.9)	> 70.6	> 66.7	> 60.1
	5. 住み心地がよい	59.2	< (66.4)	> 66.0	> 63.5	< 65.8
	6. 民主化が進んでいる	50.3	< (59.9)	> 53.2	> 51.4	> 48.9
	7. 男女平等が進んでいる	35.9	< 43.6	< 48.9	> 47.3	< (50.0)
	8. 自然が美しい	(44.3)	> 43.1	> 36.8	> 34.7	> 30.3
	9. 自由が尊重されている	32.9	< (37.4)	> 30.7	< 33.4	< 34.7
	10. 生命を大事にしている社会である	28.9	< 31.5	< (36.3)	> 29.0	< 31.7
	11. 親切な人が多い	29.6	< (30.4)	> 28.8	< 29.7	> 28.1

A 「とても」 + 「かなり」 関心がある割合
 B 「ぜひ」 + 「なるべく」 参加したい割合
 C 「とても」 + 「かなり」 そう思う割合
 () は各尺度の最大値 ~~~~~ は各尺度の最小値
 (有意差は $\alpha < 0.05$)

4 章 ||||

環境問題

最近は徐々にではあるが、広く環境や自然を見直そうという動きがみられるようになってきた。1997年は、国の内外で環境問題への大きな取り組みが行われた年でもあった。6月にニューヨークの国連本部で国連環境開発特別総会が開かれた。地球環境の現状を総点検し、21世紀への環境保全への行動指針をまとめた。さらに、地球温暖化防止のために、日本が議長国になり、12月1日から10日まで、京都市で国際会議がもたれた（「地球温暖化防止京都会議」）。世界の約160の国や国際機関の代表、非政府組織（NGO）など約1万人が集まり、CO₂などの温室効果ガスの排出量削減の数値目標を決定した。こうした国際的な取り決めが緊急を要することを実証するかのようになり、環境問題は世界各地で深刻化の一途をたどっている。

エルニーニョ現象による異常気象の頻発。インドネシアの山林火災による煙霧（スモッグ）の被害。また日本海では、ロシア船籍のタンカーが重油を積んだまま沈没し、石川、新潟、福井各県などの海岸に重油が漂着して沿岸漁民に甚大な被害を与えた。一方こうした中から、環境被害の救援ボランティア活動

の気運が芽生えてきた。また、環境にやさしい車が登場したり、ゴミの減量化・資源化、水辺環境の保全や修復を考えた活動などが各地で行われはじめた。新たな注目すべき動きである。

バブル経済の中で少年期を過ごしてきた現在の高校生にとって、モノの豊かさへの欲望は肥大化し、欲しいものは何でも手にでき、使い捨ては当然視される傾向がある。しかし、今後の社会の発展を考えると、私たちはこれまでの生活スタイルの見直しを迫られていることも確かなようである。今の若者に対しては、自己中心的でまわりの迷惑をかえりみないとか、現状に甘んじて他者とのかわりをもととしないとか、グローバルな視野に欠けるなどといわれる。そうした彼らが、このような地球的規模の環境問題をどのように受け止めているか。身近な生活の中で、具体的にどんな行動や経験の違いとしてあらわれてくるのか。そして環境や自然にやさしい高校生の姿として、どんな特徴が浮かび上がるのであろうか。

高校生の社会意識をこうした側面から明らかにしてみたいと思う。

1 環境問題への関心

環境問題へのアプローチには、さまざまな方法が考えられるが、ここではまず、身近な生活レベルにおいて高校生が自然とどのようなかわりあいをもって生活しているのかをみることにしたい。

まず表4-1は、環境や自然などの保護に、ふだんから気をつけているかどうかを尋ねた結果である。全体としては、「とても気をつ

けている」者は1割に満たないが、「まあ気をつけている」者を合わせれば、「環境や自然保護」の意識のある者は46.2%である。逆に「気をつけていない」者は15.0%、「どちらともいえない」者は38.8%である。半数近くの者は、ふだんから何らかの意味で環境や自然保護の意識をもっている。

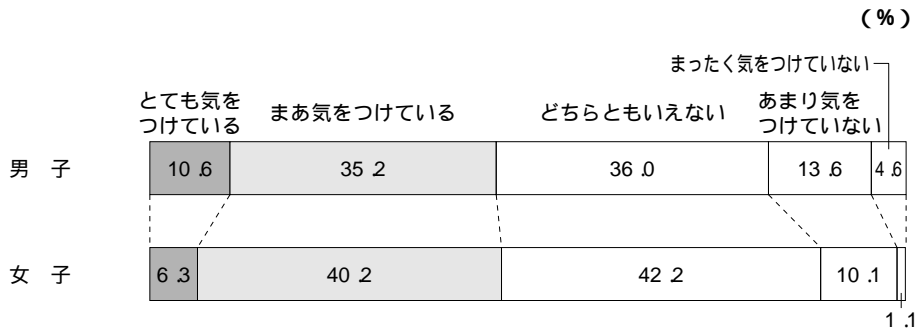
学年別では、環境・自然保護意識は2年生

表4-1 環境や自然保護の意識 × 学年

(%)

	とても気をつけている	まあ気をつけている	どちらともいえない	あまり気をつけていない	まったく気をつけていない
全 体	8.6	37.6	38.8	12.0	3.0
1 年	8.5	36.8	38.6	12.3	3.8
2 年	9.7	38.5	38.8	11.1	1.9
3 年	4.5	37.7	40.9	14.3	2.6

図4-1 環境や自然保護の意識 × 性



がやや高く48.2%、次いで1年生45.3%、3年生42.2%となっている。1、2年生と3年生の間にやや意識の差がある。また、男子と女子で比べると、図4-1から、自分では環境に配慮していると思う意識はほぼ似た結果である。

次に、学校別でみたのが表4-2である。ここで際立っているのはA校の環境・自然保護意識の高さである。「とても気をつけている」12.8%、「まあ気をつけている」42.3%であり、半数以上の者がふだんから環境問題への意識をもっているようである。「とても」と「まあ」を合わせてみると、D校47.8

%、E校49.4%も半数近くになっている。低い方ではC校が39.6%であり、A校とC校の意識には15.5%の開きがある。

では、こうした意識の高低は、ふだんの生活行動とどう結びつくのであろうか。表4-3は、ふだんの生活の中で自然とかかわる6種の行動について、どの程度行っているのかを尋ねたものである（「いつもしている」～「ぜんぜんしていない」の4段階）。結果は、「いつもしている」と「たまにしている」を合わせて示してある。

全体に最も多かったのは、「1人で自然の景色を眺める」66.7%、以下順に「生き物

表4-2 環境や自然保護の意識 × 学校

(%)

	とても気をつけている	まあ気をつけている	どちらともいえない	あまり気をつけていない	まったく気をつけていない
A 校	12.8	42.3	33.3	10.3	1.3
B 校	8.9	35.2	37.6	14.2	4.1
C 校	5.4	34.2	45.0	8.1	7.2
D 校	9.2	38.6	39.8	11.2	1.2
E 校	7.5	41.9	37.9	10.7	2.0
F 校	8.6	33.3	44.4	11.1	2.5

表4-3 ふだんの生活行動 × 学年

(%)

	1人で自然の景色を眺める	自然にふれながら散歩をする	花を部屋に飾る	花や植木を育てる	生き物をペットとして飼う	知らない花や鳥の名前を調べる
全 体	66.7	32.0	34.0	29.6	43.4	7.6
1 年	66.2	31.8	34.0	32.0	42.8	7.6
2 年	66.2	30.6	33.4	26.6	44.6	8.4
3 年	72.0	37.7	37.0	27.3	41.5	7.1

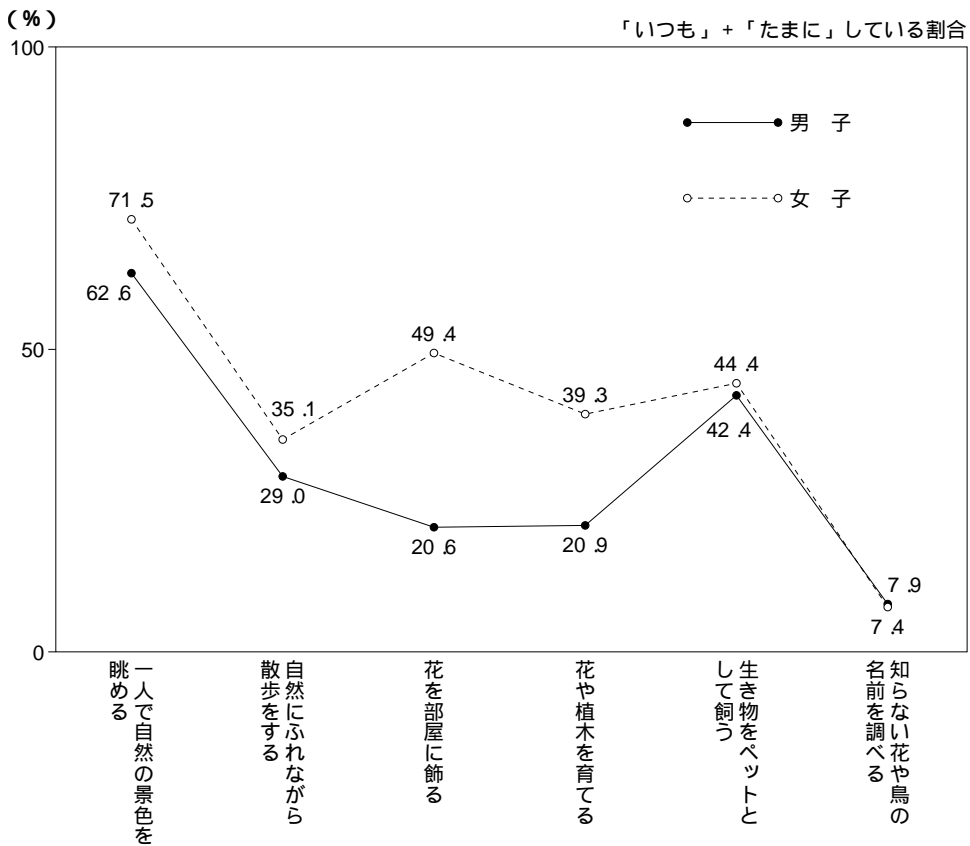
「いつも」+「たまに」している割合

をペットとして飼う」43.4%、「花を部屋に飾る」34.0%、「自然にふれながら散歩をする」32.0%、「花や植木を育てる」29.6%、そして最も回数の低い割合は、「知らない花や鳥の名前を調べる」行動で、わずか7.6%であった。この中で半数に上る者が、生き物を飼う経験をしていることがわかった。もちろん、生き物といっても犬や猫や小鳥、金魚のようなポピュラーな生き物から、アリやトカゲやザリガニといったマニアックなものまでいろいろであろう。また、野山や海辺の自然がわれわれの身近なものとしてあったかつてなら、生き物との接触などはごくあたりま

えの日常であったであろう。そうした頃とは比べられないが、とにかく命ある生き物とかわりあっている高校生は約半数いる。

男女別にみると、図4-2から男子と女子で大きく差が開くのは、「花を部屋に飾る」女子49.4%>男子20.6%（差28.8%）、「花や植木を育てる」女子39.3%>男子20.9%（差18.4%）の2つの行動である。ガーデニングを楽しむ高校生は、女子の方が多いようである。生き物をペットに飼うのもいくぶん女子の方が上回っているようだが、それほど差にはなっていない。

図4-2 ふだんの生活行動 × 性



2 直接の自然体験や活動経験

そこで次に、自然とのかかわりを単にふれあいというレベルにとどまらず、自らの直接的な自然体験や行動について尋ねてみた。その結果を全体と学校・男女別の比較として示したのが、表4 - 4である。総体的に高校生にとって直接体験となると、体験率が低くなってしまふのは否めない。全体的にみると「オリエンテーリングをする」が一番多く37.0%、以下「田植え・稲刈りなどをする」26.6%、「自然観察の記録や日誌をつける」24.4%となる。割合としては高校生の3、4人に1人はこうしたものを体験していることになる。ただ、最近の学校活動にはオリエンテーリングや田植え・稲刈りなどがレクリエーション行事や修学旅行などに取り入れられている傾向も見逃せないので、この数値は自主的な体験率とばかりみるわけにもいかないようである。

一方、本来の自主的な活動になると思われる自然保護のボランティア活動や自然観察会への参加はせいぜい1割前後である。こうし

た分野への関心はまだまだ薄く、かかわり方も少ないといえよう。

学校の男女別でみると、まず第一に、オリエンテーリングや自然観察の記録や日誌をつけたりしたことがあるのは、どの学校でも男子より女子の方が多い。第二に、田植え・稲刈りの経験は、修学旅行などでの実施の有無も左右していようが、さらには学校が立地する地域環境の差も無視し得ないようだ。というのもA校、B校、C校とE校、F校を比較すると、男女とも前者より後者の学校の方が体験率が高くなっている。A、B、C校は、東京や千葉といった首都圏にある学校であり、E、F校は富山や福井という地方都市に属している。それゆえに単に男女の差だけの要因で判断することは危険であろう。自然とのふれあいや具体的な体験活動については、やはりなんといっても生徒や学校をとりまく地域の環境的要因が影響してくるのは当然であろう。

表4 - 4 これまでの自然体験や行動 × 学校・性

	全体	(%)											
		A校		B校		C校		D校		E校		F校	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
オリエンテーリングをする	37.0	24.3	29.3	37.0	46.6	20.5	31.9	29.5	44.3	38.8	45.8	8.8	14.9
田植え・稲刈りなどをする	26.6	24.3	24.4	19.9	24.5	24.4	14.3	21.5	28.9	45.0	35.2	38.2	38.3
自然観察の記録や日誌をつける	24.4	18.9	41.5	19.4	40.7	22.0	30.0	16.4	34.0	18.6	19.9	14.7	17.0
自然保護ボランティアに参加する	13.2	13.5	9.7	13.6	19.3	12.2	8.6	9.8	10.3	21.8	7.8	5.9	19.1
自然観察会に参加する	8.8	18.9	14.7	9.6	9.3	9.8	8.6	5.0	5.8	11.6	8.8	—	10.6

(注)「自然観察会に参加」の項目の女子(0/231)を除いて、²検定は、 $\alpha < 0.05$

「何度も」+「たまに」ある割合

3 地域や住民への環境評価

それでは、現代の高校生は、自分の住んでいる町の生活環境や町の人々の環境意識に対してどのように感じているのであろうか。表4-5は、その点を学校別にみたものである。質問は8つの項目に関して、「とてもそう思う」～「わからない」の5段階で尋ねている。表の数値は、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせた肯定的な割合である。まず全体をみて高い割合の順に並べてみると、

空き缶やゴミの始末がよくない82.3%、車の排気ガスの増加79.9%、子どもの遊び場の減少70.8%、空き地の宅地化70.3%が目立つ。7割以上の者が最近の環境の悪化の事実をあげている。

一方、どちらかといえば環境の好転になりそうな、庭やベランダで花や植木を楽しむ人が多いとか川の水がきれいになってきたなどの評価は、半数以下である。特に川の水の浄

化を肯定する者は1割にも満たず、厳しい評価が下されている。

学校別では、トップの空き缶やゴミの始末の悪さに関しては、どの学校もほぼ同様に8割強の割合を示していて、日本全国悪化の様相である。しかし、地域環境の悪化を思わせる車の排気ガスの増加、子どもの遊び場の減少、公園や人家のまわりのカラスの増加などに関しては、いずれもB校、C校のいずれかが最大の割合を示す結果となっている。すなわち地方都市の学校よりは首都圏の学校の生徒の方が、環境悪化の感じを一層強めているようである。ただA校が、その一方で、庭で花や植木を楽しむ人が多く、また川の水の浄化を肯定した割合が比較的多かったのは、首都圏でも郊外のベッドタウンに位置していることによるものと考えられる。

表4-5 自分の住む地域や住民に対する環境評価 × 学校

	(%)						
	全体	A校	B校	C校	D校	E校	F校
空き缶やゴミの始末がよくない	82.3	81.6	82.9	82.7	81.0	82.6	83.9
車の排気ガスの増加	79.9	79.3	82.4	85.5	77.5	75.5	83.9
子どもの遊び場の減少	70.8	67.6	74.1	74.5	70.0	66.7	62.9
空き地の宅地化	70.3	78.2	61.4	77.9	75.6	75.9	72.8
生活の便利化	59.5	52.6	55.9	61.8	65.2	60.3	59.2
町のカラスの増加	56.7	46.8	74.3	59.1	36.8	50.7	47.0
庭で草花を楽しむ人が多い	47.0	66.6	50.9	61.8	35.2	45.8	41.9
川の水がきれいになった	7.0	12.8	7.3	4.5	6.8	6.6	5.0

(注) 「生活の便利化」の項目(0.088)を除いて、

²検定は、 $\alpha < 0.05$

「とても」+「まあ」そう思う割合

4 自然にやさしい生活スタイルへの努力 ―

将来的に環境保全をはかるためには、都市構造を変えて自然を生かした「まちづくり」を進めたり、地球環境に配慮した企業や商品を消費者が選んだり、住民の生活スタイルを変えるような取り組みが欠かせない。しかし社会的には、高校生の生活行動はある程度限られた範囲のものにならざるをえない。とはいえ社会の将来を担う世代として、環境保全の意識や自然と調和した生活のスタイルなどを高校生なりに考えていくことは、きわめて重要な課題であろう。たとえば地域環境の良し悪し1つをとっても、そこに住む住民一人ひとりの考え方や行動の取り方によって大きく左右されてくるものである。その意味からも、高校生が日常的にどのような生活のスタイルを取っているのかをぜひ知りたいと思った。

そこで省エネルギー行動や健康志向の食生活、また環境を大切に生活行動などを日頃どの程度行っているのかを尋ねた。図4-3は、「よくある」と「かなりある」を合わせた割合で、項目の横の数値は、全体をあらわす。まずそれをみると、過半数以上の生徒が行っている行動は、割合の高いものから順に「ゴミを分別して出す」69.6%、「電気をこまめに消す」58.6%、「ジュース、コーラより日本茶、ウーロン茶などを飲む」52.5%、「再生紙を使う」50.2%などである。また、「道端に空き缶をポイ捨てする」と答えた者は2割。となれば、残り8割の生徒はそうしないように心がけているということであろう。

日頃高校生と直接かかわっていて、彼らのマナーの悪さについて厳しくなりがちな現場教師としては、この数字はやや手前勝手かなという気もしないではない。低い方では、「インスタント食品は食べないようにする」

33.6%、「食品添加物に注意している」26.0%、「買い物のビニール袋や包装紙はもらわない」21.6%などである。

学年差と男女差がかなりはっきり開いているのは、「ジュース、コーラより日本茶、ウーロン茶などを飲む」「再生紙を使う」「インスタント食品を食べないようにする」「道端に空き缶をポイ捨てする」行動についてである。もう少し詳しくみていくと、学年差と男女差について以下のようなことがまとめられよう。

1年生については、「買い物のビニール袋や包装紙はもらわない」を除けば、男子より女子の方が自然へのやさしい行動がみられる。

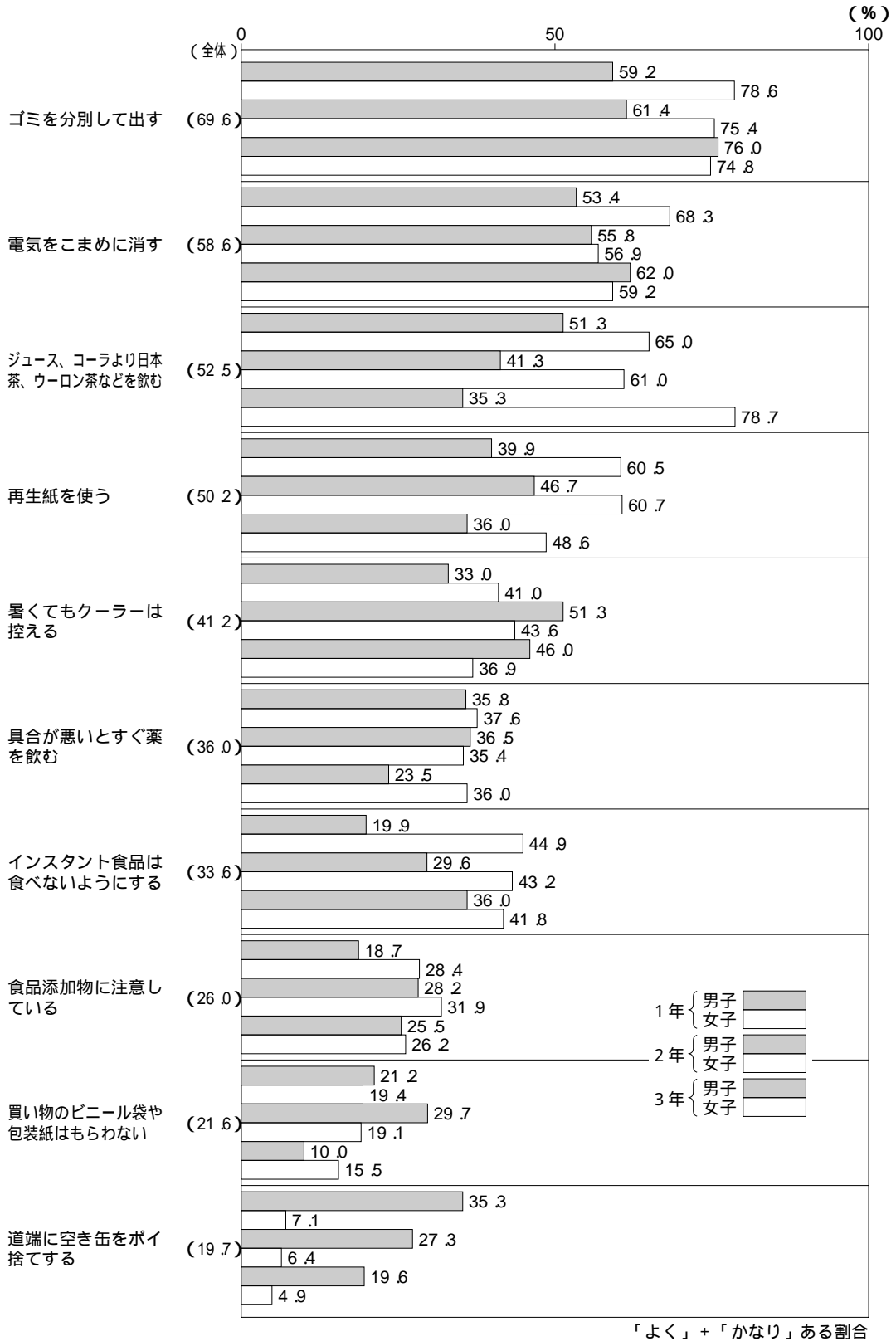
「道端に空き缶をポイ捨てする」は、学年・男女を通じて1年男子が最も多いようである。全体に女子より男子の方がポイ捨てを行う傾向も高い。

「ゴミを分別して出す」は、3年生が高く男女の差は少ない。1、2年生は女子の方が2割程度も多い。

「ジュース、コーラより日本茶、ウーロン茶」「インスタント食品を食べないようにする」「食品添加物に注意している」などの食物関係の項目では、男子よりも女子の方が圧倒的に気を配っている。清涼飲料については、とりわけ3年生になるとその差が顕著である。

以上のような差異の傾向から考えられることは、男子は総じて環境や自然に対する生活行動があまりに無頓着すぎるようだ。その一方、女子は全体に自然にやさしい生活への心遣いがよくあらわれている。前にみた地域や住民への環境評価では、空き缶のポイ捨てやゴミの始末の悪さに関して8割以上の者がそれを指摘し、トップにランクされた。そのこ

図4 - 3 自然にやさしい生活への心がけ × 学年・性



とを考えると、自分たち自身の実際の行動面では、特に男子の環境保全や自然への配慮のいたらなさ、あえていえば努力不足を指摘せざるを得ない。高校生ともなると、どうしても地域社会との結びつきが稀薄になりがちで

ある。だが地域社会の一員としての意識をもう少しもてば、そうした環境破壊的な行為がまわりの人や地域社会に対して、いかに迷惑になっているかが理解できるようになるのではないだろうか。

5 高い環境調和型の社会意識

これまでの社会の仕組みは、どちらかといえば大量生産 大量消費 大量廃棄というサイクルを構造的に作り上げて、経済的に発展してきたように思う。しかしこうした社会構造そのものが、環境に対して過剰なまでの負担をかけてきたことも確かであろう。それゆえ今はまさに一人ひとりが求める「豊かな生活」の質を問われているといえよう。いうならば、さらなる経済発展を優先すべきと考えるのか、環境・自然保護を優先すべきと考えるのかという選択にもつながろう。当然ながら環境・自然保護のためには生活の便利さは

抑制され、時には不便を覚悟するという意識も求められてこよう。

表4 - 6は、そうした両者の考えをそれぞれ反映した8つの意見に関して、賛否の態度を回答してもらった結果である。表は、「とても賛成」と「かなり賛成」を合わせた割合である。全体的には、環境保護優先的な項目を支持する態度がはっきりとあらわれた。具体的な項目では、食器洗いや洗濯に合成洗剤は使わないようにする52.5%、スピードはあまり出なくても、タクシーは電気自動車にする46.3%、絶滅しかけた野生動物

表4 - 6 経済開発優先VS環境保護優先の意見評価 × 性・学年

(%)

	全体	男子	女子	1年	2年	3年
合成洗剤は使わない	52.5	47.7	57.9	49.6	55.7	55.6
スピードは出なくても、タクシーは電気自動車にする	46.3	49.8	42.2	47.2	46.5	39.8
絶滅しかけた野生動物を人工繁殖させる	45.3	50.9	38.8	46.3	45.1	39.5
マイカー通勤は控える	28.6	29.1	28.0	31.7	24.5	27.5
クジラやペンギンの観光を商業にする	12.7	16.0	8.8	14.7	11.8	3.9
住民に被害を与える有害鳥獣は駆除する	8.6	12.1	4.7	9.7	8.3	4.6
生活のためなら大量消費もやむを得ない	7.0	10.1	3.2	7.0	6.5	8.5
都市開発による森林破壊も仕方がない	5.4	8.3	2.2	6.0	5.4	2.0

(注) 男子・女子の性別クロスの²検定は全項目 $\alpha < 0.05$ である。

「とても」+「かなり」賛成の割合

を人工的に繁殖させる45.3%などの意見は、半数近くの賛成意見を集めた。逆に経済開発優先派の意見は、例えば 山村住民に被害を与える有害鳥獣の駆除8.6%、生活の快適さのためなら、物やエネルギーの大量消費もやむを得ない7.0%、都市計画のために森林が破壊されるのは仕方がない15.4%などにみられるように、支持率は1割未満でしかなかった（なお、……は支持率の多い順位）。

男子と女子の差は、「合成洗剤は使わないようにする」で女子が優っている点を除けば、残りの項目は男子が多い。また学年差は、1年生ほど環境保護優先的な意見に賛成する割

合が目立つ。けれども実際の行動面では1年生の男子は、空き缶のポイ捨てやゴミの分別処理などで最も環境保護意識の薄い行動をとっていた。そのことを考え合わせると、何とも矛盾した、未成熟な意識態度であるといわざるを得ない。

表4-7は、カイ2乗（ χ^2 ）検定で5%水準の有意差があらわれた項目を学校別にみたものである。A校はやはり環境保護的な意見を強く支持する割合が、他の学校と比べてきわめて高い。有害鳥獣の駆除をめぐるでは、首都圏の学校と地方都市の学校間で多少意識のズレがみられるようだ。

表4-7 経済開発優先VS環境保護優先の意見評価 × 学校

(%)

	A 校	B 校	C 校	D 校	E 校	F 校
合成洗剤は使わない	67.1	49.8	54.6	53.8	55.7	37.0
マイカー通勤を控える	46.1	34.6	28.4	22.2	24.0	16.1
住民に被害を与える有害鳥獣は駆除する	10.6	10.5	9.0	8.0	5.3	7.1

($\alpha < 0.05$)

「とても」+「かなり」賛成の割合

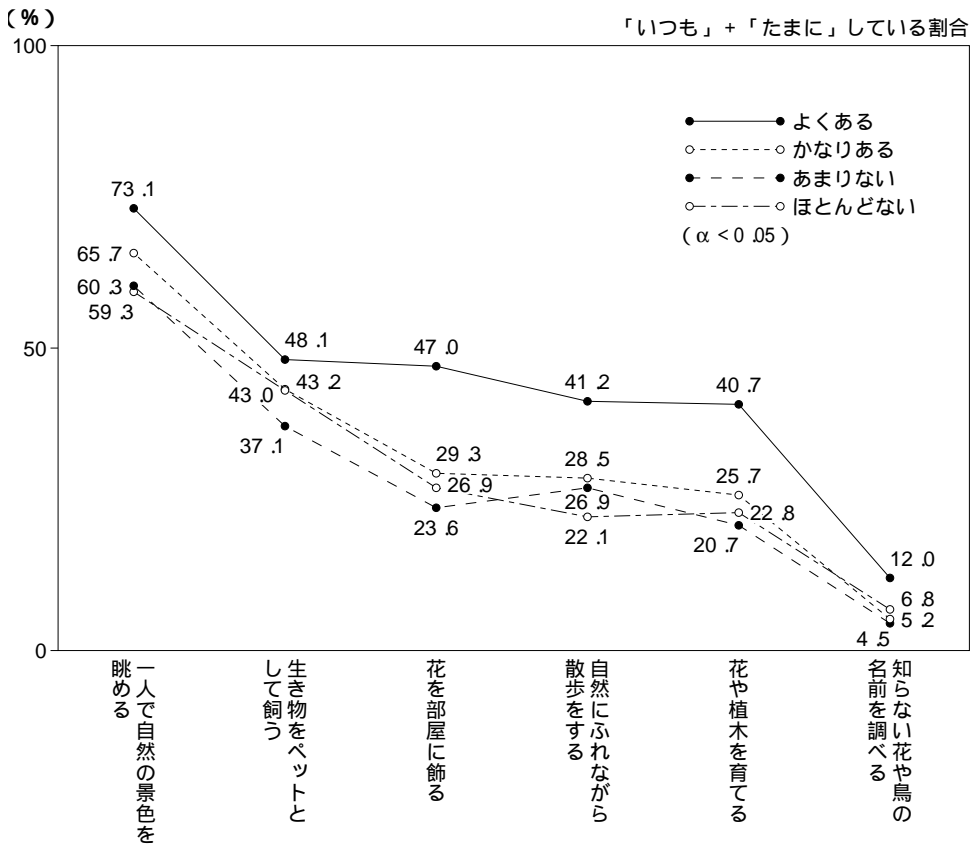
6 自然にやさしいタイプの高校生と将来の地球環境

では環境保護意識の高い高校生たちのふだんの生活行動にはどのような特徴があるのでしょうか。これまですでに、ふだんの生活における自然とのふれあいや自然体験についてはみてきた。それらを通して、生き物をペットとして飼っているのは高校生のおよそ2人に1人であり、花を部屋に飾ったり花や植木を育てたりするのは男子より女子の方が多いことがわかった。そこでこのようなふだんの

生活行動は環境保護意識とどのようにかかわっているのか、その点を探ってみたい。

図4-4は、ふだんとしている行動と環境保護優先の考えがかなりはっきり出ている「ゴミを分別して出す」とのクロスの割合を図であらわしたものである。ゴミを分別して出している環境保護意識の高い高校生ほど、ふだんから自然とのふれあいがあるという傾向がはっきり出ている。

図4-4 ふだんの生活行動 × ゴミを分別して出す

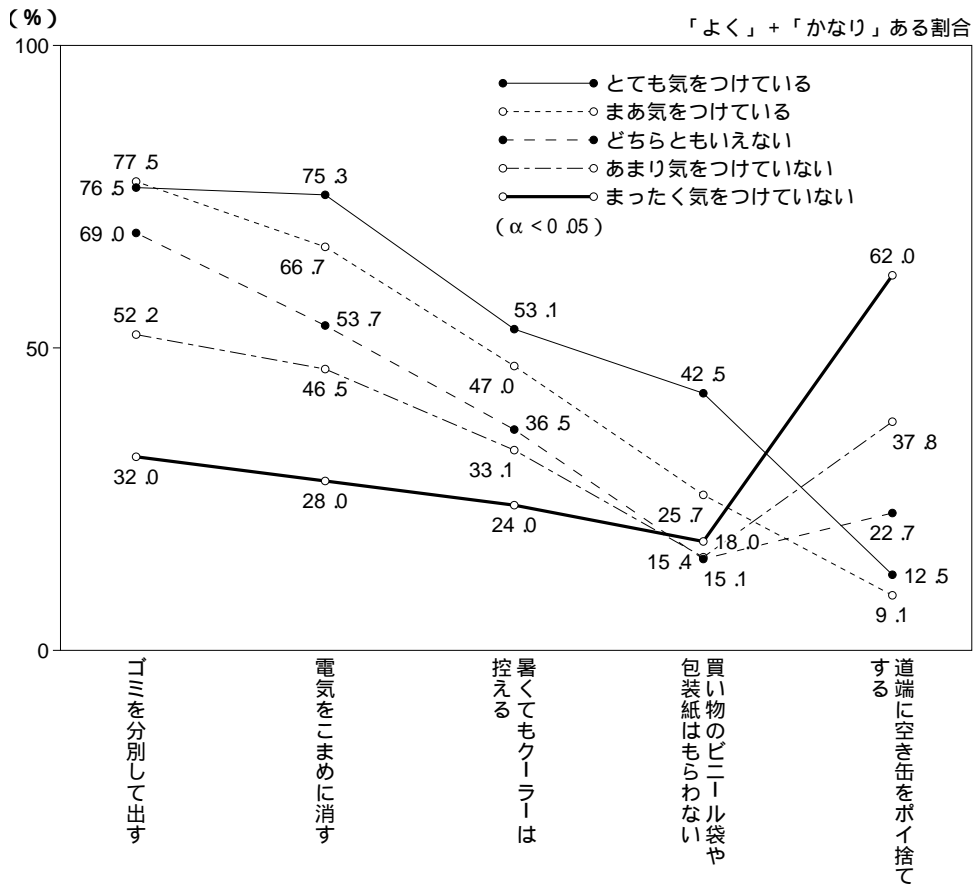


そうした環境や自然保護の意識の高低が、日常生活の場面において自然にやさしい行動とどう結びついているかをみたのが図4 - 5である。図からは、やはり環境保護意識の高さとふだんの環境保護的な行動との相関がはっきりみとれる。環境保護意識が高いほど自然にやさしい行動となってあらわれているようだ。どうやら環境保護意識の高い高校生

は、日常的にもよく環境問題を考えて行動していることがうかがえる。

だがその一方で、そうした意識が薄い、どちらかといえば環境問題に無頓着な高校生も割合としては半数近くいた。そうした彼らにしても、これまで人類を育ててくれた地球の環境が、このままの姿で未来に引き継がれていくとは考えにくいであろう。その意味

図4 - 5 自然にやさしい生活の心がけ × 環境や自然保護の意識



で、将来の地球環境への見通しを尋ねてみた。

表4 - 8は、その結果を学年の男女別であらわしたものである。全体的に、将来を楽観的にみている者はさすがに少なく、1割を超えた程度でしかない。それに対して「まったく楽観していない」者は31.2%、「あまり楽観していない」者は41.6%というように、7割以上の者が決して楽観できない気持ちで

いることがわかった。豊かさを自明のものとしているかのような高校生でも、将来の地球環境に対しては深刻に感じているという結果に、いくぶん安堵感をもてた。けれどもそうした将来の地球環境に対する見方が、社会の中での現実の生活のスタイルや経済活動のあり方などどうまく結びつけて認識できていないようである。

表4 - 8 将来の地球環境に対する見方 × 学年・性

(%)

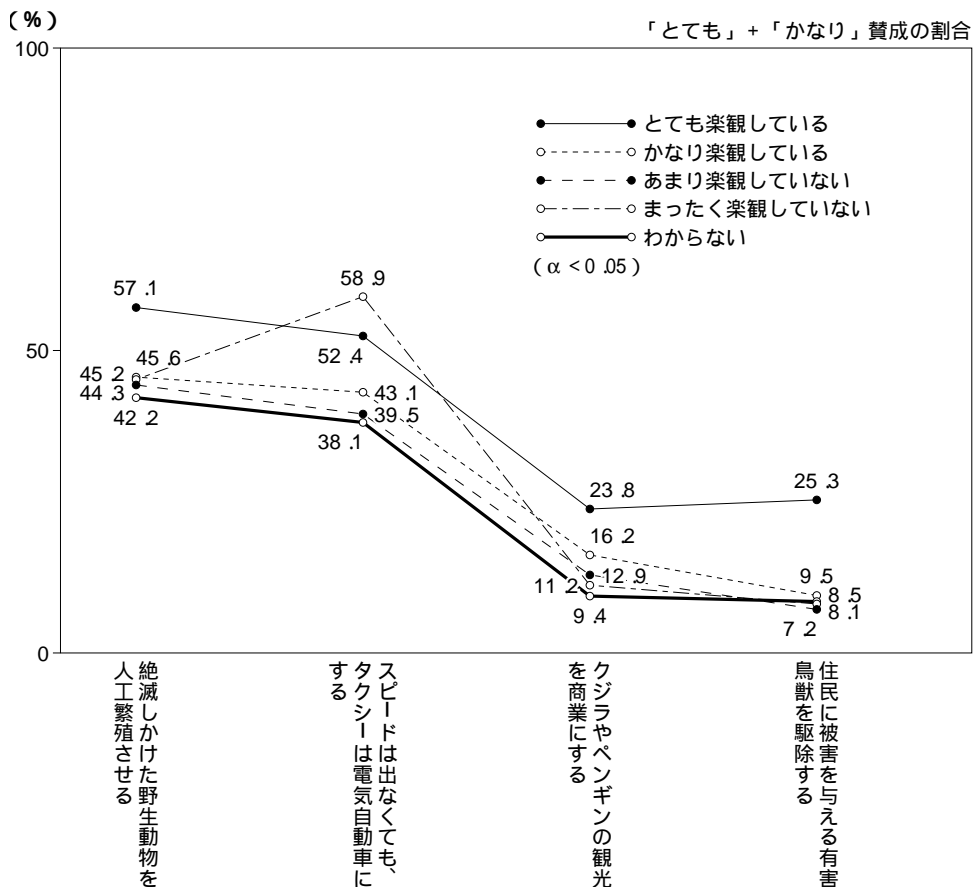
		とても楽観している	かなり楽観している	あまり楽観していない	まったく楽観していない	わからない
全 体		3.8	10.7	41.6	31.2	12.6
1 年	男 子	6.2	13.0	41.7	26.4	12.6
	女 子	1.8	10.6	42.8	28.1	16.7
2 年	男 子	3.7	11.7	39.1	35.7	9.7
	女 子	3.2	7.1	42.4	35.3	12.0
3 年	男 子	4.0	10.0	38.0	36.0	12.0
	女 子	1.9	6.8	45.6	35.9	9.7

図4 - 6は、社会活動において経済開発を優先した考えを支持するか、あるいは環境保護を優先する考えなのかによって、将来の地球環境の見方がどう変わるかをみたものである。将来の地球環境に対して楽観的であればあるほど、環境保全を犠牲にしてまでも産業活動を優先し、「豊かな生活」を追求する構図が描かれている。また、楽観的でない者についても、地球の環境が将来的に深刻化するという事はわかっているが、やはり「豊かな生活」を支える経済の成長を重視せざるを得ないという本音がみて取れる。戦後の高度経済成長を押し進めてきたのは、まさにこのような社会意識であり路線であったのは、あらためて言うまでもない。ではそれに代わるべき意識変革の方向はどこにあるのか。それ

はまずもって社会の隅々から環境に調和した、少なくとも地球や自然を犠牲にしない、新たな豊かさを求めていく行動やライフスタイルになるのではないだろうか。

このようにみてくると、高校生にとっても環境問題は単に教科書で教わる知識にとどまるのではなく、むしろさりげなく自然とふれあえる感性を育てたり、自分で直接生の自然を体験し味わってみたりすることから始まるのではないだろうか。メディア環境が高度化し、リアリティがますますバーチャル化している現在、子どもたちの成長を長い目でみると、意外にこのようなことが新しい時代の社会意識を形成していくモメントになるのかもかもしれない。

図4 - 6 経済開発優先VS環境保護優先の意見評価 × 将来の地球環境に対する見方



5 章 ||||

ボランティア活動

前章までに述べてきたように、現在の高校生の中に、必ずしも国家や社会に無関心とはいえないという側面や、身近な具体的問題には関心があるという側面をみることができた。そしてまた、そのような社会的な意識や関心が、どのように実際の行動と結びついていくのかという問題も指摘された。

本章では、これらの指摘された変化や問題に対し、社会的な活動の新しい形の1つともいえるボランティア活動を通して考えてみたい。

まず、現在の高校生のボランティア活動の

実態を分析して、その特徴や男女間の差異について試みる。次に、高校におけるボランティア活動に焦点をあて、学校を通してのボランティア活動の問題点や可能性について探ってみる。さらに、高校生のボランティア観をもう少し広範に分析する中から、ボランティア活動の将来についても考えてみる。そしてこれらの分析を通して、学校を通してのボランティア活動の拡大の可能性や、新しいボランティア観、さらにまた将来のボランティア活動の動向などについて分析してみたい。

1 高校生のボランティア活動の実態

今回の調査によると、ボランティア活動の経験のある者は、女子49.0%、男子40.9%で、半数近くの者に活動の経験があることがわかった。しかし、自分から進んで個人的に参加したり活動したりしている者は、それほど多くはない。ボランティア活動をしたことがある生徒にそのきっかけを尋ねたところ、表5-1からわかるように、「学校を通して課題や行事で」参加した者が一番多く、次い

で「学校を通して希望して」参加した者となった。複数回答が含まれるため単純な割合ではないが、活動のきっかけの7割近くは学校を通しての形をとっていることがわかる。

また、学校を通して参加している者についても、「学校を通して課題や行事で」というきっかけの方が、「自分から希望して」というきっかけよりもはるかに多かった。ボランティア活動の基本的な性格の1つである「自

発性」という点では気になる面もあるが、現在の高校生のボランティア活動の特徴の1つといえよう。

次いで、高校でのボランティア活動の経験日数をまとめたものが、表5 - 2である。これによると、1日だけ経験したことがあるという者が33.7%と一番多く、また1日～3日の経験者の合計は74.8%で、高校でボランティア活動をした者の4分の3は、1日～3日という比較的短い、継続性のないボランティア活動をしていることがわかる。

活動内容については、自由回答の方式をと

ったため数値的な比較はできないが、一番多かったのが「地域のゴミ拾いや清掃」「空き缶や廃品の回収」など自然や環境を守る活動といえるもので、そのほかに「老人ホームの慰問や手伝い」「募金活動」「障害をもつ人を助ける」などが目についた。

以上のことから、高校生のボランティア活動の典型像は、「学校を通して課題や行事で」という形で、1～3日の期間、学校近辺の「掃除」や「ゴミ拾い」などの活動をしたことがあるという姿が浮かんでくる。

表5 - 1 ボランティア活動に参加したきっかけ

学校を通して課題や行事で	725人	43.6%
学校を通して希望して	420人	25.3%
団体やグループを通して	324人	19.5%
自分で個人的に	194人	11.7%

(%は、回答のあった1,663人に対する比率)

表5 - 2 高校でのボランティア活動の経験日数

(%)

1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日以上
33.7	26.6	14.5	5.7	4.6	1.4	3.9	0.0	0.4	5.7	3.5
(合計74.8)										

(%は、高校でのボランティア活動の経験のある282人に対する比率)

2 高校生のボランティア活動の男女差

ボランティア活動の経験や考え方について、男女の間にどれくらいの差異がみられるのか、そのいくつかをまとめたのが表5 - 3である。

まずボランティア活動の経験のある者は、前述のように女子49.0%、男子40.9%で、女子の方が10%近く高い数字を示している。

次に、ボランティア活動の経験のない者に

その希望を尋ねたところ、「ぜひやりたい」と「できたらやりたい」の合計は女子69.6%で、男子の44.4%を大きく上回った。また、ボランティア活動に関する情報や機会を求めている数字をみても、女子の方が男子よりも多い。これらのことから、男子に比べて女子の方が、ボランティア活動に対してはるかに積極的な姿勢をもっていることがわかる。

表5 - 3 ボランティア活動についての男女間の差異

(%)

	男 子		女 子
ボランティア活動の経験がある	40.9	<	49.0
未経験者のボランティア活動をやってみたいという希望（ぜひやりたい+できたらやりたい）	44.4	<	69.6
ボランティア活動の情報や機会を増やしてほしい	56.5	<	76.6
学校行事にボランティア活動を取り入れるべきだ	39.4	<	51.2

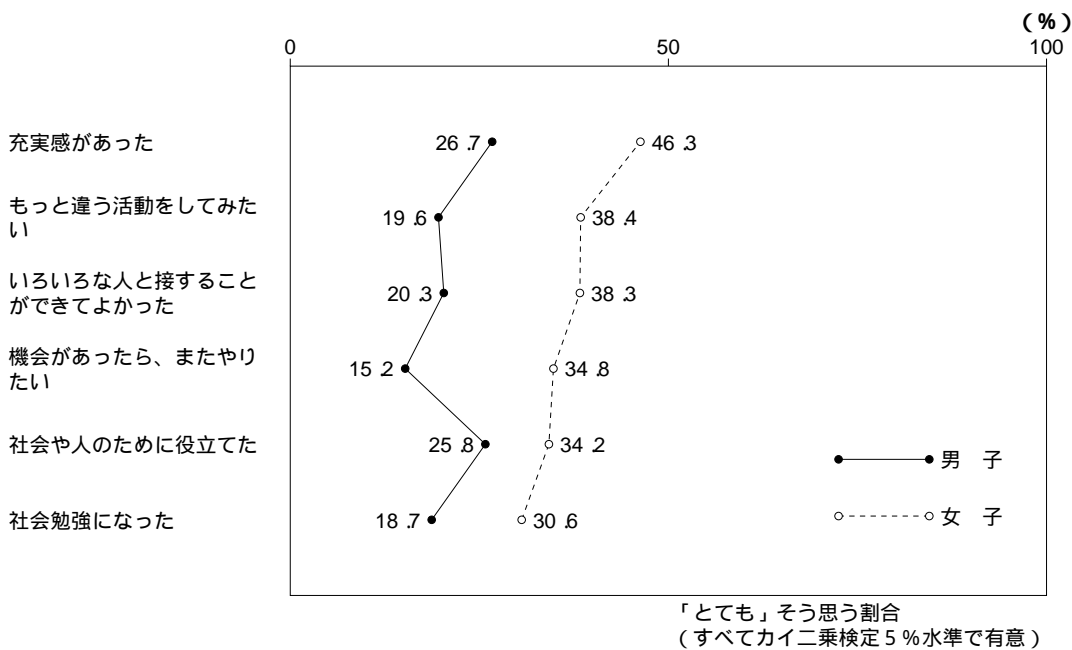
（すべてカイ二乗検定5%水準で有意）

このような男女差は、その次の図5 - 1からもわかるように、ボランティア活動を実際に経験してみた後の感想にもあらわれている。図5 - 1は、ボランティア活動をやってみてどのように感じたかについて、「とてもそう思う」という回答に絞って男女別に比較したものである。どの項目についても、女子の方が男子に比べはるかに肯定的に、積極的に感じていることがわかる。特に「機会があったら、またやりたい」という回答は、女子が男子の2倍以上あり（女子34.8%、男子15.2%）。逆に、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」という否定的な回答の合計は、女子の21.3%に対し男子では43.4%

と大きく逆転していることがわかる。

以上のことから、ボランティア活動に関する男女の差は、単に意識の差（希望や想像）だけではなく、ボランティア活動を実際にやってみてからの感じ方や、もう一度やってみようという希望にもあらわれていることがわかる。そしてこのことはまた、ボランティア活動については男女間に基本的な差があるのではないかということをも予測させる。これらの特徴は後に述べるように、学校でボランティア活動を積極的に取り入れていく場合や、将来ボランティア活動がより広がっていくのではないかと考えるとき、念頭に置いておくべき重要な事項ではないだろうか。

図5 - 1 ボランティア活動経験の感じ方 × 性



3 学校を通してのボランティア活動

1) 高校生のボランティア活動への思い

高校生はボランティア活動に参加することについて、一般的にどのように考えているのだろうか。

まず、ボランティア活動の経験がない者について、その希望をみてみよう。前述のように、本調査によるとボランティア活動の経験のない者は男子で59.1%、女子で51.0%で、おおよそ半数強の者が未経験である。これらの未経験者に、ボランティア活動をやってみたいかを尋ねた結果は表5-4の通りで、「ぜひやりたい」に「できたらやりたい」を

加えた希望者は5割近くに上り、特に女子の未経験者はその7割近くがやってみたいと考えていることがわかる。ボランティア活動の未経験者も、ある程度積極的な姿勢をもってしているといえる。

次に、学校がボランティア活動についての情報や機会を提供することについて尋ねた結果が、表5-5である。経験者、未経験者すべてに尋ねたものであるが、全体では65.9%の生徒たちが学校による情報や機会の提供を希望しており、生徒たちの希望度はかなり高いことがわかる。

表5-4 未経験者のボランティア活動への参加の希望 × 性

(%)

	男子	女子	全体
ぜひやりたい	5.8	9.9	7.6
できたらやりたい	38.6	59.7	47.6
あまりやりたくない	36.3	24.5	31.2
やりたくない	19.3	5.9	13.6
	} 44.4	} 69.6	} 55.2

(カイ二乗検定5%水準で有意)

表5-5 学校に情報や機会をもっと提供してほしい × 性

(%)

	男子	女子	全体
そう思う	56.5	76.6	65.9
そう思わない	43.5	23.4	34.1

(カイ二乗検定5%水準で有意)

また、ボランティア活動を学校の課題や行事に取り入れるべきかという問いについてまとめたものが表5 - 6である。これも経験者、未経験者すべてに尋ねたものであるが、結果は「取り入れるべきだ」が44.8%、「取り入れるべきではない」が13.7%であった。「どちらともいえない」という回答をどう判断するかという問題は残るが、かなり多くの生徒が、学校での課題や行事という形のボランティア活動を肯定していることがわかる。

2) 学校を通してのボランティア活動をどう考えるか

さて第1に、ボランティア活動の経験のある者について、参加のきっかけと経験した後の感じ方をクロス集計を用いてもう少し詳しくみてみたのが、図5 - 2と図5 - 3である。

図5 - 2は、「自分で個人的に参加した」者、「学校を通して希望してやった」者、「学校を通して課題や行事でやった」者について、それぞれボランティア活動を体験した後の感想について、「とてもそう思う」という強い肯定の比率を比較したものである。当然予測されることではあるが、それぞれの感想の項目で「自分で個人的に参加した」者の数値が

一番高く、次いで「学校を通して希望してやった」者が続いている。ボランティア活動の基本的な性格の1つである「自主性」の強い者ほど、より多くの充実感や満足感を得ていることがわかる。

また、上記と同様の3者について、それぞれ経験した後の感想について、「とてもそう思う」に「少しそう思う」を加えて示したのが、図5 - 3である。上記と同様、「自分で個人的に参加した」者の充足感が一番高く、次に「学校を通して希望してやった」者が続いているのは変わらないが、「学校を通して課題や行事でやった」者についても、かなり高い充足感、満足感がみられる。すなわち、どの項目についても6～8割のかなり高い比率で肯定的な回答がなされているのである。

学校の課題や行事という形でボランティア活動に参加するというのは、見方によってはボランティア活動を「やらされた」のであり、その感想も否定的なものが多いことも十分予想される。しかし、実際にボランティア活動を体験してみた結果、これらの者もかなり肯定的な感想をもっている。決して「学校でやらされてもうイヤだ」ということではないのである。

表5 - 6 学校行事や課題としてボランティアを取り入れるべき × 性
(%)

	男子	女子	全体
取り入れるべきだ	39.4	51.2	44.8
取り入れるべきではない	18.9	7.8	13.7
どちらともいえない	41.7	41.0	41.5

(カイ二乗検定5%水準で有意)

図5 - 2 ボランティア活動を経験してどう感じたか
 × 自分で個人的に・学校を通して希望・学校の課題や行事

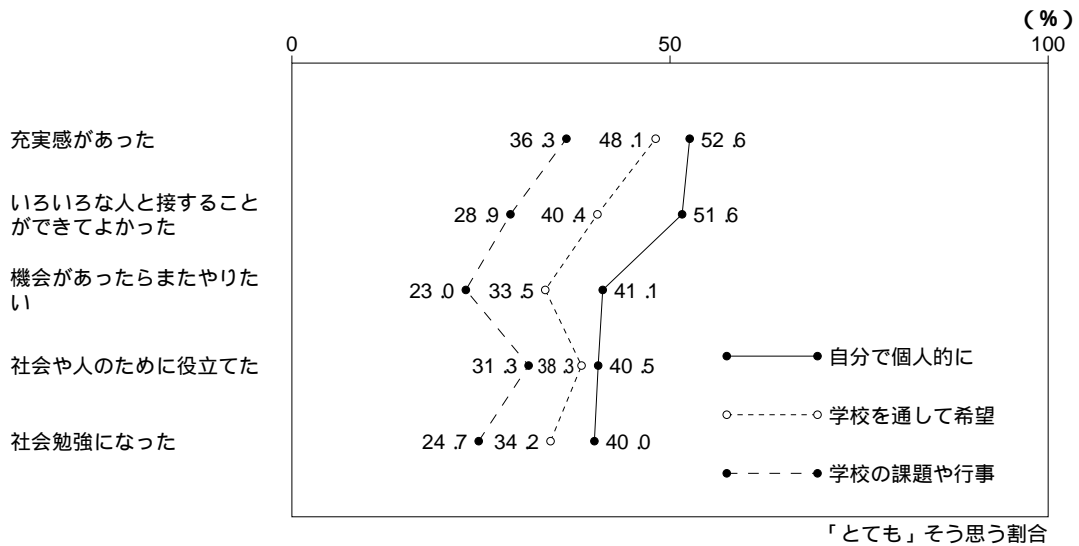
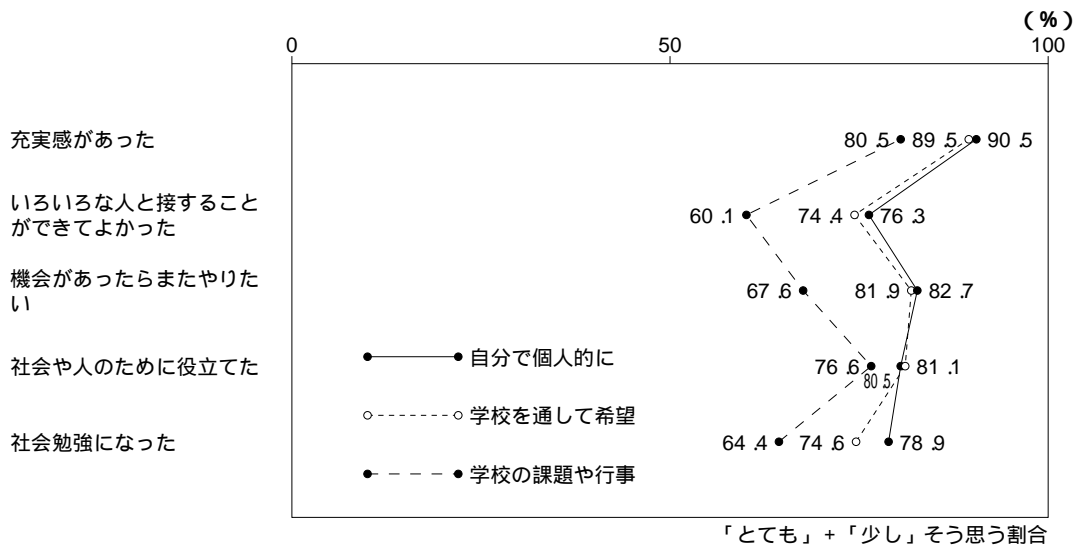


図5 - 3 ボランティア活動を経験してどう感じたか
 × 自分で個人的に・学校を通して希望・学校の課題や行事



次に第2に、学校を通してのボランティア活動の経験とボランティア活動に対する考え方との関連を学校間で比較してみたのが、表5 - 7である。

表5 - 7は、今回調査した6つの学校別に、学校を通して課題や行事でボランティア活動をやったことのある生徒の比率と、ボランティア活動に対する積極性（情報や機会を増やしてほしい・学校での課題や行事に取り入れるべき）との関連を示したものである。表をみてわかるように、D・Eの2校では、学校での課題や行事としてのボランティア活動の経験者が比較的多く、半数前後の生徒がこれを経験している。そしてこれら2校は、ボランティア活動への積極的な姿勢を示す回答に

おいても、6校の中で上位1・2位を占めていることがわかる。

以上の結果から、学校を通して課題や行事でボランティア活動を行ったことのある生徒の多い学校ほど、ボランティア活動の情報や機会の提供、あるいは学校での課題や行事としてのボランティア活動に、より積極的な考え方をもっていることがわかる。今回の調査では、学校を通してのボランティア活動の経験が、中学でのものか高校でのものかまではわからない。しかし、一般的に学校でボランティア活動を取り入れているところでは、生徒たちの意識も、ボランティア活動に対して肯定的、積極的な傾向があるといえそうである。

表5 - 7 ボランティア活動に関する経験や考え方 × 学校

(%)

	A校	B校	C校	D校	E校	F校
学校を通して課題や行事でボランティア活動をやった者	24.4	<u>39.7</u>	29.5	<u>45.9</u>	<u>54.0</u>	35.8
ボランティア活動の情報や機会を提供してほしい	57.5	<u>62.4</u>	59.0	<u>71.2</u>	<u>71.9</u>	60.0
学校で課題や行事にボランティア活動を取り入れるべきだ	30.1	<u>39.6</u>	36.7	<u>55.9</u>	<u>49.0</u>	38.8

3) 学校でボランティア活動をどう取り入れていったらよいのか

ボランティア活動の本来的な性格の1つに、「自主的」ということがある。したがって学校でのボランティア活動の取り組みは、情報や参加の機会を生徒たちに提供し、できるだけ生徒たちの自主性を尊重した形が望ましいといえよう。

しかし筆者は、学校はもっと積極的にボランティア活動を取り入れていってもよいのではないかと考える。今回の調査で、学校での課題や行事でボランティア活動に参加した生徒たちも、かなり肯定的な感想をもっていることがわかった。もちろん、その課題や行事が単に強制的なものであってはならないと思うが、いろいろな配慮がなされれば、今の若者たちにさまざまなものをもたらすきっかけとなるのではないだろうか。

今回、高校生の「社会とのスタンス」を調査していく中で、高校生は必ずしも国家や社会に無関心とはいえないという分析や、環境問題をはじめとする身近な具体的問題には関心があるという分析がなされた。

ひるがえって考えるに、われわれをとりまくさまざまな形の環境問題、急激に進行する高齢化社会の問題、さらに地域社会をはじめとして人々の連帯感を見直そうとする動きなどが、現在の日本のかかえる大きな問題として指摘されている。ボランティア活動の性格や内容を考えると、その活動に参加すること

を通して、高校生がこのような身近な社会問題に対して関心をもつ1つの機会になりうると考えられる。

また、今日のように情報過多ともいえる社会の中で、ボランティア活動のようなどちらかということ地味な情報や機会は、センセーショナルに報道される大きな災害などを除くと、案外高校生たちに届く機会が少ないともいえる。

この章のはじめに指摘したように、高校生のボランティア活動の典型像は、「学校を通して課題や行事で」という形で、1～3日の期間、学校近辺の「掃除」や「ゴミ拾い」などの活動ということであった。しかし、たとえば活動の内容も、掃除やゴミ拾いなどにかたよることなく、お年寄りや障害をもつ人を助けることやその地域地域に即した活動など、さまざまな形が考えられよう。また活動の継続性についても、学校がさまざまな機会を通じて情報や場を提供することにより、生徒たちがもっと参加しやすい状況も生み出せると考えられる。

ボランティア活動の基本的な性格である「自主性」を尊重しつつ、「肩肘を張らない多様なボランティア活動」の情報や機会が学校によって今以上に広範に提供されれば、高校生が、環境問題や高齢化社会をはじめとする身近な具体的問題に興味や関心をもったり、さらに広い社会に対して問題意識をもつきっかけとなりうるのではないだろうか。

4 高校生のボランティア活動観

それでは次に、高校生がボランティア活動をどのように思っているのかという、ボランティア活動観について調べてみることにしたい。

まずボランティア活動の定義として、自主的に行うという自発性、謝礼を求めないという無償性、そして公共性があげられると思う。これについては、公共性を利他性（奉仕性）とする定義もあるが、利他性（奉仕性）というと「自分のためにすること」と「社会（他者）のためにすること」を対立的に考えてしまう傾向が強いので、ここでは公共性という言葉を用いることにしたい²⁾。

この定義に関して高校生の考え方をみると、表5 - 8に示されるように、「ボランティア活動はあくまで個人で自主的にすべきだ」と自発性を支持する者は、「とてもそう思う」と「少しそう思う」をたして71.2%、「ボランティア活動に謝礼が出るのはおかしい」と無償性を支持する者も、72.2%になっていた。このようにボランティア活動の自発性、無償性という特徴は、高校生にも幅広く受け入れられているようであった。またこれを性別にみると、自発性を支持する者は男子に多く（男子71.9% > 女子70.3% $\alpha < 0.05$ ）、無償性を支持する者は女子に多くなっていた（男子68.4% < 女子76.6% $\alpha < 0.05$ ）。

次にボランティア活動観として、日本ではボランティア活動はキリスト教の伝統がないためになかなか定着しないという見方がある（ただしこれは、日本の村落に存在し共済的な役割を果たした頼母子講などをどのように評価するかにもよる）。この点について高校生の意見を聞くと、「ボランティア活動をするのは照れくさい」が50.7%であった。また日本人は勉強や仕事が忙しすぎるためボラ

ンティア活動をする余裕がないともいわれるが、「自分の生活に忙しく、ボランティア活動に参加する余裕がない」が73.2%いた。さらに「ボランティア活動は、まだ日本では定着していない」も87.6%いた。なおこれらを性別にみると、「照れくさい」は男子に多く（男子55.4% > 女子45.4% $\alpha > 0.05$ ）、「定着していない」は女子に多かった（男子84.2% < 女子91.3% $\alpha < 0.05$ ）。

このように高校生にもかなりのボランティア活動の体験者がいるにもかかわらず、ボランティア活動観としては活動の定着を積極的に認める考え方は少ないようであった。

次に高校生に、新しいボランティア活動観が芽生えているのかどうかをみてみよう。まずボランティア活動に、奉仕だけでなく自己形成などを求める「ボランティア活動は自分自身のためにするものだ」と考える者は58.4%いた。ところで社会学者のD・ヤンケロビッチ³⁾は現在の意識変化として、国や社会など自分の外に自己犠牲的にコミットしていくことに価値をおく自己犠牲的価値観から、自分の要求の充足に価値をおく自己充足的価値観への変化を示している。そしてこのような変化が、ボランティア活動においても利他や奉仕だけでなく「自分自身のために」という自己形成、自己充足につながるボランティア活動観の支持へつながっていったのではないかと思う。

またNPO（Non-Profit Organization 非営利団体）の活動などが注目される今日、市民としての自立にも通じる「ボランティア活動は社会の一員としての義務である」と考える者が57.6%いた。またこれらを性別にみると、「自分自身のためにするもの」（男子52.0% < 女子65.9% $\alpha < 0.05$ ）、「社会の一員としての義務」（男子49.6% < 女子

66.6% ($\alpha < 0.05$) とともに女子に多かった。

このように、高校生の間で従来通りのボランティア活動観も根強いが、新しいボランティア活動観も芽生えているようであった。

ところで日本のボランティア活動は教育現場にも積極的に取り入れられてきているが、そのような傾向が、成績評価の多様化につながり、その後の活動などに好ましい影響を与えるのか、あるいは活動の「自発性」をそこなうものなのかについて議論がおきている。これは高校よりも、高校入試を控えた中学校で問題になっているようだが、たとえば高校においてもさまざまなボランティア活動が高校生にどのような影響を与えているかは興味深いところであろう。したがって次に、ボランティア活動のきっかけ(調査票24-1)と活動観の関係を調べてみることにした。

まず定義の「ボランティア活動はあくまで個人で自発的にするべきだ」(自発性)、「ボランティア活動に謝礼が出るのはおかしい」(無償性)については、「学校を通して希望してやった」者に「ボランティア活動に謝礼が出るのはおかしい」(経験ある78.1% > 経験ない170.3% $\alpha < 0.05$)が増えているのみ

で、活動経験があまりボランティア活動観の変化に影響を与えていなかった。これは先にみたように、このような活動観は7割以上の高校生に支持され、もう常識に近づいているためではないかと思う。

次に「ボランティア活動をするのは照れくさい」「自分の生活に忙しく、ボランティア活動に参加する余裕がない」「ボランティア活動は、まだ日本では定着していない」をみると、「学校を通して希望してやった」者に「照れくさい」(経験ある68.6% < 経験ない75.0% $\alpha < 0.05$)、「忙しい」(経験ある45.7% < 経験ない52.2% $\alpha < 0.05$)が減少していた。このように学校を通して自発的に活動をやれば、それなりに意識変化はみられるようであった。

最後に新しいボランティア活動観についてみてみよう。「ボランティア活動は自分自身のためにするものだ」と考えるのは「自分で個人的に参加した」者(経験ある67.6% > 経験ない157.9% $\alpha < 0.05$)、「学校を通して希望してやった」者(経験ある64.0% > 経験ない157.0% $\alpha < 0.05$)である。また、「ボランティア活動は社会の一員としての義

表5-8 ボランティア活動観

(%)

	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
ボランティア活動はあくまで個人で自主的にするべきだ	33.1	38.1	25.2	3.6
ボランティア活動に謝礼が出るのはおかしい	32.4	39.8	22.0	5.8
ボランティア活動をするのは照れくさい	9.5	41.2	36.8	12.5
自分の生活に忙しく、ボランティア活動に参加する余裕がない	31.9	41.3	21.4	5.4
ボランティア活動は、まだ日本では定着していない	42.6	45.0	11.2	1.3
ボランティア活動は自分自身のためにするものだ	20.6	37.8	32.9	8.7
ボランティア活動は社会の一員としての義務である	16.2	41.4	32.4	10.1

務である」と考えるのは、「自分で個人的に参加した」者（経験ある68.6% > 経験ない56.8% $\alpha < 0.05$ ）、「学校を通して希望してやった」者（経験ある66.3% > 経験ない55.0% $\alpha < 0.05$ ）、「学校を通して課題や

行事でやった」者（経験ある62.2% > 経験ない54.2% $\alpha < 0.05$ ）である。このように、さまざまなきっかけで、ボランティア活動に参加した者に、新しいボランティア活動観への支持がみられた。

5 ボランティア活動の将来

最後に高校生はボランティア活動の将来について、どのように考えているのかをみてみよう。

「高校生も、もっとボランティア活動をするべきだ」と考えている者は、75.4%で、男子よりも女子に多かった（男子66.6% < 女子85.2% $\alpha < 0.05$ ）。

また「これから、ボランティア活動は増えていく」と考えている者も63.2%に達しており、これも男子よりも女子に多かった（男子58.8% < 女子68.0% $\alpha < 0.05$ ）。

このようにボランティア活動の将来については肯定的、積極的な意見が多く、またそれは女子に顕著にみられた。

また活動の動機とボランティア活動の将来についての考え方との関係を見ると、表5-9に示されるように、「自分で個人的に参加した」者、「学校を通して希望してやった」者、「学校を通して課題や行事でやった」者が、非参加の生徒に比べ、「高校生も、もっとボランティア活動をするべきだ」「これからボランティア活動は増えていく」と考えていた。このようにさまざまな形態でボランティア活動に参加した者が、ボランティア活動の将来に対して積極的にみる傾向があるようであった。

以上のように高校生のボランティア活動観、ボランティア活動の将来に関する考え方

をみたが、その中でさまざまな形態でボランティア活動に参加した者に、新しい活動観や活動の将来に対する積極的な見方がみられた。この結果からみると、ボランティア活動への参加にはもちろん「自発性」が重要だが、学校が窓口となることも、生徒の意識変化に対して積極的な意味があるようであった。

また高校生の親の世代くらいまでは社会に対して何かを働きかけるといって、政治、戦争、貧困などが主なテーマで、それらに対して署名、デモなどの手段をもちいるというのが、一般的なスタイルではなかったかと思う。しかし現在は、工業社会の「資本と労働」の対立から脱工業化が進展し、「社会問題」も教育、消費、福祉、環境など非常に多様化してきている。そうした中でボランティア活動も新しい社会運動の1つとして、今後ともいろいろな問題を含みつつも、育んでいく必要があるのではないかと思う。

（注）

1) たとえば次の文献を参照のこと。西尾勝也著『自治とボランティア』地方自治協会、1977年。

2) なおその他に先駆性を加える場合もあるが、ある社会において何が先駆的な活動であるかは議論があるところなので、ここでは加えないことにした。

3) D.ヤンケロピッチ『ニュー・ルール』三笠書房

表5 - 9 ボランティア活動経験と将来観

(%)

	全体	個人的に参加		学校を通して希望		学校の課題、行事		団体、グループを通して	
		ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない
高校生も、もっとボランティア活動をするべきだ	75.4	85.5	> 73.8	87.7	> 70.3	81.5	> 68.8	81.4	73.7
これから、ボランティア活動は増えていく	63.2	76.5	> 63.8	72.8	> 62.7	69.6	> 61.0	68.3	64.6

(不等号がついているものは、すべて $\alpha < 0.05$)

6 章 |||||

友人関係

この章では、高校生の友人にかかわる意識を取り上げる。すでに、国際感覚、政治意識、環境問題、ボランティア活動などの領域で高校生の社会意識を分析してきた。これらの領域は生徒にとっては、どちらかという広い、マクロな社会とのかかわりが主である。

そこでここでは、(家族を除けば)高校生が所属する最も身近な社会であるクラス、さらにその中での友人関係を探っていく。高校生の友人へのやさしさ・思いやりなどは、クラス内にとどまらず、社会にまで輪を広げていくものなのか。それとも小さな友人関係の中に閉じこもっているものなのか。このような視点をもって、データにアプローチしてみたい。

現代高校生の友人関係の諸相・特性については、すでに多くの知見がある。その“軽さ”“希薄さ”などがしばしば指摘される。そこに必ず登場するのが“やさしさ”である。“やさしさ”は、現代の若者の人間関係を語るのに必須のアイテムのようにみえる。ただ、若者の“やさしさ”は、年長の世代がイメー

ジする、あたたかい思いやり・ふれあいを伴うそれとは少し異なるようである。

これについては筆者(畠山)も、本モノグラフVol.49「高校生の競争観と共生観」で少し言及している。

「現代の若者の『やさしさ』は、相手の感情や行動に影響を与えない(傷つけない)相手の心に踏みこまず、距離を置く『やさしさ』である」(注)

すなわち、現代の若者の“やさしさ”には、人と深くふれあわない態度という側面がある。相手の心に影響を与える可能性があれば(相手を傷つけそうなときはもちろん、思いやりであっても 思いやりはよけいな世話になるかもしれないので) 距離を置く。このような傾向が多く、研究者・調査者・カウンセラーなどによって指摘されている。

前述のように本稿では、高校生のやさしさ・思いやりが、どれほどの広がりを見せるかを検討していく。その際、若者がもつと思われる“やさしさ”の特性は、意識しておかねばならないであろう。

1 親しい友人との関係

表6-1は、「クラス内の親しい友人」の人数を尋ねた結果である。全体では、「2～3人」「5～6人」が6割近くを占める。男女別では、「1人もいない」「10人以上」で男子の数値が女子よりかなり高い。学年別では、学年が進むにしたがい「1人もいない」「10人以上」が減少し、2～6人の範囲が増加する傾向がみられる。

表6-1には男女別の各学年の数値もあげた。表から明らかのように、男女別の学年差においても、しだいに「2～3人」「5～6

人」に数値が集中してくる傾向は基本的に変わらない。

表6-1で少し注目したいのは、「10人以上」の数値である。全体では20.5%で、ほぼ5人に1人が選択していることになる。本モノグラフでは何度か友人の数を尋ねているが、「10人以上」という選択肢を設けたのは今回がはじめてである。Vol.48『高校生白書』で仲のよい友だちの数を質問したところ、「5人以上」が8割近くを占めていた。そこで本調査では、「7～8人」「10人以上」と

表6-1 クラス内の親しい友人 × 性・学年

(%)

		1人も いない	1人 いる	2～3人 いる	5～6人 いる	7～8人 いる	10人以上	有意差
全 体		3.9	2.2	21.5	35.6	16.4	20.5	
男 子		5.7	1.5	17.0	34.1	16.0	25.6	なし
女 子		1.8	3.1	26.5	37.1	16.8	14.7	
1 年		4.8	2.1	20.0	33.0	17.4	22.6	なし
2 年		3.2	1.4	22.2	38.1	15.2	19.9	
3 年		1.3	6.5	26.6	39.0	15.6	11.0	
男子	1年	6.9	1.3	15.1	30.9	18.1	27.7	なし
	2年	4.3	0.9	18.2	38.3	14.4	23.9	
	3年	3.9	7.8	27.5	35.3	7.8	17.6	
女子	1年	2.3	3.1	26.2	35.6	16.5	16.3	<0.05
	2年	1.8	2.1	27.1	37.9	16.1	15.0	
	3年	0.0	5.8	26.2	40.8	19.4	7.8	

いう選択肢を置いた。予想通り、かなりの生徒がこれらを選んだ。

おとなの感覚では、ただの友人ならともかく、「親しい」とつくのは、おおむね5～6人の範囲におさまるであろう。しかし表6-1でみる限りでは、おとなの感覚は今回の調査対象となった高校生たちには通用しないようである。

現代の若者の“やさしさ”は、相手の心に踏みこまず、距離を置くものであるらしいことはすでに述べた。とすると、今回の高校生たちの友情も、心の内面深くには入りこまず、表面的な部分でふれあうことで成り立っているのではないだろうか。それなら10人以上の「親しい友人」をつくることもそう難しくない。

2 友人とのつきあい方

そこで次に、今回のサンプルの高校生たちの友人に対するあたたかい気持ち（やさしさ・思いやり）の有り様を、質問から探ってみよう。

今回は1つの場面設定を行った。「最も親しい友人が交通事故でけがをし、校内では松葉づえがないと歩けない」（詳しくは巻末の調査票見本を参照）として、「あなたならどうするか」「けがをしたのが特に親しくないクラスメートなら」「自分がけがをしたら」と尋ねてみた。

まず、全体の結果を表6-2で検討しよう。「最も親しい友人」の場合、「いつもカバンを持ってあげる」が56.8%と半数以上を占める。「ときどき」も30.7%おり、親しい友人に対しかなりあたたかい気持ちを示しているようにみえる。「特に親しくないクラスメート」では、さすがに「いつも」は10%弱となるが、「ときどき」であれば30.4%は「持ってあげる」という。あくまで全体的なイメージであるが、今回の高校生たちは友人に対

あるレポートによると、生徒によっては「親友」の数として、100人以上と答える者もいる。あるいは、ポケットベルで短いメッセージを伝えあうだけの、顔も知らない相手を「親友」と認知する高校生もいる。これらのケースも表面的なふれあいによる友情と考えれば、ある程度納得がいく。

表6-1の「10人以上」の数値の高さには、このような背景があるのかもしれない。もちろんこの結果だけで、現代の高校生の友だちづきあいはすべて表面的なものであると断ずることは到底できないが、そういった側面は、一応認識しておくべきだろう。その上で、高校生たちのやさしさ・思いやりがどの程度の広がりをもつのかをみていきたい。

し、かなりあたたかい気持ちを示しているようだ。

その一方で、友人に甘えようという気持ちは相対的に低い。「自分がけがをした」場合、「いつもカバンを持ってもらいたい」は20.9%にとどまる。そしてほぼ4人に1人（24.3%）は「特に何もしてくれなくてもいい」と答えている。この結果は、「そこまでしてくれなくとも」という遠慮のあらわれなのだろうか。あるいは、「放っておいてほしい」という、他者の干渉をきらう態度の表明なのであろうか。もとよりこの表だけでは判断できない。しかしこれらの数値の差から、少なくとも次のことは読み取れる。すなわち、生徒たちは何らかの見返りを期待して、あるいは自分が同じ立場に立ったときのギブアンドテイクの発想から、友人のカバンを持つようとしているのではないということである。今回の調査でみる限り、高校生たちは友人に対して、そう冷めた、距離を置いた接触をしているわけではなさそうである。

さらに考察を深めるため、性別・学年別（表6-3）性別と学年別のクロス（表6-4）のデータをみてみよう。

「親しい友人」では、女子は男子の倍近い割合で「いつもカバンを持ってあげる」と答えている。女子は男子に比べ、親しい友人にはより密な親しさを示している。逆に男子はさっぱりしており、「特に何もしない（してくれなくていい）」の数値はどれも女子を大きく上回る。

学年別では「親しい友人」の場合、ほとんど差はみられない。「特に親しくないクラスメート」「自分がけがをしたら」では、一応学年が上がるとともに多少クールになっていく傾向がみられる。

性別と学年別のクロスでは、「最も親しい友人」で男子が比較的安定した数値をみせるのに対し、女子は学年が上がるとともに80.3% 75.5% 68.9%と明らかな減少傾向を示す。また、「特に親しくないクラスメ

ート」でも同様の傾向が女子にはみられる。「自分がけが」の場合は、男女とも3年で「持ってもらいたい」の数値が大きく減少し、その分「何もしてくれなくていい」の数値が増加する。

以上、女子は男子に比べ、親しい友人に対してはより強い思いやりを示す（もっとも、特に親しくない友人の場合は男子以上に冷淡でもあるが）。また、男女とも学年が上がると、多少クールな者が増える。これらのことがデータより明らかになった。

そしてくり返しになるが、全体として生徒は友人（特に「親しい友人」）に対し、打算抜きであたたかい思いやりの気持ちをもっているとの印象が強い。調査実施前は、互いにかかわりあおうとしない乾いた態度がみられるのでは、と予測していたが、今回調査対象となった生徒たちは、予想以上にあたたかい気持ちを示してくれたように思う。

表6-2 友人が交通事故で1か月のけが、学校では松葉づえ、あなたは？

(%)

	いつもカバンなどを持ってあげる(もらいたい)	ときどきカバンなどを持ってあげる(もらいたい)	たまにカバンなどを持ってあげる(もらいたい)	特に何もしない(してくれなくていい)
1. 最も親しい友人なら	56.8	30.7	7.3	5.2
2. 特に親しくはないクラスメート	9.9	30.4	35.8	23.9
3. 自分が同じようなけがをしたら	20.9	32.9	21.9	24.3

3の選択肢は()内

表6-3 友人のけが × 性・学年

(%)

		いつもカバンなどを持ってあげる(もらいたい)	特に何もしない(してくれなくてもいい)
1. 最も親しい友人	男子	39.2	9.0
	女子	77.1	0.9
2. 特に親しくないクラスメート	男子	10.9	32.8
	女子	8.7	13.4
3. 自分が同じけがをしたら	男子	19.5	32.4
	女子	22.6	15.0
1. 最も親しい友人	1年	57.4	5.5
	2年	56.0	4.9
	3年	57.8	4.5
2. 特に親しくないクラスメート	1年	11.8	23.1
	2年	8.2	23.1
	3年	5.8	29.9
3. 自分が同じけがをしたら	1年	22.7	24.7
	2年	21.0	21.7
	3年	11.0	32.5

3の選択肢は()内

表6 - 4 友人のけが × 学年・性

(%)

			いつもカバンなどを持ってあげる(もらいたい)	特に何もしない(してくれなくてもいい)
1. 最も親しい友人	男子	1 年	38.8 ^	9.2
		2 年	40.3 v	8.6
		3 年	35.3	9.8
	女子	1 年	80.3 v	1.0
		2 年	75.5 v	0.4
		3 年	68.9	1.9
2. 特に親しくないクラスメート	男子	1 年	11.5	34.8 v
		2 年	10.0	29.1 ^
		3 年	11.8	39.2
	女子	1 年	12.1 v	8.8 ^
		2 年	6.0 v	15.6 ^
		3 年	2.9	25.2
3. 自分が同じけがをしたら	男子	1 年	20.5 v	34.2 v
		2 年	19.3 v	28.4 ^
		3 年	11.8	43.1
	女子	1 年	25.3 v	13.2
		2 年	23.2 v	13.2 ^
		3 年	10.7	27.2

3の選択肢は()内
(すべて5%で有意差あり)

3 友人やクラスに対してできること

ここまでのデータから、生徒たちは親しい友人に対してはかなりのやさしさ・思いやりをもつことがみえてきた。

そこで次に、思いやりに限らず友人に対するさまざまな働きかけ、さらに進んでクラスという集団（社会）の中での行動について尋ねてみた。その結果の分析から、生徒のさまざまな気持ち・意識が、親しい友人に対するものから、どのような広がりをもつのか考察したい。

表6-5にあげた7つの質問は、3つにグループングできる。1～3は友人と1対1での状況、4、5は1対1ではあるが多少特殊な要素がからむ可能性があるいじめについての状況である。そして6、7は、クラスという集団とかかわる状況となっている。

全体の数値を表6-5に示した。1～3の項目は一応、相手の心に与える影響がより低いと思われるものから並べてある。「1.自分の誤りを素直にあやまる」は、「きっと・たぶんできる」を合わせて87.4%に上る。

「2.意見が違うとき、自分の意見を主張する」「3.根拠をあげて、友だちの間違いを指摘する」は、下手をすると友人との関係を損なうことも考えられる内容である。やはり1に比べ「できる」数値は低くなる。しかしそれでも「きっと・たぶんできる」は、2で79.7%、3でも64.7%とかなり高くなっている。調査前、他人とは距離を置き、トラブルになりそうな行為はあえて避け、居心地のよさを保とうとする現代の若者の傾向から、2と3についてはかなり低い数値を予測していた。しかし実際には今回の生徒たちは、「言うべきことは言う」という健全な態度を示しているように思える。

4、5のいじめにかかわる状況は、単純に1対1の関係では割り切れない。「4.友だちのいじめをやめさせる」「5.友だちがいじめられているとき、助ける」行為は、それをきっかけにいじめの矛先が自分に向けてくる危険性をはらむ。ある意味では、1～3より深い友人への愛情や思いやりが必要といえ

表6-5 友人に対してできること

	(%)			
	きっとできる	たぶんできる	たぶんできない	まったくできない
1.自分の誤りを友だちに素直にあやまる	35.5	51.9	10.1	2.5
2.友だちと意見が違うとき、自分の意見を主張する	31.9	47.8	18.8	1.6
3.根拠をあげて、友だちの間違いを指摘する	18.3	46.4	30.3	5.0
4.友だちのいじめをやめさせる	16.3	45.7	33.5	4.4
5.友だちがいじめられているとき、助ける	20.5	48.2	27.6	3.7
6.あまり話をしたことがない同級生と協力して仕事をする	23.9	55.2	16.3	4.6
7.クラスの責任ある仕事を進んで引き受ける	10.4	29.7	47.0	12.8

るにもかかわらず、「4．やめさせる」で62.0%、「5．助ける」で68.7%が「きつと・たぶんできる」と答えている。実際にその場面にいきあたったとき本当に行動できるのか、多少の疑問は残る。しかし少なくとも意識の上では、友だちには勇気ある忠告をし、またあたたかい手を差し伸べよう、という真摯な気持ちが伝わってくる結果といえよう。

では集団の中ではどうであろうか。「6．あまり話をしたことがない同級生と協力して仕事をする」ことが「できる」割合は高い。「きつと・たぶん」を合わせて79.1%となる。これはよほど相性の悪い相手でもない限りは、それほど難しいこととも思えないので、当然かもしれない。

注目したいのは、「7．クラスの責任のある仕事を進んで引き受ける」の結果である。「委員長、部長など責任のあるリーダー的なポストにつこうという生徒が少ない(いない)」と、教師たちが嘆くようになって久しい。筆者自身、教職について十数年同じ思い

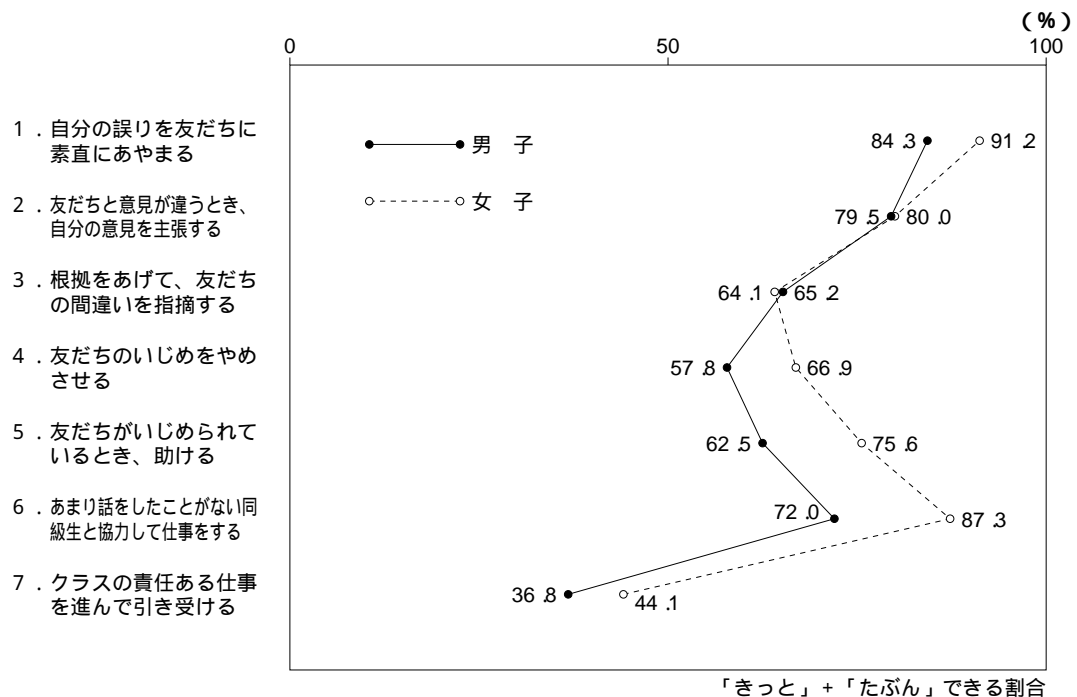
を抱いてきた。したがって、この項目の「できる」の数値は、他の項目に比べ相当低くなるとの見通しを立てていた。

結果は、「きつとできる」の値は10.4%と7項目中最低であるが、「たぶんできる」が29.7%いる。合計すると40.1%と、4割が積極的な姿勢を示している。この数値は、日頃生徒と接触して受ける印象とかなり異なるので、後ほどクロス集計をみる段階でもう少し考察したい。

いずれにしても表6-5の結果は、予想外のものではあった。生徒たちはこちらの予想以上に、友人にあたたかい思いやりをもち、ときには毅然とした態度もとる、積極的な姿勢を示した。集団においてもそれなりに責任ある役割を引き受けようとしている。多くの文献や報告書が示す若者像とは少し異なる姿を今回の生徒たちはみせてくれたといつてよい。

クロス集計の検討に移ろう。図6-1は性別別の結果である。全体として女子の積極的な態度が目立つ。いじめに関する項目では9～

図6-1 友人に対してできること × 性



13%男子を引きはなしている。本モノグラフVol.50「男らしさ・女らしさ」では、データ全体を「元気な女の子、おとなしい男子」というトーンが貫いていたが、図6-1の結果もその延長上にあるのかもしれない。「7. クラスの責任ある仕事を引き受ける」も約7%女子が上回っている。教師はリーダー的な生徒を選ぶとき、つい男子に期待しがちであるが、これからは認識を改め、女子の可能性が開花するような指導を心がけるべきなのではなかろうか。

表6-6は、性別に各学年の結果をまとめたものである。学年の上下で一定の方向性を示す項目は多くない。「2. 自分の意見を主張」の男子、「3. 根拠をあげて間違いを指摘」の女子、「4. いじめをやめさせる」の男子くらいである。

その中で注目されるのは、「7. 責任ある仕事を進んで引き受ける」のデータである。男子は、学年が上がるにしたがい数値が上昇していくが、対照的に女子の数値は学年が上がるほど低くなる。1年と3年では数値がほぼ逆転する。これには教師の指導が深くかわっているように思える。前述したように、多くの教師は責任ある役職や 長を決める際、まず男子を対象に考える。当然指導もその方向でなされ、その結果男子の意識は高まるが、せつかくの女子の意欲をしばませてい

る可能性がある。(筆者も含め)現場の教師は、表6-5・6、図6-1の結果を真剣に受け止めるべきであろう。

以上、今回の調査で友人関係を扱ったデータを分析してきた。当初の課題 友人へのやさしさ・思いやりは、より広い社会へと広がっていくか を十分に明らかにできたとはいえないが、それなりの感触は得られたように思う。少なくとも今回の調査対象となった生徒たちは、われわれの予想以上に、友人に対してより深くあたたかく接し、集団の中での役割に積極的であった。したがって、生徒の思いやり・やさしさ・積極性がより上位の社会に広がる可能性は大きいといってい

たろう。また、「クラスの責任のある仕事…」のデータでは、教師の指導のもつ影響力の大きさがいまみられたと思う。教師はまず、一般にいわれる若者のイメージにとらわれることなく生徒をみつめる必要がある。そして、生徒がもつやさしさ、思いやり、積極性を今まで以上に育てる指導を心がけるべきではないだろうか。

(注)『モノグラフ・高校生 97』Vol.49「高校生の競争観と共生観」1997年。

表6 - 6 友人に対してできること × 学年・性

(%)

		全 体	1 年	2 年	3 年
1. 自分の誤りを友だちに素直にあやまる	男 子	84.3	84.4 >	83.4 <	88.4
	女 子	91.2	91.9 >	90.7 >	89.3
2. 友だちと意見が違うとき、自分の意見を主張する	男 子	79.5	81.1 >	78.2 >	73.1
	女 子	80.0	79.3 <	83.3 >	73.8
3. 根拠をあげて、友だちの間違いを指摘する	男 子	65.2	65.0 <	66.8 >	55.8
	女 子	64.1	67.4 >	61.9 >	57.3
4. 友だちのいじめをやめさせる	男 子	57.8	53.2	62.7	68.7
	女 子	66.9	67.5 >	65.4 <	68.9
5. 友だちがいじめられているとき、助ける	男 子	62.5	61.3 <	65.0 >	57.7
	女 子	75.6	74.7 <	77.2 >	74.8
6. あまり話をしたことがない同級生と協力して仕事をすすめる	男 子	72.0	70.6 <	74.5 >	68.6
	女 子	87.3	88.9 >	84.2 <	89.3
7. クラスの責任ある仕事を進んで引き受ける	男 子	36.8	32.3	40.7	53.0
	女 子	44.1	46.6	45.7	30.1

「きつと」+「たぶん」できる割合
 (不等号のついているものは5%で有意差あり)

7 章 IIIII

社会意識の広がり

現代の高校生の関心は、どこに向かっているのでしょうか。

現代の青少年は、身近なことや今楽しいことを最優先している。つまり「公」より「私」、
「未来」より「現在」を大切に生きているといわれることが多い。

豊かな社会の中であって、自分の気に入ったモノや音楽、仲よしの友だち（グループ）に囲まれ、平穏に心地よく今を楽しむ生活を送っている。外国の政治紛争や貧困・飢餓問題は、テレビで見る遠い世界の出来事であり、自分たちには無関係である。不確定な未来のためにあくせくするより、今を楽しんだ方がよい。

「テレビではわが国の将来の問題を誰かが深刻な顔をしてしゃべっている／だけでも問題は今日の雨／傘がない／行かなくちゃ／君に逢いに行かなくちゃ／君の家に行かなくちゃ／雨にぬれ」と、井上陽水が1970年代の中頃に歌い（『傘がない』）、副田義也が、公より私、未来より現在を大切に生きている若者の出現と指摘して（「青年期の本質と風俗」、

『現代のエスプリ別冊』、至文堂、1977年）以来20年以上が経過しているが、「私」および「現在」優先の志向は近年さらに強まっている。

以上は、われわれの一般的現代青年像、現代高校生像であるが、それらは果たして正しいのでしょうか。今の青少年が「私」「現在」志向で嘆かわしいと憤慨するおとなたちは、果たして「公」「未来」志向であり、「私」「現在」志向ではないといえることができるのでしょうか（日本の政治、経済のリーダーたちのさまざまな個人的利益の追求、不祥事は？）

現代の青少年たちは友だち関係や恋愛を重視する傾向が強い（1997年末、テレビドラマ『ラブジェネレーション』の高視聴率など）海外旅行や留学への関心の高さ、ボランティア活動や環境問題への関心の高まりは、利己主義を越えた利他主義の兆候を若者の中にみることができる。また相変わらず厳しい受験競争の中で、受験勉強に打ち込む高校生は「現在」の欲望の充足を延期して「未来」の地位達成をめざしている。

1 新しい社会意識

青少年の社会意識の広がり、2つの質問から明らかにしようと試みた。1つは、具体的状況の中での選択の質問(Q33)。もう1つは、抽象的質問(Q34)である。

前者は、「あなたは次のようなとき、どのくらいうれしいと感じますか」という質問で、自分、家族、友だち、クラス、学校、地域、日本、世界のそれぞれの具体的状況の中のものしさを質問している。

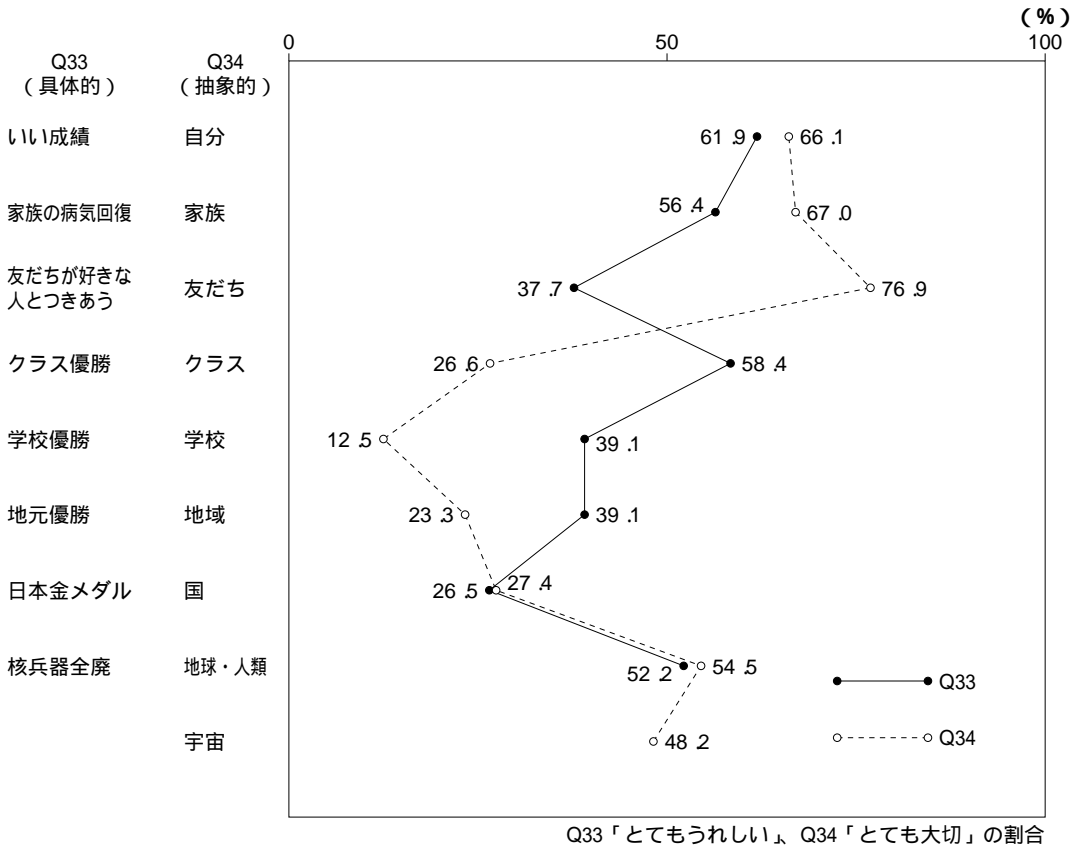
後者は、「次のようなことはあなたにとって、どの程度、大切なものですか」という質問で、自分、家族、友だち、クラス、通っている学校、住んでいる地域、国(日本)、地

球・人類、宇宙について、大切さを質問している。

この2つの質問の回答は、一致することが調査の信頼性からいって好ましいが、当然のことながら、回答は一致しない。前者は状況設定の仕方によって回答が変わってくるし、後者は抽象的言葉に回答者が何をイメージするかによって違ってくるからである。しかし、大体の傾向は一致し、高校生の社会観の広がりの特徴をみることができる。

図7-1は、具体的状況設定選択の質問(Q33)と抽象的質問(Q34)の両方に、社会意識の広がりをみたものである。数字は

図7-1 社会意識の広がり



「とてもうれしい」(Q33)の割合と、「とても大切」(Q34)の割合を示したものである。

具体的状況設定の質問と抽象的質問で回答に差があまりみられないのは、身近な次元(自分、家族)ときわめて広い次元(国、地球)であり、差が大きいのは中間的次元(友だち、クラス、学校、地域)である。身近な次元と広い次元への同一視や感情移入には安定性がある(共に共感度が高い)のに対して、中間的次元は質問内容や置かれた状況の違いによって回答率が違ってくる。中間的次元の友だち、クラス、学校、地域への同一視や感情移入は、その時々によって変わってくるのである。高い場合もあれば低い場合もある。

Q33でもQ34でもともに自分や家族といった身近な世界への同一視が強く、学校や地域、国といった所属していても比較的疎遠な存在に対しては、同一視したり感情移入したりしていないことがわかる。しかし、「核兵器の全廃」「地球・人類」「宇宙」といった全人類的、普遍的次元に対しては高い同一視や愛着がみられる。

これらの回答は、高校生の正直な気持ちを示しているということができる。「自分が大切」「家族思い」「仲のよい友だちを大切にする」ということは、狭い社会意識ということではなく、当たり前な生活感情である。おとなにもこのような意識は同様にある。

問題は、「クラス」「学校」「地域(地元)」といった中間集団に対する同一視である。おとなや教師は生徒にクラスの団結、学校への愛着、郷土愛を強く説いているのであろうが、これは高い場合もあれば、低い場合もある。

自分の「クラス」が「とても大切」と考える生徒は26.6%と決して多くない(ただし「わりと大切」51.8%を合わせると8割近くがクラスに愛着をもっている)。また「通っている学校」が「とても大切」と考える生徒は12.5%とさらに少ない(ただし「わりと大切」41.4%を合わせると5割以上が学校に愛着をもっている)。「住んでいる地域」に対しては、「とても大切」23.3%、「わりと

大切」51.1%とクラスに対する愛着の割合に近い。

ところが、クラス、学校、地域といった抽象的な形ではなく、「クラスが合唱祭などで優勝したとき」「とてもうれしい」58.4%、「わりとうれしい」30.8%、合計9割)「学校の野球部が優勝したとき」「とてもうれしい」39.1%、「わりとうれしい」44.6%、合計8割強)「地元代表の高校野球部が甲子園で優勝したとき」「とてもうれしい」39.1%、「わりとうれしい」40.1%、合計8割)と、学校行事や部活動の試合といった非日常的な場での盛り上がりに対しては、一体感や愛着を示す。ハレの場の盛り上がりや雰囲気と同化しやすく、「思い出づくり」も大切にする。

一方、国に対する意識に関してはどうか。「国(日本)」が「とても大切」27.4%、「わりと大切」43.7%と、合計で7割(71.1%)が抽象的な「国(日本)」に対して愛着、同一視を表明している。また、「オリンピックで日本の選手が金メダルを取ったとき」は「とてもうれしい」26.5%、「わりとうれしい」51.3%、と合計で8割弱の高校生が、オリンピックのときの日本に愛着を表明している。このように、高校生はかなりの愛国心を抱いているが、強い愛着、同一視という点では、他の項目よりかなり低いことに注目しておきたい。ほどほどの国への愛着、愛国心といったものが、現代の高校生の特徴などである。2章でみたように、高校生の中に「多文化共存」型の意識をもつ高校生が生まれつつあり、彼らにとって、国の境界の意識は低くなりつつある。

また、「核兵器の全廃」「地球・人類」「宇宙」といった世界は、おとなにとって遠い世界にみえても、現代の高校生にとって、産業経済やエンターテインメントのグローバル化、メディア接触を通して、身近なリアリティのある存在になっている。愛着、同一視の程度がかなり高いのである(「核兵器の全廃」86.7%、「地球・人類」85.9%、「宇宙」81.6%)。

国境を越え、地球規模の世界(社会や自然)に対して自然に同一視する感性を高校生はもっているといえよう。4章でみたように、地

球規模の環境や自然保護に対する関心もきわめて高い。

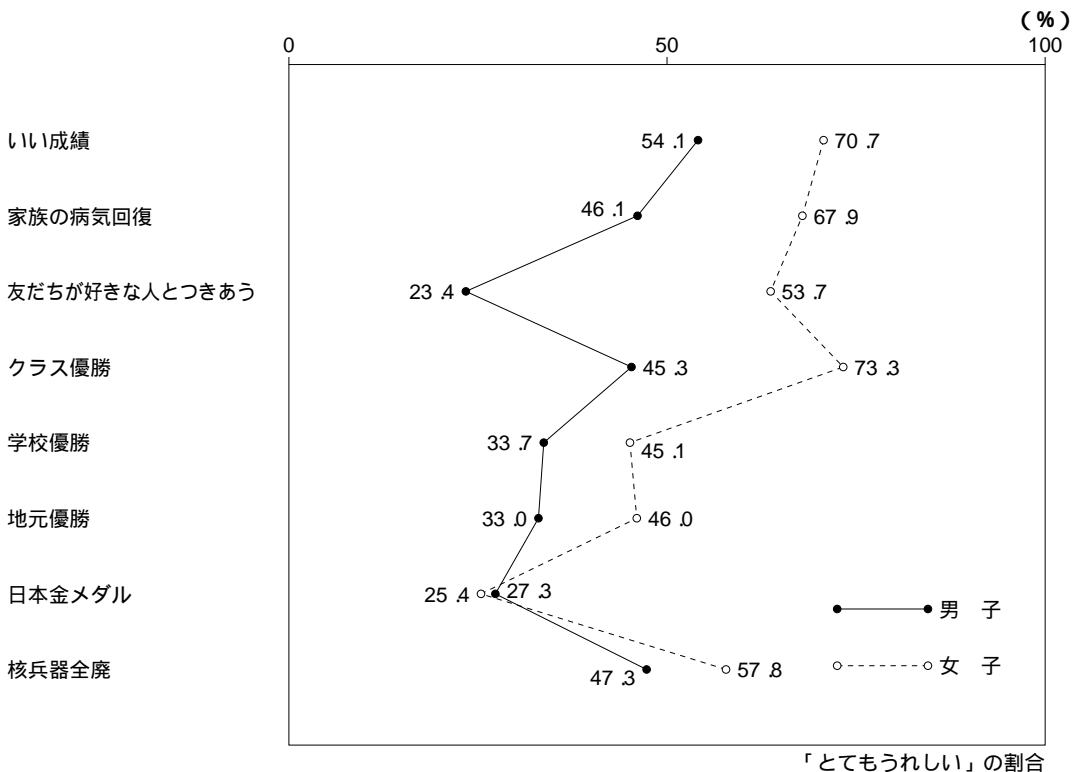
2 社会意識の男女差

図7-2は、Q33の具体的状況設定型質問で、男女別に社会意識(愛着)の広がり之差をみたものである。

「定期試験でいい成績をとったとき」「とてもうれしい」(以下同じ)が女子70.7%、男子54.1%、「家族の人の病気が治ったとき」女子67.9%、男子46.1%、「友だちが好きな

人とつきあえたとき」女子53.7%、男子23.4%、「クラスが合唱祭などで優勝したとき」女子73.3%、男子45.3%、「学校の野球部などが都道府県大会で優勝したとき」女子45.1%、男子33.7%、「地元代表の高校野球部が甲子園で優勝したとき」女子46.0%、男子33.0%、「オリンピックで日本の選手が

図7-2 うれしいとき × 性



金メダルを取ったとき」女子25.4%、男子27.3%、「核兵器が全廃されたとき」女子57.8%、男子47.3%という結果である。

国（「オリンピックで日本の選手が金メダルを取ったとき」）を除いて、すべての項目（次元）で、男子より女子の方が高い同一視（愛着）の回答を示している。

女子の方が、自分、家族、友だち、クラス、学校、地域、世界の具体的状況に感情的にコミットし、外の世界に対しても自分のことのように喜怒哀楽の感情をもつ能力にたけているということができる。

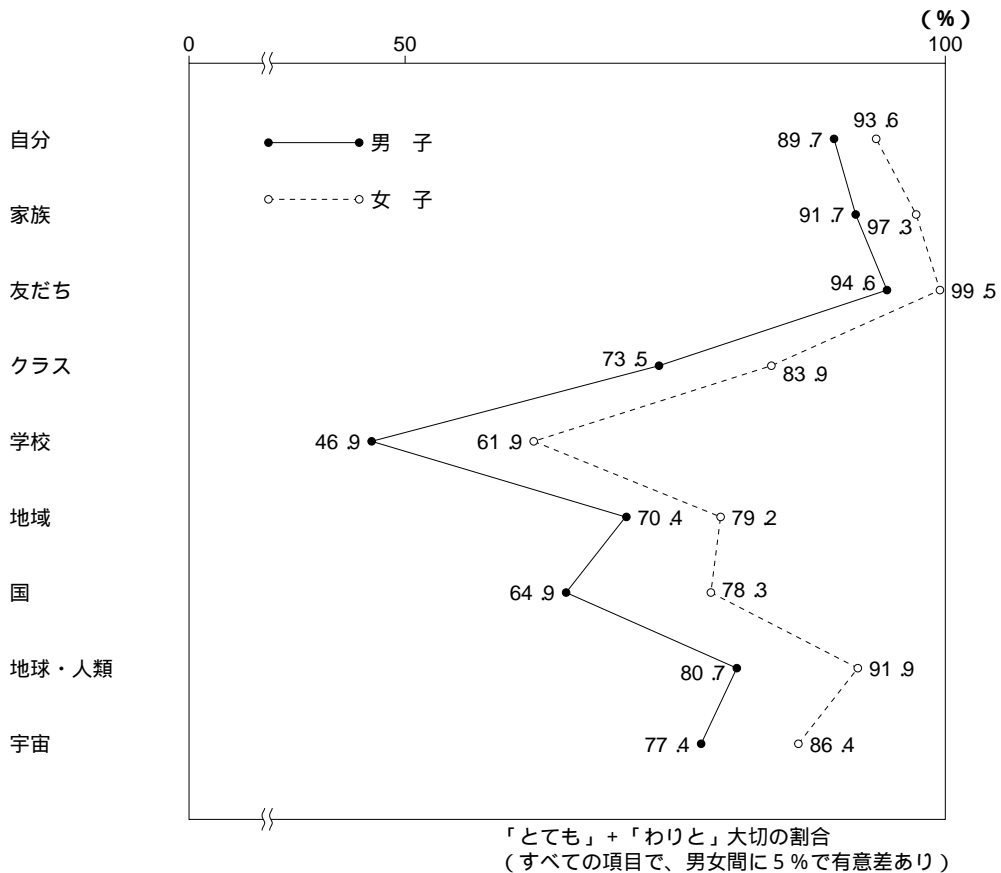
男子も「わりとうれしい」まで加えると、女子との差は縮まるが（たとえば、「クラスが合唱祭などで優勝したとき」の差は、28.0%から14.3%に）それでも男子は自分の属する集団に自分を同一視してわがことの

ように喜ぶことをあまりしない。それは、男子が競争社会の中で生存競争の厳しさを認識し、自分以外の他者を敵とみなしているためなのであろうか。「定期試験でいい成績をとったとき」も「とてもうれしい」男子が女子より少なかったことから考えると、競争心のためだけともいえない。日本には葉隠れの精神が生きていて、感情を表にあらわさないという日本男子の美意識が今の高校生の子供の中にも生きているのであろうか。

図7-3は、Q34の抽象的質問（「次のようなことはあなたにとって、どの程度、大切なものですか」）で、男女別に社会意識（愛着）の広がり（差をみたものである。ここでは、「とても大切」と「わりと大切」の割合を加えた数字を图示してある。

はっきりと、「自分」「家族」「友だち」「ク

図7-3 どの程度大切なもの × 性



ラス」「学校」「地域」「国」「地球・人類」「宇宙」といったすべてのことに対して、男子より女子の方が高い同一視(「大切なもの」)の回答を示している(カイ2乗検定5%水準で男女間の有意差が全項目である。ただし検

定は4段階の回答による)。女子の方が、自分、身近な人、中間集団および普遍的なものを、たとえそれが抽象的イメージであろうと自分と同一視し、愛着を抱く能力や傾向があるということができる。

3 社会意識の学校差・学年差

表7-1は、Q33とQ34のそれぞれの項目の回答に、学校差と学年差があるのかを男女別に(つまり性別を統制して)みたものである。カイ2乗検定で5%水準の有意差のあるものについて、高いカテゴリーを示した(記入のない欄は有意差なし)

まず学校差をみると、「友だち」「クラス」

「学校」といった学校に関する次元への同一視や愛着はA校(学力偏差値上位)およびD校(同)という、ともに学校格差の上位に位置する学校において高くなっている。学力偏差値が高く、第1志望で入った生徒の多い学校において、学校やクラス、友だちへの同一視や一体感が高くなっていることがうかがえ

表7-1 同一視、愛着の学校差・学年差

Q33 Q34	学校差		学年差	
	男子	女子	男子	女子
1 自分	D B		1年	
2 家族				
3 友だち	A	A		
4 クラス	B A D A B	D A D B	2年	
5 学校	E A D A E	D A B C A	3年 2年	2年 2年
6 地域	E F D	F D C		2年
7 国(日本)				
8 地球・人類	A F D A D		3・2年	
宇宙				

(5%で有意差のあるものを表示、記入のあるものは同一視や愛着の高い学校、学年)

る。

住んでいる地域への愛着は、C校(千葉)、E校(富山)、F校(福井)、D校(福岡)という東京以外の地域の学校で高い。地方都市の高校生の場合、住んでいる地域へ愛着をもつことができても、東京の高校生にとって東京は都市としてあまりに大きく同一視する対象になりえないのであろう。

地球・人類(核兵器全廃)といった次元への関心は、A校、D校といった学校格差の上位の高校で高くなっている。

次に学年差をみると、「クラス」や「学校」への愛着が1年生に少なく、2年生、3年生に多くなっている。それだけ、現代の高校ではクラスや学校単位の活動が盛んで、学年が

進むにつれ、その活動の単位であるクラスや学校に愛着がわいてくるのであろう。

学校以外の次元への愛着や同一視では学年差がない。国や世界、人類、宇宙に関する同一視や愛着が、学年によって差がないということは、国や世界、人類について扱う、社会科学をはじめとする授業が、生徒の社会観に影響をほとんど与えていないということの意味する。今の高校の授業は、受験や暗記に振り回され、高校生が社会観や価値観を形成するためにはほとんど機能していないということも考えられる(ただし、学校別にさらにこの点を追求する必要がある。つまり地球、核兵器全廃といった次元への関心が高いA校、D校はそれが何に由来するかなどである)。

4 新しい社会意識と教育

これまでの各章の考察の中に、高校生の新しい社会意識の芽生えはみられたのであろうか。それとも高校生の自己閉塞、享楽主義的傾向、非社会性などがみられたのであろうか。各章で取り上げた側面、つまり、国際感覚(2章)、日本への評価(3章)、環境問題(4章)、ボランティア活動(5章)、友人関係(6章)の中の、自己閉塞と新しい社会意識の芽生えの攻めぎあいの様子をもう一度みておこう。

● 2章(国際感覚)

高校生の約3割が海外に行った経験をもっている。外国人に英語で道を教えることや外国で1人で買い物をするのができるのは5割強、ホームステイできるのは4割強、留学できるのは2割強と、過去のデータと比較して高校生の国際化の意識や能力は高くなっている。旅行で行きたい国は、欧米を中心に非常に多岐にわたっている。

異文化に対する構えは、適応・同化型と多文化共存型が、ほぼ半々に分かれ、異文化を

積極的に受け入れる多文化共存型の生徒は、新聞の政治・経済面を読み、国際社会への志向性が高く、現代の新しい社会問題への関心も高い。

● 3章(日本への評価)

日本についてのイメージとして、生活水準が高い、治安がよい、住み心地がよい、民主化が進んでいると、5割以上が感じている。

現代の社会問題に対しては、オウム裁判問題、北朝鮮への食料支援、住民投票などに5割前後の生徒が関心をもっている。社会的争点になっていることへの意見を聞くと、新しい方向への賛成率がきわめて高い。つまり、老人の在宅介護、臓器移植の推進、安楽死の公認、外国人労働者の受け入れ、飛び級制、夫婦別姓などで、5割以上の生徒が賛成している。さまざまな社会的活動やボランティア活動への参加意欲もきわめて高い(6割以上)。

日本という国を否定的にとらえる者より、日本を肯定的にとらえる者の方が社会的な関

心が高く、社会的活動やボランティア活動への参加意欲も高い。

● 4章（環境問題）

全体に環境問題への関心は高い。ふだんから環境や自然保護を意識している者が5割弱いる。進学校の生徒は環境保護の意識と行動の両面で高い傾向がみられる。

自然を直接体験する割合は低い。首都圏の生徒より、地方の生徒の方が自然を体験する率は高い。自分の住んでいる町の生活環境や住民の環境意識に対して、環境の悪化（空き缶やゴミの始末の悪さ、車の排気ガスの増加、子どもの遊び場の減少）への懸念を強く表明している。男子より女子の方が、また地方より首都圏の生徒の方が危機感を強く感じている。

ゴミを分別して出す、電気をこまめに消す、清涼飲料はジュース、コーラより日本茶、ウーロン茶などを飲む、再生紙を利用する、といったことを5割以上の生徒がしている。男子は環境保護への配慮の足りない行動が目立つ。それに対して女子は環境保護や自然へのやさしい態度をもちあわせている。

経済開発と環境・自然保護を比べた場合、環境・自然保護派5割、経済開発派1割、中間派4割という割合である。環境保護意識の高い高校生ほど、ふだんから自然とのふれあいや自然にやさしい生活のスタイルをとっている。そして地球環境の将来についても、深刻な受けとめ方をしている。

● 5章（ボランティア活動）

ボランティア活動の経験者は半数近くいる（男子4割、女子5割）。ボランティア活動へ参加したきっかけは、個人より学校を通してのもの（約7割）が多い。活動内容は、地域のゴミ拾いや清掃、空き缶や廃品の回収など、自然や環境を守る活動が多い。ボランティア活動の未経験者も、やりたいと5割以上が答えている。学校でボランティア活動の機会を提供してほしいという生徒からの希望も多い（3人に2人）。

ボランティア活動は自分自身のためという

者は6割、社会の一員としての義務という者も6割弱いる。高校生ももっとボランティア活動をすべきだと4人に3人は考えている。

● 6章（友人関係）

クラス内の親しい友人の人数は、10人以上が20.5%いる。心の内面に深く入りこまず表面的な部分でふれあう関係も少なからず存在する。けがをして松葉づえで歩く友人にあたたかい手を差し伸べる高校生は多い。しかし、自分がけがをした場合は放っておいて、ギブアンドテイクの見返りを期待していない。女子は男子に比べて、親しい友人に対してより強い思いやりを示す。生徒たちは友人にあたたかい思いやりの気持ちをもち、時には毅然とした態度をとる（友だちに意見を、いじめを止めるなど）。

集団においてもそれなりに責任のある役割（クラスの仕事）を引き受けようとしている。女子は男子以上に友人やクラスに積極的な態度が目立つ。生徒の思いやり、やさしさ、積極性はより上位の社会に広がる可能性がある。

以上のような各章の考察から、「高校生の国際化の意識や能力は高くなっている」（2章）「社会的争点になっていることへの意見を聞くと、新しい方向への賛成率がきわめて高い」（3章）「全体に環境問題への関心は高い。地球環境の将来についても、深刻な受けとめ方をしている」（4章）「ボランティア活動の経験者は半数近くいる。高校生ももっとボランティア活動をすべきだと4人に3人は考えている」（5章）「生徒たちは、友人にあたたかい思いやりの気持ちを持ち、時には毅然とした態度をとる。集団においてもそれなりに責任のある役割を引き受けようとしている」（6章）「親しい友人、家族、そして地球、人類に対して同一視し、愛着を抱いている。クラス、学校のイベントも大好き」（7章）といったことが明らかになった。

もちろんこのような前向きな側面だけではない。次のような後ろ向きの側面も各章で指摘された。「全体に欧米志向が強く、アジア

やアフリカへの関心は薄い。アジア諸国に対しては、漠然としたイメージやステレオタイプ化したイメージを抱く者が多い」(2章)。「従軍慰安婦問題28%、諫早湾の干拓問題24%、ビッグバン15%と社会の出来事への関心は必ずしも高くない」(3章)。「直接自然を体験する割合は低い。男子は、環境保護への配慮の足りない行動が目立つ。将来の地球環境に対して楽観的な者ほど、環境保全より経済開発を優先する社会意識をもつ」(4章)。「高校生のボランティア活動は、個人より学校を通してのものが多く、日数も1日～3日という短いものが全体の4分の3を占める」(5章)。「親しくないクラスメートに対しては冷淡、学年が上がるとクールな者が増える。友人との関係は、心の内面に深く入りこまず、表面的な部分でふれあう関係も少なからず存在する」(6章)。「男子は女子に比べ、他者や外の世界に対して感情移入し愛着をもつことが少ない」(7章)。しかし、これらは高校生だけの特質とはいえない。われわれおとなも共有している意識や行動である。

渡部真は若者とおとなの関係について、ドフトエスキーの小説やテレビドラマ『王様のレストラン』の分析を通して興味深い指摘をしている。

「(大人は)青年期に十もっていたものを、社会生活を送る中でいくつか失ってしまう。人間の一生のうちで、青少年期が頭もよく、感性もいちばんすぐれている、その後の人生は、社会の中の人間関係に慣れたり、社会向きの顔を作ることに費やされる、その過程で本来もっていたその人の美質が失われてしまう」(渡部真『90年代の青春 - 映像に描かれた青年像』増進会出版社、1997年、115～116ページ)

人間の生活領域を、カイヨワ=井上俊のように、聖、俗、遊に分けるならば、青年たちの方がまだ実生活に取りこまれていないだけ、理想主義的な聖や、気楽で自由な遊の世界に足場を寄せ、利害や損得が優先する俗の世界に取りこまれ墮落しているおとなたち

を、批判できる立場にあるということになる(井上俊『遊びの社会学』世界思想社、1977年)。ただ井上も指摘するように、現代は青年たちの聖や遊がマーケットという俗に取りこまれ墮落しているので、手放して青年の聖や遊を称賛はできない。しかしおとなから失われた理想主義や自由で生き生きしたものを青年の意識や活動の中にみることができる(国際ボランティア活動で命を落とした中田厚仁君の中にそのような理想主義的な聖の側面をみることができ、そういった意識はデータで示されたように、現代の高校生に共有されている。中田武仁、前掲書参照)

今回の調査の分析では、おとなの側から生徒たちの非社会性や不甲斐なさを嘆き非難するというよりも、生徒たちの考えや理論を忠実に追いながら、生徒たちの中にある新しい意識や社会観を抽出するように努めた。これは、先行き不透明な現代に適合した方法である。社会学者の宮台真司も従来の教育学に言及して次のように述べている。

「教育学は、『良き人間であれ』という前提と、『伝達』という概念で方向付けられている。知識や価値をどう伝達するかという問題設定です。その背後には大人は子どもより知識も体験もあり、優位にあるという理解がある。確かに、社会の方向性がはっきりしていた時代には大人が優位だったでしょう。しかし今のような極めて流動的な成熟社会では、むしろ若い人間の方が環境に素早く適応できる」「若い人の方が適応能力があるのですから、むしろ今はシステムからこぼれる大人の方が問題です」(「教育幻想 崩れた前提問われる適応力」朝日新聞、1998年1月20日夕刊)

では、今回の高校生へのアンケートからどのような新しい意識や社会観がみえてきたのであろうか。その中で教育の役割は何であらうか。最後にそれをまとめておこう。

高校生の新しい意識として、次の6点が明らかになった。

1. 国境を越えた異文化、多文化、そして異文化の人々に対する許容性や関心が高く、異文化体験を強く求めている。

2. 今の政府や社会に対しては批判的にみているが、同時に自分たちを豊かに育ててくれた日本という国に対してはそのよさを認め愛着を感じている。

3. 環境問題、自然保護への関心は高く、環境にやさしい行動も実践している。

4. 社会参加、さまざまなボランティア活動への参加意欲が高く、それは弱者への思いやりというだけでなく自己充足的価値のためでもある。自ら進んでとまではいかないが、場が設定されればボランティア活動に参加し、そこで多くのことを得ている。

5. 人との距離はとりつつも友情は厚く、見返りを期待せず、クラスの仕事もチャンスがあれば引き受けようと思っている。

6. お祭りやハレの場が好き。クラス、学校、地域でみんなと力を合わせ盛り上げられる場があれば、集団と一体感を感じることができ、地球や宇宙も身近に感じ大切にしたいと思っている。

ではこのような中で、教育はどのような役割を果たせばよいのであろうか。2つのことを指摘したい。

第1は、今の若者は自分が目立つことは好まない。そのため何かクラスや社会のためにやりたいという気持ちがあっても、自ら名乗り出てまではしない。そこにおとなや教師の出番がある。生徒の活動の場を作り、あとは生徒に任せればよい。青年たちは責任をもたせると本気でやりだす場合がある。学校主体のボランティア活動が成果をあげているのがその証明になる。

第2に、おとなや教師の理論から考えておかしいと思われることも頭から叱責せず、なぜ生徒がそのような行動に出たのかを考えたい。しかし生徒の身勝手な言い分には迎合することなく、話し合いを根気よく続けたい。

おとなも変化する今の社会システムから落ちこぼれないように、時代や若者の価値観や行動に対する感受性を保持したい。

今から60年前（昭和12年）にこのようなおとなの姿勢があったことを偶然発見した。その言葉を記しておきたい。

「近頃の若い人たちは享樂的であるとか、虚無的であるとかいはれてゐます。けれどもあなた方自身はどう思ひになりますか。ただ徒らにそれを抗弁することがその最もよき答えではない。どうか深く省み、あなたの周囲で観察し、正しくありのままを報告し合ってみることが出来たらよいと思ひます。…（中略）…お互いに正直な現状を、経験を、真実を語って、そこから多くのことを学び、励まし、慰め合ひたいと思ひます」（課題 娘の立場から『婦人の友』第31巻第8号 昭和12年8月号）

清濁あわせもつのが人間であり、それは現代のおとなにも高校生にもあてはまる。おとなや教師は高校生の真摯な生き方に学びつつ、また野放図に暴走する青年の感情には冷静な判断を示し、未熟な知識には英知を与え、導きの手を差しのべるのが教育の役割であろう。

終章 IIIII

調査結果から考えたこと

1 自然な形でのスタンス

高校生の社会とのスタンスがどうなっているのか。あらためて、これまでの調査結果を10項目にしぼって要約してみよう。

- 「海外に行った経験者」が28.3%
- 「海外で1人で買い物ができるようになる」が54.6%
- 「日本の生活水準が高い」が84.8%、
- 「住み心地がよい」は65.0%
- 「老人の在宅介護」に賛成が89.9%、
- 「臓器移植の推進」に賛成は89.3%
- 「空き缶やゴミの始末が悪い」は82.3%、
- 「ゴミを分別して出す」が69.6%
- 「ボランティア活動に参加したことがある」が45.0%
- 「ボランティア活動に参加したい」は55.2%
- 「友人が5人以上いる」が72.5%
- 「いじめを知ったらやめさせる」が62.0%

「クラスが大事」が78.4%
 調査を始める前、高校生は社会の動向に無関心なのではないかと思っていた。しかし、の「老人の在宅介護」や の「空き缶やゴミの始末」への反応をみると、高校生は社会での出来事にそれなりの反応を示しており、社会の動きに高校生なりの関心をもっているのがわかる。こうした結果を手がかりにすると、ことさら、社会を批判するのではなく、かといって、迎合するのではなく、自然な形で社会に接している感じがする。高校生の社会とのスタンスの中で注目をひくのは「社会との自然なスタンス」のように思える。

それと同時に、 の「クラスが大事」がその一例だが、社会をとらえるときに高校生たちが自分や身のまわりから社会を考えようとしている態度が目についた。自分と社会とを対立する感じにとらえるのではなく、また、社会に吸収されるのではなく、自己を出発点に

し、自分の外に家族や学級、学校があり、その外に地域、さらにその外周に社会があるというとらえ方である。

さらにもう1つ、高校生の社会のとらえ方の特色を拾い出すなら、「批判力のなさ」であろう。日本に対するイメージで「政治家への批判」などネガティブな反応が見いだされたが、それらは当然の反応のように思われる。

そして、その他の反応はおおむね素直に社会をみており、社会を批判的にとらえることは少ない。あるがままに社会をみて、テレビなどで伝える通りの反応をする。メディアが怒れば、自分も怒り、テレビが見逃せば、本人も怒らない。高校生の社会観がメディアのいいなりで、幼さを感じるといえればいすぎであろうか。

2 「傍観する若者たち」

序章で社会とのスタンスを5つのタイプに分類した。そうしたカテゴリーに照らし合わせたとき、現代の高校生はどこに位置づけるのか。残念ながら、の「青雲の志を抱いて」のように自分たちが社会を創る感覚は高校生には認められない。かといって、の「怒れる若者」のように社会に反発しているわけでもない。

そして、の「ただよう若者」のように社会に無関心でないのはすでに述べた通りである。統計的にみると、の「ブレイクする若者」の感じは全体の傾向にはあられにくい。そう考えてくると、現代の高校生はカテゴリーの中ではの「ナイーブな若者」に近いように思われる。たしかに、社会に関心を払いながら、怒るのでも迎合するのでもなく、クールに社会を見つめる態度は現代の高校生にも見受けられる。

ただ、「ナイーブな若者」の根底には社会への鋭い批判があった。逆らっても無力だからとあきらめに近い気持ちがあったが、心の底には潔癖なまでの冷静さで社会を見る目を保っていた。それに対し、現代の高校生は社会の動きを眺め、それに反応しているだけで、批判の姿勢に欠けている。

そうした意味では高校生の社会とのスタンスは「傍観する若者たち」と要約できるの

かもしれない。テレビを見ているように、社会の動きを傍観している。無関心なのではない。社会を見ているから、動きについての感想はもっている。しかし、感想を越えて、自分なりの判断をもととしないし、行動に移そうとしない。

生まれてから平穩に時間が過ぎ、高校生たちは社会と自分との関係をつきつめて考える必要がなかった。それだけに、高校生が傍観者の態度をとるのも無理からぬ気がする。そうはいうものの、これから先の日本を考えると、若者が他人任せの感覚で社会を見つめている態度が気になる。

これまで高校生は社会についての発言を求められる機会はなかった。敷いてくれたルールに乗っていればよかったのである。高校生の社会に対する判断力を育てるにはどうしたらよいか。高校生にとっての最も密接な社会は学校であろう。校則規定の見直しや部活動のあり方、修学旅行の計画、学校行事の持ち方など、生徒の判断を求めてよいテーマはいくらでもある。生徒たちが社会と主体的なスタンスをもてるように、生徒の社会性を育てる教育が必要だと思った。

アンケートのお願い

このアンケートは、高校生の皆さんの社会についての気持ちをお聞きする目的で作られたものです。テストではありませんので、自由に思った通りに教えてください。よろしくお願いいたします。
(お名前は入りませんので、ありのままをお答えください。)

高校教育研究会

尚美学園短期大学教授 深谷昌志
上智大学教授 武内清
明治学院大学教授 望月重信

《回答のしかた》 特にことわりのない場合は、あてはまる数字に1つだけ○をつけてください。

⑧ あなたは、次の国についてどのようなイメージを持っていますか。自由に書いてください。

- 1. アメリカ()
- 2. イギリス()
- 3. 韓 国 ()
- 4. 中 国 ()
- 5. インド ()
- 6. 日 本 ()

⑨ あなたは将来、次のようなことはできるようになるとおもいますか。

- | | | | | | |
|---------------------------------|------------|------------|-------|-------------|--------------|
| | きつと
できる | たぶん
できる | わからない | たぶん
できない | ぜんぜん
できない |
| 1. 外国人に英語で道をたずねられたら教える..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 外国へ行ったとき、1人で買い物をする..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 外国のレストランで注文をする..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 外国から日本に来た高校生を、1人で1日案内する..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 外国の家庭に、1年間ホームステイする..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 外国の大学に留学する..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 日本語と英語を混ぜて(チャンポンで)会話をする..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 外国の会社に就職する..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

⑩ あなたは、次のAとBの意見のどちらに賛成ですか。

- | | | | | | |
|--|-----------|---------|---------|-----------|---------------------------------------|
| [A] | ぜったい
A | やや
A | やや
B | ぜったい
B | [B] |
| 1. 外国人であっても日本に 1 — 2 — 3 — 4 | | | | | 日本で生活していても、外国人は自分の母国語で話すのはかまわない |
| いるならば、日本語を話してほしい | | | | | |
| 2. 日本で生活するならば、..... 1 — 2 — 3 — 4 | | | | | 日本で生活していても、外国人ならば自分の国の習慣やしきたりにしたがってよい |
| 外国人であっても日本の習慣やしきたりにしたがってほしい | | | | | |

資料 1 調査票見本

- | | | | | | |
|--|-----------|---------|---------|-----------|--|
| | ぜったい
A | やや
A | やや
B | ぜったい
B | |
| [A] | | | | | [B] |
| 3. 日本の学校は、日本人と
して見方や考え方を学ぶ
場なので、外国人生徒も
そのルールにしたがって
ほしい | 1 | 2 | 3 | 4 | 外国人生徒は自分の国に
ついて学ぶ権利があるか
ら、日本の学校もそれを
保障するべきだ |

Ⅲ. 次に、日本を中心にした社会問題についてお聞きします。

11) あなたは、日本をどんな国だと思っていますか。

- | | | | | |
|--------------------------|-------------|-------------|---------------|----------------|
| | とても
そう思う | かなり
そう思う | あまり
そう思わない | まったく
そう思わない |
| 1. 自然が美しい..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. 生活水準が高い..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. 治安がよい..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. 住み心地がよい..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5. 親切な人が多い..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6. 自由が尊重されている..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7. 民主化が進んでいる..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8. 男女平等が進んでいる..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 9. 無責任な政治家が多い..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10. 学歴が物を言う社会である..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11. 生命を大事にしている社会である..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

12) あなたは、次のような社会の出来事に関心がありますか。

- | | | | | | |
|--------------------------------------|--------------|--------------|--------------|---------------|------|
| | とても
関心がある | かなり
関心がある | あまり
関心がない | まったく
関心がない | 知らない |
| 1. 沖縄の米軍基地問題..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. オウム裁判問題..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 従軍慰安婦を中学の教科書に載せたことを
めぐる問題..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 銀行・証券会社の“ビッグバン”について..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

- | | | | | | |
|--------------------------------|--------------|--------------|--------------|---------------|------|
| | とても
関心がある | かなり
関心がある | あまり
関心がない | まったく
関心がない | 知らない |
| 5. 原発やゴミ焼却場の設置を住民投票で決める問題..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 北朝鮮への食料支援..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 諫早湾の干拓問題..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

13 あなたは、次のようなことをどのように考えますか。

- | | | | | |
|---------------------------|-----------|-----------|----------|------------|
| | とても
賛成 | かなり
賛成 | やや
反対 | ぜったい
反対 |
| 1. 安楽死の公認..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. 臓器移植の推進..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. クローン人間の研究開発..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. 夫婦別姓の採用..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5. 死刑制度廃止..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6. 外国人労働者の受け入れ（単純労働）..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7. 物理・数学の成績優秀者の飛び級制..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8. お年寄りの在宅介護..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

14 あなたは将来、次のような活動に参加しようと思えますか。

- | | | | | |
|-----------------------------|-------------|---------------|----------------|-----------------|
| | ぜひ
参加したい | なるべく
参加したい | あまり参加
したくない | ぜんぜん参加
したくない |
| 1. 福祉ボランティア..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. 身近な環境の保全活動（清掃や植樹）..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. 在日外国人との交流会..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. 漂着重油の除去作業（災害ボランティア）..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5. 海外の平和維持ボランティア..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6. 海外の環境保全活動..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

資料1 調査票見本

15 あなたは、新聞をどのくらい読んでいますか。

- | | 毎日
読んでいる | 週に3~4回
読んでいる | 週に1回くらい
読んでいる | まったく
読まない |
|------------------|-------------|-----------------|------------------|--------------|
| 1. 政治・経済面..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. スポーツ・芸能面..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. テレビ欄..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

16 あなたは、テレビのニュースをどのくらい見えていますか。

- | | 毎日
見ている | 週に3~4回
見ている | 週に1回くらい
見ている | まったく
見ない |
|---|------------|----------------|-----------------|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | |

IV. いわゆる環境問題についてお聞きします。

17 あなたは、環境や自然などの保護に、ふだんから気をつけている方だと思いますか。

- | | とても気
をつけている | まあ気
をつけている | どちらとも
いえない | あまり気
をつけていない | まったく気
をつけていない |
|---|----------------|---------------|---------------|-----------------|------------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |

18 あなたは、ふだんの生活の中で、次のようなことはどのくらいしていますか。

- | | いつも
している | たまに
している | あまり
していない | ぜんぜん
していない |
|----------------------------|-------------|-------------|--------------|---------------|
| 1. 1人で自然の景色を眺めてボーっとする..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. 自然にふれながら散歩をする..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. 花を家の中や自分の部屋に飾る..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. 花や植木を育てる..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5. 生き物をペットとして飼う..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6. 見かけた知らない花や鳥の名前を調べる..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

19 あなたはこれまでに、次のようなことはありましたか。

- | | 何度も
ある | たまに
ある | あまり
ない | ぜんぜん
ない |
|-----------------------------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 自然観察の記録や日誌をつける..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. 自然観察会に参加する..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. オリエンテーリングをする..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. 田植えや稲刈りなどの農作業の体験をする..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5. 自然保護のボランティア活動に参加する..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

20 あなたは最近、自分の住んでいる地域や人々について、次のようなことをどのように感じて

- | | とても
そう思う | まあ
そう思う | あまり
そう思わない | まったく
そう思わない | わからない |
|-----------------------------|-------------|------------|---------------|----------------|-------|
| 1. 丘陵地や空き地などが宅地化されてきた..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 生活が快適に、便利になってきた..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 庭やベランダで花や草木を楽しむ人が多い..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 身近にある川の水がきれいになってきた..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 戸外の子どもの遊び場が減ってきた..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 空き缶やゴミの始末がよくない..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 自動車の排気ガスが増えてきた..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 公園や人家のまわりにカラスが増えてきた..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

21 あなたは最近（ふだん） 次のようなことはありますか。

- | | よく
ある | かなり
ある | あまり
ない | ほとんど
ない |
|---|----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 電気をこまめに消す..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. 暑くてもクーラーの使用は控える..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. 再生紙を使う..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. カップラーメンやインスタント食品は食べない
ようにする..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5. 清涼飲料はジュース、コーラより日本茶や
ウーロン茶などを飲む..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6. 食品の添加物の有無や種類を確認する..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

資料1 調査票見本

- | | よく
ある | かなり
ある | あまり
ない | ほとんど
ない |
|--|----------|-----------|-----------|------------|
| 7. 具合が悪いときは、すぐに薬を飲む..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8. 道端に空き缶をポイ捨てる..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 9. ゴミを分別して出す(燃えるゴミと生ゴミ、
ビン、缶など)..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10. 買い物をしたとき、ビニール袋や包装紙は
もらわないようにする..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

㉒ あなたは、次のようなことについて、どう思いますか。

- | | とても
賛成 | かなり
賛成 | どちらとも
いえない | やや
反対 | ぜったい
反対 |
|--|-----------|-----------|---------------|----------|------------|
| 1. 食器洗いや洗濯に合成洗剤は使わないように
する..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. マイカー通勤は控えるようにする..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. スピードはあまり出なくても、タクシーは
電気自動車にする..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. ホエールウォッチングやペンギン観光を商業に
する..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 絶滅しかけた野性動物を人工的に繁殖させる..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 山村住民に被害を与える有害鳥獣(シカ、
イノシシ)などは駆除する..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 都市計画のために森林が破壊されるのは
仕方がない..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 生活がいっそう快適になるなら、物や
エネルギーの大量消費もやむを得ない..... | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

㉓ あなたは、将来の地球環境に対して、どのように感じていますか。

- | とても楽観
している | かなり楽観
している | あまり楽観
していない | まったく楽観
していない | わからない |
|---------------|---------------|----------------|-----------------|-------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

V. ボランティア活動についてお聞きします。

- 24) 1) あなたは今までに、次のようなきっかけのボランティア活動に参加したことがありますか。
(「ない」人は、次ページの5)に進んでください。)

	ある	ない
1. 自分で個人的に参加したこと	1 _____	2 _____
2. 学校を通して、希望してやったこと	1 _____	2 _____
3. 学校を通して、課題や行事でやったこと	1 _____	2 _____
4. 自分が所属している団体やグループを通してやったこと	1 _____	2 _____

- 2) 高校に入学してから、合計して何日くらいボランティア活動をしましたか。

()日くらい

- 3) どんなボランティア活動をしましたか。

{

}

- 4) 実際にボランティアを経験してみて、どう感じましたか。次のそれぞれの項目について答えてください。

	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
1. 充実感があった	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
2. 大変だった	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
3. いろいろなことを知って社会勉強になった	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
4. いろいろな人と接することができてよかった	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
5. 社会や人のために役立つことができた	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
6. 機会があったら、またやってみたい	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
7. もっと違うボランティア活動をしてみたい	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____

資料1 調査票見本

5)【ボランティア活動の経験がない人にお聞きします。】

ボランティア活動をやってみたいと思いますか。

ぜひ やりたい できたら やりたい あまり やりたくない やりたくない
1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

【ここからは、すべてのみなさんにお聞きします。】

26) これから、ボランティア活動は増えていくと思いますか。

とても かなり 少し あまり
増える 増える 増える 増えない
1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

26) 学校がボランティア活動についての情報や機会をもっと提供してくれたらよいと思いますか。

1. そう思う 2. そう思わない

27) 学校で課題や学校行事に、ボランティア活動を取り入れるべきだと思いますか。

1. 取り入れるべきだ
2. 取り入れるべきではない
3. どちらともいえない

28) 高校生も、もっとボランティア活動をするべきだと思いますか。

1. そう思う 2. そう思わない

29) あなたは、ボランティア活動についての次のような考え方をどう思いますか。

	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
1. ボランティア活動はあくまで個人で自主的に すべきだ.....	1	2	3	4
2. ボランティア活動は自分自身のためにする ものだ.....	1	2	3	4
3. 自分の生活に忙しく、ボランティア活動に参加 する余裕がない.....	1	2	3	4
4. ボランティア活動に謝礼が出るのはおかしい.....	1	2	3	4
5. ボランティア活動をするのは照れくさい.....	1	2	3	4

- | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|------------|---------------|----------------|
| | とても
そう思う | 少し
そう思う | あまり
そう思わない | まったく
そう思わない |
| 6. ボランティア活動は、まだ日本では定着して
いない..... | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7. ボランティア活動は社会の一員としての義務
である..... | 1 | 2 | 3 | 4 |

VI. 最後に、友だちについてお聞きします。

- 30) あなたは、同じクラスの中で、親しい友だちがいますか。

1人も いない	1人 いる	2～3人 いる	5～6人 いる	7～8人 いる	10人以上 いる
1	2	3	4	5	6

- 31) あなたのもっとも親しい友だちが、交通事故で1か月のけがををしてしまいました。学校へは保護者が送ってくれますが、校内では松葉づえがないと歩くことができません。

- 1) そのとき、あなたはどうしますか。

1. いつも、カバンなどを持ってあげる
2. ときどき、カバンなどを持ってあげる
3. たまに、カバンなどを持ってあげる
4. とくに、何もしない

- 2) それでは、とくに親しくはないクラスメートのときはどうしますか。

1. いつも、カバンなどを持ってあげる
2. ときどき、カバンなどを持ってあげる
3. たまに、カバンなどを持ってあげる
4. とくに、何もしない

- 3) あなた自身が、同じようなけがをしてしまったときはどう思いますか。

1. いつも、だれかにカバンなどを持ってもらいたいと思う
2. ときどき、だれかにカバンなどを持ってもらいたいと思う
3. たまに、だれかにカバンなどを持ってもらいたいと思う
4. とくに、何もしてくれなくてもいいと思う

資料 1 調査票見本

32 あなたは、次のようなことが（友だちに対して）できると思いますか。

	きっと できる	たぶん できる	たぶん できない	まったく できない
1. 友だちと意見が違うときに、自分の意見を主張する.....	1	2	3	4
2. 友だちがいじめられているとき、助ける.....	1	2	3	4
3. クラスの責任ある仕事を進んで引き受ける.....	1	2	3	4
4. 自分の誤りに気づいたとき、友だちに素直にあやまる.....	1	2	3	4
5. 友だちがいじめをしていると知ったとき、やめさせる.....	1	2	3	4
6. ふだんあまり話したことがない同級生と協力して仕事をする.....	1	2	3	4
7. 冷静に根拠をあげながら、友だちの間違いを指摘する.....	1	2	3	4

33 あなたは次のようなとき、どのくらいうれしいと感じますか。

	とても うれしい	わりと うれしい	あまり うれしくない	ぜんぜん うれしくない
1. 定期試験でいい成績をとったとき.....	1	2	3	4
2. 家族の人の病気が治ったとき.....	1	2	3	4
3. 友だちが好きな人とつきあえるようになったとき.....	1	2	3	4
4. クラスが合唱祭などで優勝したとき.....	1	2	3	4
5. 学校の野球部などが都道府県大会で優勝したとき.....	1	2	3	4
6. 地元代表の高校野球部が甲子園で優勝したとき.....	1	2	3	4
7. オリンピックで日本の選手が金メダルを取ったとき...	1	2	3	4
8. 核兵器が全廃されたとき.....	1	2	3	4

㉔ 次のようなことはあなたにとって、どの程度、大切なものですか。

	とても 大切	わりと 大切	あまり 大切でない	ぜんぜん 大切でない
1. 自分	1	2	3	4
2. 家族	1	2	3	4
3. 友だち	1	2	3	4
4. クラス	1	2	3	4
5. 通っている学校	1	2	3	4
6. 住んでいる地域	1	2	3	4
7. 国(日本)	1	2	3	4
8. 地球、人類	1	2	3	4
9. 宇宙	1	2	3	4

～ 以上で終わりです。長い間ありがとうございました。～

資料2 学年・性別集計表

単位：サンプル数以外はパーセント。(性別・学年不明4名)

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
サンプル数			1,699	903	792	891	649	155	
①	性別	1. 男子	53.3			55.1	55.5	33.5	
		2. 女子	46.7			44.9	44.5	66.5	
	学年別	1. 1年	52.4	54.4	50.5				
		2. 2年	38.6	39.8	36.5				
		3. 3年	9.1	5.8	13.0				
	学校別	1. A校	4.6	4.1	5.2	0.0	12.0	0.0	
		2. B校	38.9	44.0	32.8	73.9	0.0	0.0	
3. C校		6.6	4.7	8.8	4.3	5.7	23.2		
4. D校		24.6	28.8	20.0	0.0	64.3	0.0		
5. E校		20.5	14.6	27.3	12.7	17.9	76.8		
6. F校		4.8	3.8	5.9	9.1	0.0	0.0		
②	たか 何回 外国に 行く	1. ない	71.7	71.3	72.4	69.7	72.8	79.9	
		2. 1回	17.1	15.0	19.6	15.4	19.3	17.5	
		3. 2回	4.7	5.5	3.4	6.0	3.6	0.6	
		4. 3～4回	3.3	3.8	2.8	4.3	2.8	0.0	
		5. 5～6回	1.4	1.9	0.9	2.0	0.9	0.0	
		6. 7回以上	1.8	2.6	0.9	2.6	0.6	1.9	
③	国に 旅行な どで外 国に行 きたい	1. とてもそう思う	54.4	45.9	64.1	53.5	55.4	55.8	
		2. ややそう思う	30.0	31.4	28.3	31.5	28.4	27.3	
		3. わからない	3.1	4.4	1.5	3.3	2.6	3.9	
		4. あまりそう思わない	7.7	10.8	4.3	7.6	7.7	8.4	
		5. ぜんぜんそう思わない	4.8	7.4	1.8	4.0	5.9	4.5	
④	き たい どで外 国に行 きたい	1. とてもそう思う	24.2	20.0	29.0	24.2	23.6	26.5	
		2. ややそう思う	28.2	23.6	33.5	25.5	30.9	32.9	
		3. わからない	14.5	15.3	13.7	16.9	11.9	12.3	
		4. あまりそう思わない	19.9	22.8	16.4	19.9	19.9	18.7	
		5. ぜんぜんそう思わない	13.3	18.3	7.5	13.6	13.6	9.7	
⑤	旅 行し た い 国	1 位	1. アメリカ	23.2	28.0	17.8	29.3	16.5	16.6
			2. イギリス	12.7	9.6	16.2	13.8	11.0	13.9
			3. 韓国	0.5	0.8	0.1	0.3	0.6	0.7
			4. 中国	2.5	3.6	1.2	1.8	3.3	2.6
			5. インド	1.2	1.4	1.0	0.8	1.9	0.7
			6. フランス	9.8	7.6	12.4	10.2	8.8	11.9
			7. ドイツ	2.1	3.0	1.2	1.8	2.8	0.7
			8. オーストラリア	15.8	14.8	17.0	14.1	18.9	12.6
			9. その他	32.1	31.2	33.2	27.8	36.2	40.4
	2 位	1. アメリカ	12.2	13.4	10.9	12.1	12.5	11.4	
		2. イギリス	15.9	15.7	16.1	16.9	14.8	14.1	
		3. 韓国	0.7	0.9	0.5	0.5	1.1	0.7	
		4. 中国	4.2	5.4	2.8	4.0	4.8	2.7	
		5. インド	1.6	1.6	1.6	1.7	1.4	1.3	
		6. フランス	13.9	12.9	15.0	15.3	11.6	15.4	
		7. ドイツ	2.4	2.9	1.9	2.8	1.6	4.0	
		8. オーストラリア	12.1	11.1	13.2	11.4	13.2	11.4	
		9. その他	37.0	36.2	38.0	35.3	39.0	38.9	

資料2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
5	旅 行 し た い 国	3 位	1. アメリカ	12.9	12.9	12.9	12.1	13.3	15.9
			2. イギリス	11.0	11.3	10.6	12.1	10.4	6.9
			3. 韓国	0.6	0.5	0.7	0.7	0.5	0.0
			4. 中国	5.6	6.6	4.6	5.1	6.7	4.1
			5. インド	2.2	2.2	2.2	2.3	2.1	2.1
			6. フランス	13.0	12.6	13.4	14.6	10.5	13.8
			7. ドイツ	4.0	5.3	2.5	4.0	3.4	6.9
			8. オーストラリア	11.6	10.7	12.7	12.0	11.3	11.0
			9. その他	39.1	38.0	40.3	37.1	41.9	39.3
6	留 学 し た い 国	1 位	1. アメリカ	38.0	43.6	31.9	45.5	28.2	37.0
			2. イギリス	19.8	16.7	23.3	20.9	18.5	18.5
			3. 韓国	0.1	0.2	0.0	0.1	0.2	0.0
			4. 中国	1.4	1.6	1.1	0.9	1.9	1.4
			5. インド	0.2	0.1	0.3	0.2	0.2	0.0
			6. フランス	5.2	4.8	5.7	5.1	5.0	6.2
			7. ドイツ	2.8	3.8	1.6	2.1	3.9	2.1
			8. オーストラリア	19.7	16.2	23.5	14.0	28.2	16.4
			9. その他	12.8	13.0	12.7	11.1	14.0	18.5
	2 位	1. アメリカ	20.5	18.9	22.4	19.8	22.3	17.0	
		2. イギリス	24.4	25.8	22.9	25.8	22.0	27.0	
		3. 韓国	0.5	0.7	0.3	0.1	1.1	0.0	
		4. 中国	2.3	2.9	1.6	2.3	2.0	4.3	
		5. インド	0.2	0.4	0.0	0.0	0.5	0.0	
		6. フランス	10.3	11.1	9.4	11.0	9.0	12.1	
		7. ドイツ	4.8	6.7	2.7	5.6	4.3	2.8	
		8. オーストラリア	16.4	13.8	19.4	15.7	16.6	19.9	
		9. その他	20.6	19.7	21.3	19.8	22.2	17.0	
	3 位	1. アメリカ	15.1	12.8	17.7	12.9	17.6	17.2	
		2. イギリス	17.4	15.8	19.4	16.8	18.3	18.0	
		3. 韓国	0.3	0.4	0.1	0.1	0.5	0.0	
		4. 中国	3.6	4.9	2.1	3.4	4.1	2.3	
		5. インド	0.6	0.7	0.4	0.2	0.9	1.6	
		6. フランス	17.0	17.4	16.7	20.1	14.1	10.9	
		7. ドイツ	7.5	8.9	6.0	8.3	5.7	10.9	
		8. オーストラリア	13.3	12.4	14.5	13.9	12.6	13.3	
		9. その他	25.1	26.9	23.0	24.1	26.2	25.8	
7	友 だ ち を も ち た い 国	1 位	1. アメリカ	45.3	46.6	44.0	50.4	38.6	45.1
			2. イギリス	11.5	9.3	13.9	12.0	11.1	9.9
			3. 韓国	1.6	2.1	0.9	1.0	2.8	0.0
			4. 中国	5.7	6.0	5.4	5.2	5.9	7.7
			5. インド	1.5	1.6	1.3	1.2	1.8	2.1
			6. フランス	6.1	5.2	7.2	7.6	4.2	5.6
			7. ドイツ	2.3	3.3	1.2	1.8	2.6	4.2
			8. オーストラリア	10.5	8.2	12.7	7.2	15.0	9.2
			9. その他	15.5	17.6	13.3	13.6	18.1	16.2

資料2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
7	友 だ ち を も ち たい 国	2 位	1. アメリカ	15.4	13.8	17.1	14.6	18.1	7.9
			2. イギリス	19.3	20.6	17.8	22.0	16.6	15.1
			3. 韓国	2.7	3.6	1.6	2.3	3.2	2.9
			4. 中国	7.7	8.4	6.9	5.7	10.0	10.1
			5. インド	2.0	1.4	2.7	2.3	1.3	3.6
			6. フランス	12.2	11.2	13.5	13.5	9.0	18.7
			7. ドイツ	3.1	4.0	2.0	3.1	3.0	2.9
			8. オーストラリア	12.6	10.3	15.2	12.3	14.0	8.6
			9. その他	25.0	26.7	23.0	24.1	24.9	30.2
	3 位	1. アメリカ	11.4	10.1	13.0	10.6	12.7	10.7	
		2. イギリス	13.1	12.8	13.6	13.0	13.1	14.5	
		3. 韓国	2.0	2.2	1.9	1.6	2.4	3.1	
		4. 中国	8.5	7.5	9.7	9.6	7.9	4.6	
		5. インド	3.8	3.3	4.4	3.5	4.1	4.6	
		6. フランス	14.5	13.4	15.7	16.1	12.9	11.5	
		7. ドイツ	5.6	7.2	3.7	6.6	3.4	9.2	
		8. オーストラリア	10.8	10.4	11.3	9.5	12.2	13.0	
		9. その他	30.1	33.0	26.7	29.5	31.3	29.0	
9	将 来 で き る よ う に な る と 思 う こ と	英 語 で 尋 ね ら れ た ら 教 え る	1. きっとできる	15.5	15.4	15.4	14.8	16.4	14.9
			2. たぶんできる	41.3	38.1	45.1	40.3	42.3	44.2
			3. わからない	27.9	27.8	27.8	28.8	27.9	21.4
			4. たぶんできない	12.2	14.1	10.0	13.3	10.8	11.7
			5. ぜんぜんできない	3.2	4.6	1.6	2.8	2.6	7.8
	1 人 で 案 内 す る	外 国 で 1 人 で 買 い 物 を す る	1. きっとできる	19.5	22.4	16.1	20.2	19.8	13.6
			2. たぶんできる	35.1	37.1	33.0	35.3	34.7	36.4
			3. わからない	24.2	23.3	25.4	23.0	26.1	24.0
			4. たぶんできない	16.6	12.7	21.2	17.2	15.1	20.1
			5. ぜんぜんできない	4.5	4.6	4.3	4.3	4.3	5.8
	1 年 間 ホ ー ム ス テ イ す る	外 国 の レ ス ト ラ で 注 文 す る	1. きっとできる	14.4	16.1	12.4	15.9	13.5	9.2
			2. たぶんできる	34.9	33.5	36.5	34.0	35.5	37.9
			3. わからない	28.2	27.8	28.5	27.8	29.1	26.1
			4. たぶんできない	16.3	17.0	15.6	17.1	14.8	18.3
			5. ぜんぜんできない	6.3	5.7	7.0	5.3	7.2	8.5
	留 学 す る	外 国 の 大 学 に	1. きっとできる	13.3	13.4	13.0	13.0	14.2	10.4
			2. たぶんできる	24.0	19.4	29.1	20.7	27.5	27.9
			3. わからない	30.1	29.7	30.8	32.8	27.0	28.6
			4. たぶんできない	23.5	24.9	22.0	23.9	22.4	26.0
			5. ぜんぜんできない	9.1	12.6	5.1	9.6	8.8	7.1
	留 学 す る	外 国 の 大 学 に	1. きっとできる	17.8	15.0	21.0	19.0	17.5	12.3
			2. たぶんできる	25.2	22.0	28.7	22.8	27.2	29.9
			3. わからない	29.2	29.0	29.6	30.9	26.6	30.5
			4. たぶんできない	16.5	18.7	14.2	15.2	18.4	16.9
			5. ぜんぜんできない	11.3	15.3	6.6	12.0	10.2	10.4
留 学 す る	外 国 の 大 学 に	1. きっとできる	9.0	7.8	10.4	8.6	9.9	7.8	
		2. たぶんできる	14.7	14.0	15.4	13.3	16.1	16.3	
		3. わからない	33.6	32.0	35.4	34.7	32.8	32.0	
		4. たぶんできない	24.3	23.6	25.1	24.7	24.2	22.2	
		5. ぜんぜんできない	18.4	22.3	13.7	18.7	16.9	21.6	

資料2 学年・性別集計表

質問項目		全体	性別		学年別			
			男子	女子	1年	2年	3年	
9	将来できるようになると思うこと 混ざって会話する 日本語と英語を	1. きっとできる	23.9	23.4	24.2	23.4	25.5	18.8
		2. たぶんでできる	33.1	29.0	38.0	32.2	34.0	35.7
		3. わからない	29.5	31.5	27.3	31.6	26.9	28.6
		4. たぶんでできない	8.6	9.3	8.0	7.8	9.0	12.3
		5. ぜんぜんできない	4.8	6.8	2.5	5.0	4.7	4.5
	就職する 外国の会社に	1. きっとできる	4.7	5.7	3.7	4.4	5.3	4.5
		2. たぶんでできる	8.7	9.6	7.6	8.4	8.0	12.3
		3. わからない	33.5	31.5	36.0	34.8	33.0	29.2
		4. たぶんでできない	27.3	25.5	29.3	26.9	28.6	24.0
		5. ぜんぜんできない	25.7	27.8	23.4	25.5	25.1	29.9
10	異文化に対する考え方でAとBどちらに賛成か よい で話して B. 母国語 A. 日本語 を話して ほしい	1. ぜったいA	17.0	25.5	7.1	16.3	17.8	16.8
		2. ややA	36.8	35.7	38.1	34.8	37.1	47.7
		3. ややB	35.6	30.0	42.3	36.8	35.8	29.0
		4. ぜったいB	10.6	8.8	12.6	12.1	9.3	6.5
	よい たがって 習慣にし B. 自国の A. 日本の 習慣にし	1. ぜったいA	13.3	18.0	8.1	13.9	12.5	13.6
		2. ややA	43.8	40.6	47.3	44.0	41.9	50.0
		3. ややB	32.3	30.6	34.4	31.0	34.5	31.2
		4. ぜったいB	10.5	10.8	10.2	11.0	11.1	5.2
	すべき 権利を保障 ついでに B. 自国の A. 日本の 学校のル ールにした がほしい	1. ぜったいA	12.9	17.5	7.8	12.6	13.1	14.4
		2. ややA	42.1	41.3	43.1	43.3	39.9	44.4
		3. ややB	34.3	31.0	38.0	33.3	35.5	34.6
		4. ぜったいB	10.7	10.2	11.1	10.7	11.5	6.5
11	日本をどんな国だと 思うか 自然が美しい	1. とてもそう思う	7.6	8.4	6.7	7.3	7.0	11.9
		2. かなりそう思う	29.6	27.2	32.6	29.9	28.0	35.8
		3. あまりそう思わない	51.9	49.9	54.2	51.6	53.3	47.7
		4. まったくそう思わない	10.8	14.5	6.5	11.1	11.7	4.6
	高い生活水準が	1. とてもそう思う	37.7	37.8	37.7	36.1	38.2	45.2
		2. かなりそう思う	47.1	46.3	48.0	47.0	48.5	41.9
		3. あまりそう思わない	12.4	11.5	13.6	13.5	11.2	11.6
		4. まったくそう思わない	2.7	4.4	0.8	3.4	2.0	1.3
	治安がよい	1. とてもそう思う	29.6	31.8	26.9	26.0	33.7	32.3
		2. かなりそう思う	39.0	38.6	39.6	37.4	40.6	42.6
		3. あまりそう思わない	26.8	24.0	30.2	30.6	23.0	21.9
		4. まったくそう思わない	4.5	5.7	3.2	6.1	2.6	3.2
	住み心地がよい	1. とてもそう思う	22.2	19.7	24.9	21.1	22.6	25.8
		2. かなりそう思う	42.8	41.8	44.1	40.4	44.3	51.0
		3. あまりそう思わない	27.8	28.9	26.5	29.9	27.0	18.7
		4. まったくそう思わない	7.3	9.6	4.6	8.5	6.0	4.5
	多い親切な人が	1. とてもそう思う	4.2	4.7	3.7	3.7	5.1	3.2
		2. かなりそう思う	24.9	23.7	26.3	23.8	25.0	31.0
		3. あまりそう思わない	55.4	51.8	59.7	56.2	54.4	56.1
		4. まったくそう思わない	15.5	19.8	10.3	16.3	15.4	9.7
	自由が尊重されている	1. とてもそう思う	4.9	5.4	4.3	4.4	5.6	4.5
		2. かなりそう思う	28.3	28.8	27.9	25.5	30.4	36.1
		3. あまりそう思わない	49.8	45.7	54.6	50.8	48.8	49.0
		4. まったくそう思わない	17.0	20.2	13.2	19.3	15.3	10.3
民主化が進んでいる	1. とてもそう思う	9.4	10.1	8.7	8.2	11.9	5.8	
	2. かなりそう思う	43.9	45.2	42.3	41.8	45.1	50.3	
	3. あまりそう思わない	39.6	35.3	44.6	42.6	35.7	39.4	
	4. まったくそう思わない	7.1	9.4	4.3	7.3	7.2	4.5	

資料2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
11	日本をどんな国だと思おうか	男女平等が進んでいる	1. とてもそう思う	9.6	11.8	7.0	12.3	7.2	3.9
			2. かなりそう思う	37.0	42.3	31.3	37.0	38.5	32.3
			3. あまりそう思わない	45.3	38.0	53.6	43.2	46.1	54.2
			4. まったくそう思わない	8.0	7.9	8.1	7.5	8.3	9.7
	無責任な政治家が多い		1. とてもそう思う	66.5	68.9	64.0	65.5	69.3	62.6
			2. かなりそう思う	25.8	21.8	30.0	24.6	24.8	34.8
			3. あまりそう思わない	5.0	5.8	4.1	6.5	3.7	1.3
			4. まったくそう思わない	2.7	3.5	1.9	3.4	2.2	1.3
	学歴が物言いう社会である		1. とてもそう思う	56.9	57.9	55.6	57.6	56.0	56.1
			2. かなりそう思う	32.2	29.5	35.5	31.7	32.1	36.1
			3. あまりそう思わない	8.1	8.6	7.7	7.7	9.6	5.2
			4. まったくそう思わない	2.7	4.0	1.3	3.0	2.4	2.6
生命を大事にして		1. とてもそう思う	7.4	9.6	5.0	7.2	8.3	5.2	
		2. かなりそう思う	25.5	25.8	25.2	24.0	25.8	33.5	
		3. あまりそう思わない	53.5	49.8	57.8	55.4	51.9	49.7	
		4. まったくそう思わない	13.6	14.8	12.0	13.4	14.1	11.6	
12	社会の問題	沖縄の米軍基地問題	1. とても関心がある	10.5	11.9	8.9	10.5	10.9	9.0
			2. かなり関心がある	27.2	27.5	26.6	27.6	28.7	18.1
			3. あまり関心がない	51.2	46.4	56.8	49.7	50.3	63.9
			4. まったく関心がない	9.0	11.4	6.2	9.8	8.7	5.2
			5. 知らない	2.2	2.8	1.5	2.5	1.4	3.9
	裁判官の	オウム裁判問題	1. とても関心がある	18.0	19.1	16.6	19.9	16.2	13.5
			2. かなり関心がある	33.1	29.7	37.0	33.9	32.2	32.3
			3. あまり関心がない	37.0	36.6	37.6	35.4	37.6	44.5
			4. まったく関心がない	10.3	12.1	8.2	8.9	12.6	8.4
			5. 知らない	1.7	2.6	0.6	1.9	1.4	1.3
	来歴	従軍慰安婦を中学の教科書に載せた問題	1. とても関心がある	9.4	9.0	9.7	9.7	8.6	11.0
			2. かなり関心がある	18.9	15.6	22.5	16.1	21.0	25.8
3. あまり関心がない			42.4	41.5	43.5	42.8	42.1	41.3	
4. まったく関心がない			13.1	15.2	10.7	14.3	11.8	11.6	
5. 知らない			16.3	18.7	13.5	17.2	16.5	10.3	
事	銀行・証券会社のビッグバンについて	1. とても関心がある	5.4	7.7	2.8	5.4	5.3	5.8	
		2. かなり関心がある	10.0	12.5	7.3	11.2	8.3	11.0	
		3. あまり関心がない	39.8	35.0	45.2	40.3	38.8	40.6	
		4. まったく関心がない	17.1	17.5	16.7	17.1	17.6	15.5	
		5. 知らない	27.7	27.4	28.0	26.0	30.1	27.1	
関心	原発や三焼却場の設置を住民投票で決める	1. とても関心がある	16.3	16.4	16.1	15.4	18.1	13.6	
		2. かなり関心がある	29.4	26.6	32.6	29.2	29.5	30.5	
		3. あまり関心がない	37.0	35.7	38.5	38.3	35.3	37.0	
		4. まったく関心がない	9.3	12.0	6.1	9.0	9.2	11.0	
		5. 知らない	8.0	9.2	6.7	8.2	8.0	7.8	
度	北朝鮮への食料支援	1. とても関心がある	18.2	18.7	17.4	17.8	19.5	13.5	
		2. かなり関心がある	29.3	25.9	33.2	29.0	30.0	29.0	
		3. あまり関心がない	36.3	36.1	36.8	35.5	36.3	41.9	
		4. まったく関心がない	10.6	12.7	8.2	11.8	9.2	9.7	
		5. 知らない	5.6	6.6	4.4	5.9	5.0	5.8	
問題	諫早湾の干拓	1. とても関心がある	11.1	13.0	8.7	10.1	12.0	12.3	
		2. かなり関心がある	13.3	15.1	11.0	12.8	14.5	10.3	
		3. あまり関心がない	36.1	34.3	38.4	37.0	35.5	34.2	
		4. まったく関心がない	10.6	11.8	9.2	11.2	9.8	10.3	
		5. 知らない	28.9	25.7	32.7	28.8	28.2	32.9	

資料2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
13	社 会 的 出 来	公認安楽死の	1. とても賛成	30.9	36.6	24.3	30.6	32.6	25.3
			2. かなり賛成	49.0	42.0	57.2	48.2	48.8	54.5
			3. やや反対	16.8	17.4	16.2	18.1	15.1	16.9
			4. ぜったい反対	3.2	4.0	2.3	3.1	3.4	3.2
	の 推 進	臓器移植	1. とても賛成	43.5	45.8	41.0	41.9	48.1	34.6
			2. かなり賛成	45.8	41.5	50.7	46.6	41.7	58.2
			3. やや反対	9.0	10.1	7.8	9.9	8.4	6.5
			4. ぜったい反対	1.7	2.6	0.5	1.6	1.9	0.7
	の 採 用	クローン人間の	1. とても賛成	9.8	15.0	3.8	11.9	7.5	7.1
			2. かなり賛成	14.4	15.8	12.9	14.4	15.4	10.4
			3. やや反対	35.5	32.4	39.1	36.7	33.6	37.0
			4. ぜったい反対	40.3	36.9	44.1	37.0	43.5	45.5
事 へ の 賛 否	夫婦別姓	1. とても賛成	18.0	18.9	17.2	15.9	21.6	16.2	
		2. かなり賛成	33.8	31.7	36.2	32.2	34.7	39.0	
		3. やや反対	34.3	31.1	37.9	35.5	32.2	35.7	
		4. ぜったい反対	13.9	18.3	8.8	16.3	11.6	9.1	
の 受 け 入 れ	死刑制度	1. とても賛成	12.1	14.2	9.5	12.7	11.4	11.0	
		2. かなり賛成	23.1	22.1	24.2	22.7	23.4	23.9	
		3. やや反対	40.6	33.6	48.5	39.7	41.7	41.3	
		4. ぜったい反対	24.3	30.0	17.8	25.0	23.4	23.9	
の 受 け 入 れ	外国人労働者	1. とても賛成	26.6	28.6	24.4	26.2	29.4	17.6	
		2. かなり賛成	50.2	45.9	55.3	51.0	47.1	59.5	
		3. やや反対	20.2	20.8	19.2	19.5	20.5	20.9	
		4. ぜったい反対	3.0	4.7	1.1	3.3	3.0	2.0	
の 賛 否	飛び級制	1. とても賛成	21.4	26.0	16.2	21.6	22.8	14.8	
		2. かなり賛成	34.8	32.6	37.6	34.4	34.6	38.7	
		3. やや反対	27.2	23.3	31.6	25.6	28.4	31.0	
		4. ぜったい反対	16.5	18.2	14.6	18.4	14.2	15.5	
の 賛 否	お年寄りの在宅介護	1. とても賛成	43.9	37.5	51.5	42.6	45.1	47.4	
		2. かなり賛成	46.0	48.2	43.3	47.0	44.9	43.5	
		3. やや反対	7.6	10.0	4.7	7.1	8.4	6.5	
		4. ぜったい反対	2.5	4.3	0.5	3.3	1.6	2.6	
14	社 会 的 活 動 へ の 参 加 意 欲	福祉ボランティア	1. ぜひ参加したい	14.6	9.3	20.7	14.4	15.2	13.6
			2. なるべく参加したい	49.1	42.5	56.5	46.8	52.1	49.4
			3. あまり参加したくない	28.0	35.9	19.1	30.0	25.2	28.6
			4. ぜんぜん参加したくない	8.4	12.4	3.7	8.9	7.5	8.4
	の 参 加 意 欲	身近な環境保全活動	1. ぜひ参加したい	13.6	12.7	14.6	12.7	15.5	10.4
			2. なるべく参加したい	49.9	45.6	54.7	47.0	52.6	55.2
			3. あまり参加したくない	29.4	31.4	27.4	32.2	25.5	30.5
			4. ぜんぜん参加したくない	7.1	10.4	3.3	8.1	6.4	3.9
	の 参 加 意 欲	在日外国人との交流会	1. ぜひ参加したい	23.1	16.5	30.5	24.1	22.8	18.2
			2. なるべく参加したい	43.2	39.5	47.3	41.7	43.2	51.3
			3. あまり参加したくない	26.2	32.3	19.5	26.0	26.8	26.0
			4. ぜんぜん参加したくない	7.5	11.8	2.7	8.2	7.2	4.5
の 参 加 意 欲	漂着重油の除去作業	1. ぜひ参加したい	15.2	12.7	18.2	15.0	15.8	14.3	
		2. なるべく参加したい	42.8	38.5	47.5	41.6	44.0	44.2	
		3. あまり参加したくない	33.3	35.7	30.5	33.8	32.1	35.1	
		4. ぜんぜん参加したくない	8.7	13.1	3.8	9.7	8.0	6.5	
の 参 加 意 欲	海外の平和維持ボランティア	1. ぜひ参加したい	18.2	14.1	22.8	17.1	21.0	13.0	
		2. なるべく参加したい	39.7	37.1	42.8	39.7	39.5	40.9	
		3. あまり参加したくない	33.1	36.5	29.2	32.7	32.0	40.3	
		4. ぜんぜん参加したくない	9.0	12.3	5.2	10.5	7.5	5.8	

資料2 学年・性別集計表

質問項目		全体	性別		学年別				
			男子	女子	1年	2年	3年		
14	社会的活動への参加意欲 海外の環境保全活動	1. ぜひ参加したい	19.0	17.3	20.8	16.9	23.0	13.6	
		2. なるべく参加したい	41.1	37.1	45.8	41.0	40.4	45.5	
		3. あまり参加したくない	31.8	34.2	29.0	33.0	29.0	36.4	
		4. ぜんぜん参加したくない	8.1	11.3	4.4	9.1	7.5	4.5	
15	新聞を読んでいるか	経済面	1. 毎日読んでいる	9.2	11.2	6.8	7.9	10.2	12.3
			2. 週に3~4回読んでいる	21.1	23.2	18.7	20.6	20.8	25.3
			3. 週に1回くらい読んでいる	34.7	34.8	34.8	34.9	35.1	33.1
			4. まったく読まない	35.0	30.8	39.6	36.6	34.0	29.2
		芸能面	1. 毎日読んでいる	33.0	42.6	22.1	31.3	33.8	39.0
			2. 週に3~4回読んでいる	28.9	27.9	30.0	30.6	27.4	25.3
			3. 週に1回くらい読んでいる	21.5	17.4	26.1	21.7	21.8	19.5
			4. まったく読まない	16.7	12.1	21.8	16.4	17.1	16.2
		テレビ欄	1. 毎日読んでいる	82.5	84.6	80.1	85.1	79.2	81.2
			2. 週に3~4回読んでいる	10.8	9.5	12.3	8.8	13.3	12.3
			3. 週に1回くらい読んでいる	4.3	4.0	4.6	3.6	5.3	3.9
			4. まったく読まない	2.4	1.9	3.0	2.6	2.2	2.6
16	テレビのニュースを見ているか	1. 毎日見ている	55.7	57.1	54.1	58.1	53.2	51.9	
		2. 週に3~4回見ている	31.6	30.2	33.2	29.6	33.5	35.7	
		3. 週に1回くらい見ている	10.3	9.9	10.8	10.1	11.1	8.4	
		4. まったく見ない	2.4	2.8	1.9	2.2	2.2	3.9	
17	環境や自然保護に気をつけているか	1. とても気をつけている	8.6	10.6	6.3	8.5	9.7	4.5	
		2. まあ気をつけている	37.6	35.2	40.2	36.8	38.5	37.7	
		3. どちらともいえない	38.8	36.0	42.2	38.6	38.8	40.9	
		4. あまり気をつけていない	12.0	13.6	10.1	12.3	11.1	14.3	
		5. まったく気をつけていない	3.0	4.6	1.1	3.8	1.9	2.6	
18	ふだんの生活行動	1人で自然の景色を眺める	1. いつもしている	18.3	15.8	21.2	18.5	17.7	20.1
			2. たまにしている	48.4	46.8	50.3	47.7	48.5	51.9
			3. あまりしていない	23.9	26.5	20.7	23.3	24.9	22.1
			4. ぜんぜんしていない	9.4	11.0	7.8	10.5	8.9	5.8
	自然にふれながら散歩をする	1. いつもしている	6.6	6.4	6.7	6.5	6.3	7.8	
		2. たまにしている	25.4	22.6	28.4	25.3	24.3	29.9	
		3. あまりしていない	44.5	44.4	44.7	42.8	47.9	40.3	
		4. ぜんぜんしていない	23.6	26.7	20.2	25.4	21.6	22.1	
	花を部屋に飾る	1. いつもしている	12.6	7.6	18.3	12.9	11.3	16.2	
		2. たまにしている	21.4	13.0	31.1	21.1	22.1	20.8	
		3. あまりしていない	32.5	35.1	29.4	32.1	31.8	37.0	
		4. ぜんぜんしていない	33.4	44.4	21.2	33.8	34.9	26.0	
	花や植木を育てる	1. いつもしている	10.7	7.5	14.2	10.4	10.3	13.0	
		2. たまにしている	18.9	13.4	25.1	21.6	16.3	14.3	
		3. あまりしていない	32.8	31.7	34.3	31.6	33.5	38.3	
		4. ぜんぜんしていない	37.6	47.4	26.4	36.4	39.9	34.4	
トとして飼う	1. いつもしている	31.5	30.0	33.0	30.1	33.5	30.5		
	2. たまにしている	11.9	12.4	11.4	12.7	11.1	11.0		
	3. あまりしていない	15.1	16.6	13.5	15.2	15.4	13.6		
	4. ぜんぜんしていない	41.5	41.0	42.1	42.0	40.0	44.8		
知らない花や鳥の名前を調べる	1. いつもしている	1.8	2.7	0.8	1.8	2.0	1.3		
	2. たまにしている	5.8	5.2	6.6	5.8	6.4	5.8		
	3. あまりしていない	21.3	19.3	23.5	21.3	21.2	18.8		
	4. ぜんぜんしていない	71.1	72.8	69.2	71.1	70.4	74.0		

資料2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
19	これまでにの自然体験	自然観察の記録や日誌をつける	1. 何度もある	5.7	4.7	6.9	6.0	5.8	3.9
			2. たまにある	18.7	13.6	24.5	19.3	17.7	20.1
			3. あまりない	31.5	30.4	32.7	32.9	28.9	34.4
			4. ぜんぜんない	44.1	51.2	35.9	41.9	47.7	41.6
	自然観察会に参加する	オリエンテーリングをする	1. 何度もある	2.4	2.7	2.0	2.6	2.2	1.9
			2. たまにある	6.4	5.9	6.7	6.8	5.3	7.8
			3. あまりない	21.0	22.2	19.7	23.1	18.6	18.8
			4. ぜんぜんない	70.3	69.2	71.6	67.5	73.9	71.4
	田植えや稲刈りなどをやる	自然保護ボランティアに参加する	1. 何度もある	9.0	9.6	8.2	9.2	8.8	8.4
			2. たまにある	17.6	15.5	19.9	16.3	19.1	18.2
			3. あまりない	25.6	26.0	25.4	25.6	27.7	18.2
			4. ぜんぜんない	47.8	48.9	46.4	48.9	44.4	55.2
			1. 何度もある	3.0	3.2	2.8	3.5	2.7	1.9
			2. たまにある	10.2	10.1	10.2	11.9	8.5	6.5
			3. あまりない	26.7	27.0	26.4	27.1	26.6	24.7
			4. ぜんぜんない	60.2	59.7	60.6	57.4	62.2	66.9
20	自分の住む地域や住民をどう感じるか	空き地が宅地になってきた	1. とてもそう思う	37.0	33.0	41.5	33.6	42.1	35.1
			2. まあそう思う	33.3	32.9	33.7	32.4	33.2	39.0
			3. あまりそう思わない	14.9	16.1	13.5	15.8	13.6	14.9
			4. まったくそう思わない	5.1	6.5	3.6	6.4	3.6	3.9
			5. わからない	9.8	11.4	7.8	11.8	7.5	7.1
	庭で花や草木を楽しむ人が多い	生活が便利になってきた	1. とてもそう思う	18.5	17.8	19.2	18.2	19.2	16.9
			2. まあそう思う	41.0	38.3	44.2	39.9	43.1	39.0
			3. あまりそう思わない	30.5	32.0	28.9	30.4	29.8	34.4
			4. まったくそう思わない	6.4	7.4	5.1	7.8	4.8	3.9
			5. わからない	3.6	4.6	2.5	3.7	3.0	5.8
	川の水がきれいになってきた	子どもものの遊び場が減ってきた	1. とてもそう思う	14.6	11.9	17.6	16.2	13.1	11.0
			2. まあそう思う	32.4	29.2	36.2	35.6	28.5	31.2
			3. あまりそう思わない	35.3	35.6	34.9	31.4	40.5	35.7
			4. まったくそう思わない	10.1	13.5	6.3	8.8	11.4	12.3
			5. わからない	7.6	9.8	5.0	8.0	6.4	9.7
	空き缶やゴミの始末がよくない		1. とてもそう思う	2.0	2.7	1.3	2.0	2.0	1.9
			2. まあそう思う	5.0	6.2	3.6	4.6	5.6	3.9
			3. あまりそう思わない	30.2	26.8	34.3	29.0	30.6	36.4
			4. まったくそう思わない	53.4	53.9	52.8	54.2	53.8	46.8
			5. わからない	9.3	10.5	8.0	10.1	8.0	11.0
		1. とてもそう思う	39.1	40.0	37.8	41.3	37.3	32.5	
		2. まあそう思う	31.7	30.2	33.5	31.4	31.9	33.1	
		3. あまりそう思わない	18.8	17.2	20.7	15.5	22.5	22.7	
		4. まったくそう思わない	5.5	7.4	3.4	6.1	4.6	6.5	
		5. わからない	4.9	5.2	4.6	5.7	3.8	5.2	
		1. とてもそう思う	50.8	47.3	54.6	55.2	46.4	42.9	
		2. まあそう思う	31.5	33.1	29.9	28.7	35.1	34.4	
		3. あまりそう思わない	11.7	12.2	11.3	10.0	13.5	14.9	
		4. まったくそう思わない	2.8	3.7	1.8	2.5	3.1	3.2	
		5. わからない	3.1	3.7	2.4	3.7	1.9	4.5	

資料 2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
20	自分の住む地域や住民をどう感じるか	車の排気ガスが増えてきた	1. とてもそう思う	52.1	49.1	55.4	57.1	47.8	40.5
			2. まあそう思う	27.8	27.9	27.7	26.4	29.5	29.4
			3. あまりそう思わない	12.9	14.8	10.9	9.2	16.8	19.0
			4. まったくそう思わない	2.4	3.1	1.7	2.6	2.0	3.3
			5. わからない	4.7	5.0	4.3	4.8	3.9	7.8
		町にカラスが増えてきた	1. とてもそう思う	33.1	28.3	38.4	44.3	17.6	32.5
			2. まあそう思う	23.6	23.9	23.2	22.8	23.9	27.3
			3. あまりそう思わない	28.7	29.8	27.5	21.0	39.2	29.9
			4. まったくそう思わない	7.0	9.4	4.3	5.8	9.7	3.2
			5. わからない	7.6	8.5	6.5	6.2	9.6	7.1
21	生活の心がけ	電気をこまめに消す	1. よくある	28.6	27.0	30.6	29.9	27.4	26.8
			2. かなりある	30.0	27.9	32.4	30.2	28.8	33.3
			3. あまりない	32.3	32.8	31.7	29.5	36.2	32.0
			4. ほとんどない	9.1	12.4	5.4	10.4	7.5	7.8
		暑くてもクーラーは控える	1. よくある	21.4	21.8	20.9	17.5	26.3	22.9
			2. かなりある	19.8	19.2	20.5	19.1	21.5	17.0
			3. あまりない	39.0	36.9	41.4	38.5	37.9	46.4
			4. ほとんどない	19.8	22.1	17.2	24.9	14.3	13.7
		再生紙を使う	1. よくある	16.7	13.5	20.4	16.6	17.6	13.7
			2. かなりある	33.5	28.9	38.6	32.5	35.4	30.7
3. あまりない	39.8		44.5	34.6	39.5	38.2	49.0		
4. ほとんどない	10.0		13.0	6.4	11.3	8.8	6.5		
インスタント食品を食べないようにする	1. よくある	14.8	9.1	21.4	14.0	15.0	19.0		
	2. かなりある	18.8	15.6	22.4	17.1	20.7	20.9		
	3. あまりない	44.1	45.9	42.0	44.8	42.4	46.4		
	4. ほとんどない	22.3	29.4	14.2	24.0	21.9	13.7		
蒸やら蒸釜を乾かす	1. よくある	28.2	18.7	38.9	29.1	24.5	37.7		
	2. かなりある	24.3	22.4	26.5	22.9	25.7	26.6		
	3. あまりない	34.4	40.1	28.2	34.5	36.2	27.3		
	4. ほとんどない	13.0	18.9	6.5	13.5	13.6	8.4		
食品添加物に注意している	1. よくある	11.1	9.5	12.9	9.5	13.6	9.7		
	2. かなりある	14.9	13.4	16.6	13.6	16.3	16.2		
	3. あまりない	39.0	35.6	42.7	38.4	37.4	48.1		
	4. ほとんどない	35.1	41.5	27.9	38.5	32.7	26.0		
具合が悪いと、すぐに薬を飲む	1. よくある	14.6	14.5	14.5	15.7	15.0	5.8		
	2. かなりある	21.4	20.8	22.0	20.9	21.0	26.0		
	3. あまりない	41.1	41.6	40.9	41.0	39.8	48.7		
	4. ほとんどない	22.8	23.1	22.5	22.5	24.1	19.5		
道端に空き缶をポイ捨てる	1. よくある	8.3	14.2	1.7	9.5	7.9	3.3		
	2. かなりある	11.4	17.0	4.9	13.1	10.1	6.5		
	3. あまりない	26.6	28.7	24.3	27.9	25.5	24.2		
	4. ほとんどない	53.8	40.0	69.2	49.5	56.6	66.0		
ゴミを分別して出す	1. よくある	34.0	26.0	43.0	33.1	34.9	35.3		
	2. かなりある	35.6	34.9	36.5	37.1	32.7	39.9		
	3. あまりない	21.7	26.9	15.7	21.0	22.6	21.6		
	4. ほとんどない	8.7	12.1	4.8	8.8	9.7	3.3		
買った物のビニール袋や包装紙はちゃんと捨てる	1. よくある	7.2	8.4	5.6	6.3	8.5	5.9		
	2. かなりある	14.4	15.5	13.2	14.1	16.5	7.8		
	3. あまりない	41.4	39.2	43.9	38.8	43.2	49.0		
	4. ほとんどない	37.1	36.8	37.3	40.8	31.8	37.3		

資料2 学年・性別集計表

質問項目		全体	性別		学年別			
			男子	女子	1年	2年	3年	
22	次のことに ついで、 どう思 うか	わな合 1. とても賛成	23.8	22.4	25.3	22.2	27.2	18.3
		ない成 2. かなり賛成	28.7	25.3	32.6	27.4	28.5	37.3
		洗剤 3. どちらともいえない	42.0	45.4	38.1	44.5	39.5	37.9
		は使 4. やや反対	3.3	3.7	2.8	3.8	2.4	4.6
		5. ぜったい反対	2.2	3.2	1.2	2.2	2.4	2.0
	マイカー 通勤	1. とても賛成	12.8	14.1	11.2	13.9	12.2	8.5
		2. かなり賛成	15.8	15.0	16.8	17.8	12.3	19.0
		3. どちらともいえない	51.6	49.7	54.0	49.7	53.4	56.2
		4. やや反対	13.4	12.6	14.4	11.8	16.1	11.8
		5. ぜったい反対	6.3	8.6	3.7	6.8	6.0	4.6
	シートは 電気自動車 にする	1. とても賛成	23.9	27.7	19.4	25.4	23.5	16.3
		2. かなり賛成	22.4	22.1	22.8	21.8	23.0	23.5
		3. どちらともいえない	42.4	37.2	48.5	40.1	43.8	51.0
		4. やや反対	7.6	8.3	6.8	8.6	6.3	7.2
		5. ぜったい反対	3.7	4.6	2.6	4.1	3.5	2.0
	クジラや ペンギ ンを商業 にする	1. とても賛成	4.9	6.3	3.2	5.2	5.2	1.3
		2. かなり賛成	7.8	9.7	5.6	9.5	6.6	2.6
		3. どちらともいえない	51.6	51.2	52.4	50.0	52.5	58.8
		4. やや反対	20.9	19.3	22.9	21.0	19.3	28.1
		5. ぜったい反対	14.7	13.4	15.9	14.3	16.3	9.2
絶滅しか けた野生 動物を 人工繁殖 させる	1. とても賛成	19.4	25.3	12.6	21.0	18.6	13.2	
	2. かなり賛成	25.9	25.6	26.2	25.3	26.5	26.3	
	3. どちらともいえない	37.1	31.7	43.3	36.5	37.4	39.5	
	4. やや反対	12.0	10.6	13.7	10.9	13.0	15.1	
	5. ぜったい反対	5.6	6.8	4.2	6.3	4.4	5.9	
住民に 被害を 与える 有害鳥 獣を 駆除する	1. とても賛成	3.6	5.5	1.4	4.0	3.2	3.3	
	2. かなり賛成	5.0	6.6	3.3	5.7	5.1	1.3	
	3. どちらともいえない	35.2	33.3	37.4	36.7	32.4	38.8	
	4. やや反対	31.1	28.4	34.3	29.5	31.8	38.2	
	5. ぜったい反対	25.0	26.2	23.6	24.2	27.6	18.4	
都市計画 による 森林 破壊も 仕方 がない	1. とても賛成	2.5	3.9	0.9	2.6	2.5	1.3	
	2. かなり賛成	2.9	4.4	1.3	3.4	2.9	0.7	
	3. どちらともいえない	16.8	18.4	15.2	15.9	20.0	9.8	
	4. やや反対	29.3	26.9	32.2	28.5	28.5	37.9	
	5. ぜったい反対	48.4	46.5	50.4	49.5	46.1	50.3	
生活のため なら大量 消費も やむを得 ない	1. とても賛成	2.9	4.5	0.9	3.1	2.4	3.3	
	2. かなり賛成	4.1	5.6	2.3	3.9	4.1	5.2	
	3. どちらともいえない	24.0	27.3	20.4	23.8	24.5	24.2	
	4. やや反対	32.1	27.6	37.0	31.0	32.9	34.6	
	5. ぜったい反対	37.0	34.9	39.3	38.3	36.2	32.7	
23	将来の地球 環境に 対して、 どう 感じる か	1. とても楽観している	3.8	5.1	2.3	4.2	3.5	2.6
		2. かなり楽観している	10.7	12.3	8.8	11.9	9.6	7.8
		3. あまり楽観していない	41.6	40.5	43.0	42.2	40.6	43.1
		4. まったく楽観していない	31.2	30.7	31.8	27.2	35.5	35.9
		5. わからない	12.6	11.4	14.1	14.4	10.7	10.5
24	ボランティア 活動の 経験	参加 1. ある	14.2	12.5	16.0	12.8	15.5	16.0
		不参加 2. ない	85.8	87.5	84.0	87.2	84.5	84.0
		1. ある	30.9	24.8	37.4	33.7	27.1	31.1
		2. ない	69.1	75.2	62.6	66.3	72.9	68.9
		1. ある	53.3	51.4	55.3	54.2	53.7	46.6
		2. ない	46.7	48.6	44.7	45.8	46.3	53.4

資料2 学年・性別集計表

質問項目		全体	性別		学年別				
			男子	女子	1年	2年	3年		
24	参加のきっかけ	1. ある	24.0	24.2	23.9	23.9	26.2	16.0	
		2. ない	76.0	75.8	76.1	76.1	73.8	84.0	
	日数	高校での経験	1. 1日	33.7	29.2	39.1	29.3	34.6	45.8
		2. 2日	26.6	27.3	25.8	20.2	32.1	16.7	
		3. 3日	14.5	21.4	6.3	17.2	12.6	16.7	
		4. 4～9日	16.0	12.8	19.6	18.2	14.4	16.6	
		5. 10日以上	9.2	9.3	9.2	15.1	6.3	4.2	
	ボラントウ	充実感があった	1. とてもそう思う	36.3	26.7	46.3	36.9	36.1	30.6
			2. 少しそう思う	43.2	44.8	41.8	42.2	42.8	52.8
			3. あまりそう思わない	15.3	19.8	10.5	14.6	16.9	12.5
			4. まったくそう思わない	5.3	8.7	1.5	6.3	4.2	4.2
	ボラントウ	大変だった	1. とてもそう思う	41.0	41.9	39.8	42.1	39.3	41.7
			2. 少しそう思う	40.7	37.8	43.9	40.2	39.9	47.2
			3. あまりそう思わない	14.4	15.0	13.8	12.3	17.8	11.1
			4. まったくそう思わない	3.9	5.3	2.5	5.3	3.0	
	ボラントウ	社会勉強になった	1. とてもそう思う	24.3	18.7	30.6	25.6	23.6	20.8
			2. 少しそう思う	39.2	36.4	42.1	37.7	37.8	54.2
			3. あまりそう思わない	26.9	31.1	22.3	26.3	29.3	19.4
			4. まったくそう思わない	9.6	13.8	5.0	10.5	9.4	5.6
	ボラントウ	人と接する機会が多かった	1. とてもそう思う	29.1	20.3	38.3	29.5	28.4	27.8
			2. 少しそう思う	32.3	32.5	32.3	32.6	31.4	36.1
			3. あまりそう思わない	28.2	31.8	24.3	26.7	29.3	31.9
			4. まったくそう思わない	10.4	15.4	5.0	11.2	10.9	4.2
	ボラントウ	社会や人のために役にたてた	1. とてもそう思う	29.8	25.8	34.2	31.0	28.4	29.2
2. 少しそう思う			44.3	43.5	45.0	43.8	44.7	44.4	
3. あまりそう思わない			19.2	20.7	17.6	17.2	20.5	25.0	
4. まったくそう思わない			6.7	9.9	3.3	7.9	6.3	1.4	
ボラントウ	機会があったらまたやりたい	1. とてもそう思う	24.6	15.2	34.8	24.4	25.4	22.2	
		2. 少しそう思う	42.6	41.5	43.9	43.3	40.2	50.0	
		3. あまりそう思わない	22.8	29.3	15.8	20.7	25.1	25.0	
		4. まったくそう思わない	9.9	14.1	5.5	11.6	9.4	2.8	
ボラントウ	違うボランティアを試してみたい	1. とてもそう思う	28.6	19.6	38.4	29.1	29.0	23.6	
		2. 少しそう思う	38.7	35.7	42.2	37.3	39.0	47.2	
		3. あまりそう思わない	22.9	31.1	13.8	23.3	21.1	27.8	
		4. まったくそう思わない	9.8	13.6	5.5	10.3	10.9	1.4	
ボラントウ	ボランティア活動をやってみたい	1. ぜひやりたい	7.6	5.8	9.9	6.9	9.2	4.7	
		2. できたらやりたい	47.6	38.6	59.7	45.4	50.4	49.4	
		3. あまりやりたくない	31.2	36.3	24.5	32.7	28.6	34.1	
		4. やりたくない	13.6	19.3	5.9	15.1	11.8	11.8	
25	ボランティア活動は増えていくか	1. とても増える	18.2	15.6	21.1	17.6	19.1	17.9	
		2. かなり増える	45.0	43.2	46.9	41.5	47.6	54.3	
		3. 少し増える	28.6	31.0	25.9	30.5	27.2	23.8	
		4. あまり増えない	8.2	10.1	6.0	10.4	6.1	4.0	
26	ボランティア活動を増やしてほしい	1. そう思う	65.9	56.5	76.6	63.6	69.4	65.1	
		2. そう思わない	34.1	43.5	23.4	36.4	30.6	34.9	
27	ボランティア活動を取り入れる	1. 取り入れるべきだ	44.8	39.4	51.2	41.0	50.5	45.1	
		2. 取り入れるべきではない	13.7	18.9	7.8	14.9	12.7	10.5	
		3. どちらともいえない	41.5	41.7	41.0	44.1	36.9	44.4	
28	ボランティア活動を減らさず維持してほしい	1. そう思う	75.4	66.6	85.2	73.6	77.6	76.3	
		2. そう思わない	24.6	33.4	14.7	26.4	22.4	23.7	

資料2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
29	ボラン テイ ア活 動に つ い て の 考 え 方	個人で自主的にするべき	1. とてもそう思う	33.1	37.3	28.2	32.1	34.5	32.0
			2. 少しそう思う	38.1	34.6	42.1	38.3	36.8	42.5
			3. あまりそう思わない	25.2	23.4	27.3	25.5	25.2	24.1
			4. まったくそう思わない	3.6	4.7	2.3	4.0	3.5	1.3
	めにするもの	1. とてもそう思う	20.6	19.2	22.3	17.8	23.3	26.1	
		2. 少しそう思う	37.8	32.8	43.6	36.1	40.7	35.9	
		3. あまりそう思わない	32.9	35.5	29.8	37.2	27.4	30.1	
		4. まったくそう思わない	8.7	12.5	4.3	8.9	8.5	7.8	
	参加する余裕がない	1. とてもそう思う	31.9	31.9	31.9	29.0	36.3	30.7	
		2. 少しそう思う	41.3	39.7	43.0	40.3	42.3	42.5	
		3. あまりそう思わない	21.4	22.0	20.8	24.1	17.9	20.9	
		4. まったくそう思わない	5.4	6.4	4.3	6.7	3.5	5.9	
	はおかしい	1. とてもそう思う	32.4	34.9	29.5	31.6	33.9	30.7	
		2. 少しそう思う	39.8	33.5	47.1	39.2	38.9	47.7	
		3. あまりそう思わない	22.0	22.8	20.9	22.0	22.5	19.6	
		4. まったくそう思わない	5.8	8.7	2.5	7.2	4.7	2.0	
	照れくさい	1. とてもそう思う	9.5	13.1	5.6	8.8	11.8	4.6	
		2. 少しそう思う	41.2	42.3	39.8	39.8	41.6	46.7	
		3. あまりそう思わない	36.8	32.0	42.4	36.9	36.4	38.8	
		4. まったくそう思わない	12.5	12.6	12.2	14.5	10.2	9.9	
まだ日本では定着していない	1. とてもそう思う	42.6	41.9	43.2	39.4	47.1	42.1		
	2. 少しそう思う	45.0	42.3	48.1	45.5	43.8	47.4		
	3. あまりそう思わない	11.2	13.5	8.6	13.6	8.1	9.9		
	4. まったくそう思わない	1.3	2.3	0.1	1.6	1.0	0.7		
社会の一員としての義務	1. とてもそう思う	16.2	13.9	18.9	15.9	16.7	16.3		
	2. 少しそう思う	41.4	35.7	47.7	38.4	45.1	43.1		
	3. あまりそう思わない	32.4	36.1	28.2	33.6	30.7	32.0		
	4. まったくそう思わない	10.1	14.3	5.2	12.1	7.5	8.5		
30	親しい友人の数	1. 1人もいない	3.9	5.7	1.8	4.8	3.2	1.3	
		2. 1人いる	2.2	1.5	3.1	2.1	1.4	6.5	
		3. 2～3人いる	21.5	17.0	26.5	20.0	22.2	26.6	
		4. 5～6人いる	35.6	34.1	37.1	33.0	38.1	39.0	
		5. 7～8人いる	16.4	16.0	16.8	17.4	15.2	15.6	
		6. 10人以上いる	20.5	25.6	14.7	22.6	19.9	11.0	
31	友人が学校で松葉づえをつかねばならない	友人なら最も親しい	1. いつもカバンを持ってあげる	56.8	39.2	77.1	57.4	56.0	57.8
			2. ときどきカバンを持ってあげる	30.7	39.9	20.0	29.1	32.3	31.8
			3. たまにカバンを持ってあげる	7.3	11.9	2.0	7.9	6.8	5.8
			4. 特に何もしない	5.2	9.0	0.9	5.5	4.9	4.5
	クラスメート	特に親しくない	1. いつもカバンを持ってあげる	9.9	10.9	8.7	11.8	8.2	5.8
			2. ときどきカバンを持ってあげる	30.4	20.9	41.4	30.7	31.5	24.7
			3. たまにカバンを持ってあげる	35.8	35.4	36.5	34.4	37.2	39.6
			4. 特に何もしない	23.9	32.8	13.4	23.1	23.1	29.9
	自分だけがをしたら友人に	自分の意見を主張	1. いつもカバンを持ってほしい	20.9	19.5	22.6	22.7	21.0	11.0
			2. ときどきカバンを持ってほしい	32.9	26.2	40.4	32.7	32.3	35.7
			3. たまにカバンを持ってほしい	21.9	21.9	22.0	19.9	25.0	20.8
			4. 特に何もしてくれなくてもよい	24.3	32.4	15.0	24.7	21.7	32.5
32	友人に対してできること	1. きっとできる	31.9	33.1	30.4	30.6	34.3	29.0	
		2. たぶんでできる	47.8	46.4	49.6	49.7	46.1	44.5	
		3. たぶんでできない	18.8	18.1	19.4	17.8	18.3	25.8	
		4. まったくできない	1.6	2.4	0.6	1.9	1.3	0.6	

資料2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
32	友人に 対して できる こと	いじめられて るとき 助ける	1. きっとできる	20.5	19.8	21.1	20.3	21.3	17.4
			2. たぶんできる	48.2	42.7	54.5	47.0	49.1	51.6
			3. たぶんできない	27.6	32.0	22.8	28.0	26.6	30.3
			4. まったくできない	3.7	5.4	1.7	4.7	3.0	0.6
		責任ある 仕事を 引き受ける	1. きっとできる	10.4	9.5	11.6	11.0	11.1	4.5
			2. たぶんできる	29.7	27.3	32.5	27.7	31.8	33.1
			3. たぶんできない	47.0	45.0	49.2	46.8	47.1	48.1
			4. まったくできない	12.8	18.2	6.7	14.5	10.0	14.3
	友だちに 素直 に あやまる	1. きっとできる	35.5	33.0	38.6	35.7	36.7	30.3	
		2. たぶんできる	51.9	51.3	52.6	52.0	50.0	58.7	
		3. たぶんできない	10.1	11.7	8.4	9.2	11.4	10.3	
		4. まったくできない	2.5	4.0	0.5	3.1	1.9	0.6	
	いじめを めさせる や	1. きっとできる	16.3	14.7	18.0	16.0	17.4	13.0	
		2. たぶんできる	45.7	43.1	48.9	43.6	46.5	55.8	
		3. たぶんできない	33.5	35.3	31.4	34.8	32.6	29.2	
		4. まったくできない	4.4	6.9	1.7	5.6	3.5	1.9	
同級生と 協力し て 仕事を する	1. きっとできる	23.9	19.9	28.6	23.0	25.8	21.4		
	2. たぶんできる	55.2	52.1	58.7	55.8	53.0	61.0		
	3. たぶんできない	16.3	20.7	11.3	16.7	16.7	12.3		
	4. まったくできない	4.6	7.3	1.4	4.5	4.5	5.2		
友だちの 間違 いを 指摘する	1. きっとできる	18.3	19.6	16.9	17.9	19.8	14.8		
	2. たぶんできる	46.4	45.6	47.2	48.2	44.8	41.9		
	3. たぶんできない	30.3	28.2	32.8	28.6	30.5	40.0		
	4. まったくできない	5.0	6.7	3.1	5.3	4.9	3.2		
33	どの くらい いい う れ し い か	いい成績	1. とてもうれしい	61.9	54.1	70.7	64.4	59.7	56.5
			2. わりとうれしい	32.0	36.5	26.8	28.9	35.1	37.0
			3. あまりうれしくない	4.1	6.0	2.1	4.4	3.7	4.5
			4. ぜんぜんうれしくない	2.0	3.4	0.4	2.3	1.6	1.9
		家族の 人の 病 気が 治った	1. とてもうれしい	56.4	46.1	67.9	54.0	57.9	63.0
			2. わりとうれしい	36.0	41.9	29.3	36.9	35.0	35.1
			3. あまりうれしくない	5.5	8.5	2.2	6.3	5.7	0.6
			4. ぜんぜんうれしくない	2.2	3.5	0.6	2.8	1.4	1.3
	友だちが 好きな 人 と つき あ え た	1. とてもうれしい	37.7	23.4	53.7	37.0	38.0	39.9	
		2. わりとうれしい	43.0	46.3	39.3	42.8	42.9	44.4	
		3. あまりうれしくない	10.8	15.7	5.4	11.0	10.7	11.1	
		4. ぜんぜんうれしくない	8.6	14.7	1.5	9.2	8.5	4.6	
	クラス の 優 勝 部 が	1. とてもうれしい	58.4	45.3	73.3	53.6	64.9	59.4	
		2. わりとうれしい	30.8	37.2	23.5	32.5	28.6	29.7	
		3. あまりうれしくない	7.1	11.3	2.2	8.7	4.6	7.1	
		4. ぜんぜんうれしくない	3.8	6.2	1.0	5.1	1.9	3.9	
学校の 野 球 部 が 優 勝	1. とてもうれしい	39.1	33.7	45.1	35.1	42.7	46.5		
	2. わりとうれしい	44.6	43.0	46.4	45.2	43.5	45.2		
	3. あまりうれしくない	10.7	14.2	6.7	12.9	9.0	4.5		
	4. ぜんぜんうれしくない	5.7	9.1	1.8	6.7	4.8	3.9		
地元の 代 表 が 優 勝	1. とてもうれしい	39.1	33.0	46.0	36.4	42.7	39.4		
	2. わりとうれしい	40.1	38.4	42.1	40.2	38.7	45.8		
	3. あまりうれしくない	12.6	15.7	9.1	14.2	11.4	8.4		
	4. ぜんぜんうれしくない	8.1	12.9	2.8	9.2	7.1	6.5		
日本の 選 手 が 金 メ ダ ル	1. とてもうれしい	26.5	27.3	25.4	24.5	29.0	27.1		
	2. わりとうれしい	51.3	45.5	57.9	51.0	50.5	56.8		
	3. あまりうれしくない	14.9	16.6	13.1	16.3	14.0	11.0		
	4. ぜんぜんうれしくない	7.3	10.6	3.6	8.3	6.5	5.2		

資料2 学年・性別集計表

質問項目			全 体	性 別		学 年 別			
				男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	
33	うど れの しく いら かい	核 兵 器 全 廃	1. とてもうれしい	52.2	47.3	57.8	48.8	55.8	57.4
			2. わりとうれしい	34.5	34.5	34.7	34.8	33.5	37.4
			3. あまりうれしくない	8.9	10.8	6.4	10.9	7.3	2.6
			4. ぜんぜんうれしくない	4.4	7.3	1.2	5.6	3.3	2.6
34	ど の 程 度 、 大 切 な も の か	自 分	1. とても大切	66.1	67.3	64.6	63.9	69.2	65.6
			2. わりと大切	25.5	22.4	29.0	27.6	22.7	24.7
			3. あまり大切でない	5.8	6.3	5.3	5.6	6.2	5.8
			4. ぜんぜん大切でない	2.6	4.0	1.2	3.0	1.9	3.9
		家 族	1. とても大切	67.0	58.0	77.3	66.3	66.9	72.1
			2. わりと大切	27.3	33.7	20.0	27.7	27.5	24.0
			3. あまり大切でない	4.3	5.9	2.4	4.3	4.9	1.3
			4. ぜんぜん大切でない	1.4	2.4	0.3	1.7	0.6	2.6
		友 だ ち	1. とても大切	76.9	67.6	87.7	75.5	77.7	83.1
			2. わりと大切	20.0	27.0	11.8	21.1	19.1	16.2
			3. あまり大切でない	1.9	3.1	0.4	1.8	2.2	
			4. ぜんぜん大切でない	1.3	2.3	0.1	1.6	1.0	0.6
		ク ラ ス	1. とても大切	26.6	27.7	25.4	25.8	30.5	15.6
			2. わりと大切	51.8	45.8	58.5	50.9	50.2	63.0
			3. あまり大切でない	15.8	18.3	12.9	17.1	14.1	14.9
			4. ぜんぜん大切でない	5.8	8.2	3.2	6.2	5.1	6.5
		通 つ て い る 学 校	1. とても大切	12.5	12.3	12.7	10.8	15.4	10.4
			2. わりと大切	41.4	34.6	49.2	41.6	37.4	57.8
			3. あまり大切でない	28.9	30.0	27.5	27.1	32.4	24.0
			4. ぜんぜん大切でない	17.2	23.1	10.6	20.6	14.8	7.8
		住 ん で い る 地 域	1. とても大切	23.3	23.7	22.8	23.9	24.0	16.9
			2. わりと大切	51.1	46.7	56.4	51.2	48.7	61.7
			3. あまり大切でない	19.0	20.5	16.9	18.5	20.7	13.0
			4. ぜんぜん大切でない	6.6	9.1	3.8	6.4	6.5	8.4
		国 (日 本)	1. とても大切	27.4	25.7	29.3	27.9	27.2	25.5
			2. わりと大切	43.7	39.2	49.0	42.5	43.2	53.6
			3. あまり大切でない	19.2	20.8	17.4	19.7	20.0	13.1
			4. ぜんぜん大切でない	9.6	14.3	4.3	10.0	9.5	7.8
		地 球 ・ 人 類	1. とても大切	54.5	49.9	59.6	54.1	56.3	49.0
			2. わりと大切	31.4	30.8	32.3	31.0	30.8	37.3
			3. あまり大切でない	9.3	12.2	5.9	9.4	9.1	9.2
			4. ぜんぜん大切でない	4.7	7.0	2.2	5.4	3.8	4.6
宇 宙	1. とても大切	48.2	47.9	48.3	49.0	48.0	43.3		
	2. わりと大切	33.4	29.5	38.1	32.5	32.7	42.7		
	3. あまり大切でない	12.0	13.1	10.8	11.8	12.9	9.3		
	4. ぜんぜん大切でない	6.4	9.6	2.8	6.7	6.4	4.7		